

ISに振り回されて平穩が遠い

風呂

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

テキストに、テキストに。

よくあるセカンドマンが主人公の話です。

アルカディアの方でも投稿しております。

あと、タグって他に何かつけたほうが良いんですかね？

その 1 2	その 1 1	その 1 0	その 9	その 8	その 7	その 6	その 5	その 4	その 3	その 2	その 1
150	138	119	101	88	74	59	44	31	16	7	1

目次

## その1

これは一体どういう事なんですかねえ？

ほんとさーもうさー、理解が追いつかねえっての。

現在、某所にある無駄に入り組んだ構造の市民ホールの一室で、名前も知らない他校の同級生と共に大勢に囲まれていた。

まあこれがまた完全包囲網というかなんというか。殺気立ってて逃がす気ねえなマジで。

成人した男女が十重二十重で中坊二人にすんごい目つきで囲んでるんだから、そりゃあもうビビって動けなくなること請け合いだ。

つーか、俺はたまたま居合わせただけなんすけど。どっちかかっていうとそっちの立場なはずなんすけど？

と、半ば現実逃避してるとそんな雰囲気にあてられてか、隣の同級生男子（仮）が、

「うあ、ええと、……これ、どうなってるんだ？」

とか言いながら縋るような目つきでこっちを見下ろしてくるが、いやいやアンタ、俺が聞きたいし原因お前だし。

ぶっちゃけ、こうなった理由は簡単なのだ。

ただ性質の悪いことにその理屈が俺達は勿論のこと、周りの連中にもわからないってのが問題だけだ。

隣を見て思う。

ホントさ、お前なんでIS動かしてんのさ？

とりあえずこの状況を頭の中で整理する為というか、現実を受け入れる為というか、ちよつと朝からの出来事を思い返したいと思いません。

まず、目覚ましの五分前に起床。

朝が弱い俺としてはかなり珍しい出来事。幸先良いかもと思つてたこの時の俺が心底恨めしい。

で、飯食って高校入試の会場である市民ホールまで寒い中を早歩き。

周りには参考書を見ながら歩いている奴が何人もいたが、こんな寒いで参考書読んでも頭に入るわけないし危険だからやめようぜ？ 昨日の夜に降った雪がちよつと積もってるしき。転んで怪我しても知らねえよ？

で、正門にいた守衛さんになんとなく頭を下げつつ会場に到着。受験票と案内図を見て目的地を確認してから奥に進む。

途中、道に迷ったらしいスポルディングのバッグを持った女子を発見。

なんの気まぐれか自分でもわからないが、忍びないので道案内をかって出る。

道中お互いの緊張をほぐす為に雑談を少々。

なんでも、かのIS学園を受験するそう。という事は頭良いのかーエリートなのかー、と冗談交じりに言うと、「そんなことはないよ」と返事。

おお、女尊男卑な世の中なのになんと謙虚な。

なんでも世間で言われる女尊男卑はテレビで大きに言われるだけで一部を除いてそこまで酷くはないらしい。

やっぱそんなものなのか。うちの中学でもうるさく言ってるの数人だけだったしなあ。

「つと、ここまで来ればあとは分かるだろ？」

「うん、ありがとう助かったよ」

「おう、頑張れよ」

「そつちもね」

そう手を振って自分の行くべきところに向かう彼女。

こつちもそれに手を挙げて応え、背を向けて歩き出す。

将来もし彼女が有名になったら、目で追いかけるくらいはしようかねと思ってくらいには可愛かった。

「つて、そんなこと考えてる場合でもないか」

腕時計で確認すると、そこまで余裕のある時間でもなくなっていた。無駄に入り組んで時間がかかるな、こつち。

毒づきながらも歩を進める俺であった。

……ここまでは普通にある出来事として片付くことだ。ここまでは。問題はここからだった。

「うう……道に迷った。なんて複雑な構造なんだここは？」

横道からそんな声が聞こえてきたので覗いてみるとまたもや他校の生徒が。

「またかー」

俺と同じ受験生で受験票片手に渋い顔をしている男子はどう見ても迷子っぽそうで。

どうやら半ば自棄になっているらしく、目に付く扉を片っ端から開けては落胆、開けては落胆を繰り返していた。

さつきと無視して通り過ぎても良かったがさつきの女子を助けた手前、そしてそいつの必死な顔を見て、声をかけることにした。

ここで見捨てても後味悪いしな。

「おーい、そのの……んん？」

今まで動きを止めることのなかった彼が、扉を開けた姿勢のまま固まっていた。

訝しみながらも俺はそいつの傍まで歩き、声をかける。

「なあ、お前も受験生なんだろ？ 試験場所があっちだ、ぜ……？」

言葉を放ちながらも、なんとなくその部屋の中の様子が気になり視線をそちらに向ける。

するとそこには、

「アイ、エス……？」

照明が落ちていて薄暗い室内、その最も奥にそれはあった。

鎧武者を思わせるそのフォルムはあまり詳しくない俺でも知っている、日本の第二世代型IS、打鉄のそれだ。

なぜこんなものがここに？ という疑問が浮かぶがそれはすぐに氷解する。

ここではIS学園の筆記試験もやっているのだ。IS学園受験生向けのデモンストラーション用と考えれば一応の説明もつく。

しかしなんの警備もセキュリティもなしにこんなところにあるの

は、おかしくね?　とも思うけど。

そんなことを考えていたら、ふらつと横にいたはずの某君がISに近づいていく。

「お、おい、お前……!」

呼び止めるも、こちらの声が聞こえてないのか、その歩みを止めない。

追って俺も室内に入るが、怒られないか?　いや、見つかったら確実に怒られるぞ。

そんな心配をする俺を完全無視して(良い子の皆は真似しちやダメだぜ。なぜなら俺が涙目になるから)、彼は打鉄に触れる。

そして、ありえないことが起こった。いや、実際に起こってしまったのだから、有り得ないとされていたこと、か。

そんな言葉遊びはともかく。

彼が打鉄に触れた瞬間、ISから薄暗い部屋を白く染め上げるほどの光が発せられた。

それは薄暗闇に慣れ始めた俺の目には痛みを伴うくらいの強烈さで、思わず目を背けてしまう。

十秒かそこらだろうか。体感時間では倍くらいに感じた発光現象は徐々におさまり、視界が戻ってくる。

そしてその視界の中心に馬鹿がいた。

ああ、馬鹿で十分だ。男でISを起動させるなんて馬鹿か天才のどちらかだ。そしてあいつはどう見ても天才には見えない。だから馬鹿でいい。

「な、な……、何やってんだよお前!」

「へ?　何って……うわっ!?　なにがどうなってるんだコレ!」

動かした本人も訳がわかっていないらしく、慌てふためくばかりだ。だがこんな狭いところでISで暴れられても困るので、俺は馬鹿を落ち着かせるために近づいていく。

と、後ろから女性の声が聞こえてきた。

「ちよつと、アナタたち!　何をやっている、の……え?　男がISを?　ちよ、ちよつと誰か来て!!」

この部屋に入ってくるということはIS学園の関係者だろうか。スーツ姿の女性が入口から俺たち二人を見て叫んでいた。

そして五分もしないうちに大人数が押し寄せ寄せてきて、冒頭に至ると言うわけだ。

回想終わり。そしてようこそ現実。……全然嬉しくねえよチクシヨウ！

「と、ともかく、その男子生徒！ 早くそれから降りなさい!!」

俺たちを囲む集団のどこからか、そんな声がかかってきた。

「だつてさ。とりあえず降りろよお前。あと、変なスイッチ押ししていきなり飛んだりするなよ？ マジであぶねえから」

「わかつてるよー」

そんなやりとりをしつつ、馬鹿はISから降りる。

そこからは猛烈な質問攻めだ。なんせ史上初、男でISを動かしたのだから。質問の嵐にタジタジになっているが、まあこれからのことを考えると序の口がすぎるだろうし精々頑張ってくれ、としか言えないな。

とまあ所謂、歴史的瞬間つてやつを目撃した俺は、他人事と言わんばかりに横目で状況を見ていた。

俺？ 俺は質問責めに晒されなかったのかつて？

そんなもん、

「俺は見てただけっスよ！ こいつがISに触れた瞬間、すんげえ光ったかと思つたらもう乗つてたんっスよ!?! いやマジで!」

なんて大振りのジェスチャーを交えつつ頭の悪い解答をしたら見向きもされなくなりましたよ。その際、馬鹿が何とも言えない表情でこつちを見たような気がしたけど俺は知らん。

それにしても、と打鉄を見て思う。

ホント、なんで動いたんだろうな、コレ。乗った本人は全く訳がわかってなさそうだから、何かあるとしたらISの方にありそうだけど。

打鉄の装甲に触れてみる。

どうせこれから先、ISに触れる機会なんてないだろうから、とか、



この騒動のせいで受験受けそこねたな、とか、歴史的瞬間に立ち会ったかもしれないけど、俺には何もしようもねえよな、とか、益体のないことを考えながらなんとなく触っただけなんだ。

だから、

「……………ジーザス」

だから、起動してしまったISに乗った俺が思わずそう呟いても、いいよな？

## その2

二月上旬、藍越学園及びI S学園の入試試験会場である某市民ホールで起こった、『男子によるI S起動事件』は日本を、いや世界を騒がせた。

なんせ、I Sは女性にしか扱うことができないとされていたからだ。

【白騎士事件】という世界を震撼させた大事件とともにI Sが登場して十年。その定説が覆されることはなかった。

その間、幾度となくI Sに男を乗せようと世界中の科学者が挑戦したが、その全ては無駄に終わった。夢のまた夢、と半ば匙が投げられていたのだ。

その最中、この事件を起こした二人の少年に世界中の関心の目が向くことは無理からぬことであった。

「……なーんてさ、んなことテレビで言われても、当事者の俺にどーしろと」

俺は冬に食べきれなかったみかんを頬張りながら、テレビに映る俺と織斑一夏の顔写真をぼけーと眺めていた。

時刻は午後七時を過ぎた頃。場所は我が家の居間である。

五階建て集合団地最上階角の2DK、そこが十五年の人生を両親と共に過ごした愛しのマイホームだった。

今の俺は盛大に鬱状態だった。最近のデフォルトである。

脳裏をよぎるのは、ここ二ヶ月ほどの情景だ。

役人に連行されて関係各所をたらい回しにされ、どこその研究機関で散々検査やら調査やらで身体を弄り回される毎日。

それに有名税という言葉が人生で初めて骨身にしみた。

家から一步外を出ればマスコミ連中との素敵な追いかけてっこ、学校では学友たちによる有難い質問攻め、街に買い物に行こうものならば知りもしないオバサンたちを筆頭に黄色い声援をいただくという、素晴らしい毎日。街で有名人を見かけてもスルーしてあげるのが情けだと悟った。

そんな感じでISを起動してしまつてから暫くゴタゴタが続いた日々だったが、最近になつて漸く落ち着いてきた次第である。

まあお陰様で？ 軽い引きこもりになつてしまい、することないからIS学園に強制入学させられるという事態に備えてそこそこ勉強出来て良かったのではなからうか？ と無理矢理にでもポジティブに考えないとやつてられなかった。

「あー、そろそろ飯にすつか」

テレビのチャンネルを変えてたら、いい感じに腹が減つてきた。

ずっと座りっぱなしで固くなつていた身体を解しつつ、夕食の準備をする。

献立は一昨日に母さんが作ってくれたカレーと、コンビニサラダというシンプルなもの。

鍋に入っているルーを温め直し、あらかじめ炊いておいた白米にかけて冷蔵庫に入っているサラダを取り出せば完成というお手軽料理。

それとお茶を出すのを忘れていたので最後に用意して、これで完璧。

「いただきます」

しつかり手を合わせて、いざ実食。

……うん、やっぱ美味しいな。

父さんの好みに合わせて、すりおろしたりんごが入った我が家オリジナルカレーだ。

少々甘くはあるが十二分に美味しいと言える、所謂おふくろの味である。

ガツガツと勢いよく食べていたが、スプーンを動かす手がふと止まる。

「……………」

視線がカレーから外れ、宙を漂う。

暫くは母さんの料理、食えなくなるんだよなあ。

思わず小さく溜息を吐いてしまう。

実の所、既に両親はもうこの家にはいないのだ。

俺が下手をすれば命を狙われるレベルでの有名人になつてしまつ

たため、その直接の肉親になる二人は、重要人物保護プログラムが適用されてしまった。

準備期間を貰い親たちが家を出たのが一昨日のこと。その時、母さんが涙目になっていたのを見て、愛情持って育ててくれたんだなあ、なんて思ったり。

父さんとは俺がいないからって二人目こさえんなよ、と冗談言っておいただけが男同士なんてあんなもんでいいと思う。

特にベツタバタの親子関係という訳じゃなかったけど、いきなりいなくなるとそれはそれでなんとなく物足りないものだということを知った、良い経験なんじゃなからうか。

たまたま親離れするのが他よりちよつと早かっただけなんだし。

次に会えるのは一体何年後だろうとか、不安に思うところもあるけれど。

それに明日からは両親のことじゃなくて、自分のこれからを考えなければいけないんだ。

そう、明日からIS学園学生寮の入寮日なのだ。

既に荷物は送り、書類手続きとかそういうのは問題ないのだが、どうにも嫌な予感しかない。

考えなくても当然だが、IS学園というのは世界で唯一のISについて学ぶ学校である。当然、そこで勉強に励む子供はISに乗る適正がある子供達である。ここで大前提として、例外はあれど（その例外のうち一人が俺というのは甚だ疑問ではあるが）ISは女しか乗れない。ということは必然的に学生寮には女子しか住んでないのである。

そんな授業中含め、二十四時間女子オンリーな場に男二人の片割れとして放り込まれるのである。しかも三年間。

……人生既に詰んだ気がするの俺だけでしょうか？

どれだけ想像しても順風満帆は高校生活を送れそうな気がしないんだよな。

絶対に何か、面倒くさい事件事故が起きそうで怖い。

あー、やだなー。行きたいくないな。面倒くさいのは御免で御座る。

まあね？ だからといってIS学園入学を拒否しても後ろ盾とかないし、人生BADEND直行的な雰囲気なんですが。

役人にも遠回しにそんなことを言われた。そうなるくらいならIS学園に入つてコネなり力なりつけて、最低限の自衛ができるようになったほうがいい、と。

やっぱりISを動かせる男子というのは、合法非合法問わず色々な人々に色々な目的で狙われる可能性が高いそうだな。

その点、IS学園に入れば少なくとも三年は変に敵を作らず、公けに守ることができそうな。

「とは言ってもなあ」

進むも地獄、退くも地獄。ということらしい。やっぱり詰んでるだろ、コレ。

ま、悲観ばかりしてても仕方ないし、俺にできることといえば、さつさと飯食つて風呂入って、明日からの生活に備えて寝ることだけだ。いやホント、どうなることやら。

そんなわけで、やってきました入学式当日。

寮に入ってから今日までどうしてたかといえば。

飯と生活必需品の確保の時以外、引きこもってました。

そんなどうでもいいことは置いといて。

今は学生寮から体育館まで歩き、そこで大人しく先生方の話を聞いて（聞き流して）いる状況なんですが。

何さ、これ。本当に女子しかいねえじゃん。

三百六十度、見渡す限り女女女。字面にすると姦しいだね！ いやいや、やっぱり来るとこ間違ったんじゃね？ と思うこと請け合いですある。

まずぼっち感が半端じゃない。場違いな気がしてならない。

まるでなんでもない平日に女子高を訪れたかのようだ。ああ、こっつて実質女子高でしたよねー。

しかし、生徒は仕方がないとして、教師陣もほぼ女性ってどういうことさ？

男性教師もいることにはいるが、どなたも年配の方々ばかり。これはあれか。世界各国から預かる子供達との間に間違いを犯させないための措置ってことなのか。

確かに、国を背負う将来有望な若者たちがどこぞの馬の骨ともわからん奴の毒牙にかかる、なんてことはあつてはならないのはわかるんだけどさ。

あれ？ そう考えると俺って……。

うん、これ以上はやめておこう。なんかとてつもなく危険な気がしてきた。

閑話休題。

女の園に放り込まれた哀れな子羊、の片割れであるところの織斑一夏氏（積極的に知ろうとしなかったせいもあるが事件の三日後に名前を知った）はどうしているかというところ。

「ねえねえ、君が織斑君なんだよね？」

「ハイ。オレノナマエハオリムカイチカダ、デス」

ああ、うん。気持ちはわかる。すんごいわかるけど、いくらなんでも動揺しすぎじゃないかな。

同じ哀れな子羊として、もう少ししっかりしてもらわないと頼りにならないじゃねーですか。

織斑の背中を斜め後ろから見ながら心の中で愚痴っていると、

「ねえ君、大丈夫？ 顔色悪いよ？」

隣にいた女子に声をかけられたので、

「はっは、大丈夫大丈夫。ぶっ倒れないのが不思議なくらいさ」

と、笑顔で即答しておいた。

微妙な顔をされました。

……駄目だわ、全く人のことが言えねえ。

だからさー、思春期真っ盛りの健全な男子高校生にはきついつてこれ。だからさー、思春期真っ盛りの健全な男子高校生にはきついつてこれ。

肩身が狭いというか、精神的に来るものがあるね。こう、胃の辺りが痛む感じに。

これが明日明後日辺りになると少しは慣れてくるんだろうけど、流

石に今日は無理っぽい。即応出来る奴がいたらそいつは男じゃねえ。男だとしても絶対どこかおかしいに決まっている。

そんな感じで男子生徒二人の心情などは全く関係なく入学式は無事に終わり、俺たちはこれから一年間通うことになる教室に移動した。

教室に入ると何やらデジタル黒板（正式名称不明）の前に人だけりが出来ていた。

「なにになに？ どしたん？」

「え？ ……あ、君は?!」

俺が近づくと、クラスメイトたちが皆、微妙に距離をとって黒板までの道を開けてくれた。なにこれ、モーゼ？

「いや、そんなあからさまに避けなくても……」

傷つくよ？ 俺だって傷つくんだからね？

まあ、お互い距離感とかわからないから仕方ないんだろうけど。そのうち普通に接してくれるようになると思うな……はは。

これからさ、これからなんだ。頑張れ俺。

で、だ。

近づいて黒板を見ると、

「あ、そゆこと」

なんてことはない。座席表が書かれていただけだった。

それぞれの国の言葉の上にローマ字やカタカナの振り仮名付きという親切ぶりである。

どれどれ？ 俺の席は……つと？

窓際の最後尾。それが俺の席だった。

おお、これは嬉しいね。

だって男女比1:30のこの空間で一日中女子の視線に晒されるなんて耐えられない。

例えば一番前のだ真ん中とかだったら確実にストレスで胃に穴が開く。というかそんな座席指定、悪意しか感じられない。

その点、この席ならいくら落ち着けるってもんだ。いつかみたい

に三百六十度囲まれるってこともないし。逆に言えば教室の角で逃げ場がないようだけど、それは気にしない方向で。

ともあれ少しホツとしつつ、自分の席に座る。

するとタイミングを見計らったように予鈴のチャイムが鳴った。

あと五分でホームルームが始まるということだ。

クラスの皆も、そわそわしつつもほとんどが席に座り始めた。

暫くして。

「おーおー、今年のヒョっ子共も元気でええなー」

「……そうですね」

そんな第一声とともに教師と思しき女性が二人、教室の扉を開けて入ってきた。

どっちもスーツ姿ではあるが、対照的な雰囲気を持つ二人だった。

生徒が全員席に着き、静かになったのを確認して、紫系のパンツスーツの女性が声を放つ。

「私の名前はナナコ・ブラックウエルや。これから一年間君ら一年二組の担任をすることになる。皆、これからよろしゅうなー」

そう言つて笑顔を浮かべるナナコ先生。笑っている時にちらりと見える八重歯がチャームポイントか。

腰まである長い金髪を後ろでくくつていて、大体俺と同じくらいだから百七十を超えたくらいの身長 of 所謂長身美人だ。

なんでもイングラント人の母と関西人の父（婿養子）を持つハーフらしい。喋り方もそれが影響しているそうな。

「自己紹介はこんなもんかな。そんなら次は木本センサー、よろしゅうな」

「分かりました。……このクラスの副担任をします、木本美南です。宜しく」

今度は黒のスーツを着た人だ。

こちらもナナコ先生に負けず劣らずの美人さんである。

身長はナナコ先生より十センチ近く低い百六十前半くらいか。ショートカットの内ハネ黒髪で、赤いアンダーリムのメガネが色合い的なアクセントになっている。



伶俐な雰囲気を持つ女性で、ナナコ先生のサバサバとしたそれとはまた違った方向でキャラが立っていた。

しかし見た目に反して武闘派で、何度も格闘大会で好成績を残したそうさ。

「次は君らのこと、センサーらに教えてーな。廊下側の子からいつてみよか」

先生たちの自己紹介が終わり、俺たち生徒の番になった。

順番に自己紹介を始める女子たちを見て、改めて国際色豊かだなと思う。

世界各国の I S 保有国及び、量産型（劣化版、模造品とも） I S である I S c を持つ国々から来るだけはある。

I S 学園のホストカントリーである日本は元より、アメリカ、カナダ、中国、ロシア、EU 諸国、インド等々、ここは世界見本市かと。

とは言っても先進国出身が多いのはご愛嬌か。

I S が登場して十年、I S c だって生まれてからまだ五年ほどしか経っていない。

発展途上国に I S が浸透するにはまだまだ時間がかかるのだから。

と、ネットで見た自称有識者の話を思い出していると、

「ほな、大トリは皆お待ちかねの男子 I S 操縦者くんにお問い合わせしよか！」

「えっ!?! ……あ、もう俺の番?」

どうやらぼうっとしすぎたようだ。いつの間にか俺以外の全員の挨拶は終わっていたらしい。

慌てて俺は立ち上がりそのまま自己紹介に入った。

「み、皆さん初めまして! 俺の名前はわたぶっ!」

盛大に舌を噛んだ。思わず口を抑えて涙目になる。

「……………」

ちよ、やめて。皆そんな目で見ないで! めちゃくちゃ恥ずかしいから!!

教室の温度が少し下がってその分、俺の体温が上がったのは気のせいじゃない筈。

といつてもこのまま沈黙していても気まずいので、痛みを我慢しつつ言葉を続ける。

「ああもう！ 今更俺について説明不要でしょ！ なんの因果かISを動かせたのでここにいます。皆、これから宜しく！」

なんとかそう繋げて、乱暴に椅子に座る。これ以上どうしろと。

### その3

さて、たった三年で卒業後に即戦力となる人材を育成しなければならぬ事情もあるIS学園では、新入生に対しても容赦なく入学式当日から授業がある。

なのでその授業レベルは必然的に高いものとなり、皆の授業態度もそれなりに真面目なもの、……なのではあるが。

しよ、初日でここまでレベル高いのかよ!?

冷や汗たらたら涙目状態で授業を受ける俺がいた。

正直なところ、一般の市立中学でそこそこの成績しか取ってこなかった俺にとって、割と真面目にギリギリだったりする。

普通科目でこれだ。IS関連の授業になったらどうなるかと戦慄する。

いや、春休みの間、あの電話帳並の分厚さのISの参考書で勉強したじゃないか。どうにかなるさ、多分、きつと。

とまあ、こんなふうな思考が微妙に授業から脱線しかけているのは、授業そのものの難解さとは別にもう一つ理由がある。

それは、

「おーおー。予想はしとったけど、元氣やねえ隣は」

英語の授業をしていたナナコ先生が、苦笑しながら一組の方を振り返りボヤクのも無理はない。

隣り、一組からの騒ぎ声が酷いのだ。

普段は静かなのはあるが時折凄く騒がしくなり、何故か打撃音と共に途切れて静まり返り、そしてしばらくするとまた騒がしくなる。というループを繰り返している。

「去年も一昨年もこうやったとは聞いてとったけど、これ程とはねえ」

「そうなんですか?」

「聞いた話によると、な。織斑センサーも大変やで」

クラスの中からナナコ先生へ疑問が飛ぶ。

それに対しナナコ先生は、「ちようどええし、休憩がてら雑談でもしよか」と授業用の情報デバイスを教壇に置く。

「せやな……、IS学園が設立されてから何年か知つとる？」

「四年です、先生」

廊下側の方の席から答えが飛ぶ。

「正解や。じゃあ第二回モンド・グロツソが開催されたのは？」

「確か、四年前です」

別のところから答えが出る。

「そうやね。この年は他にも色々あつてIS界限において結構重要な年やった訳やけど……つて、聞いたるか自分？」

「え？ あ、はい。聞いてます聞いてます」

いきなり呼ばれて驚いたが、聞いてはいるんですよ。さっきまでの授業内容を整理するのに必死だっただけで。

まあええわ、とナナコ先生は続ける。

「そんでな、その時織斑センサー、IS学園に誘われとつたらしいんやわ。勿論教師としてな？」

「そうなんすか？」

「おう。モンド・グロツソが終わつた時点でそのこと発表する筈やつたらしいで」

先生は軽く言つてはいるが、これは結構大事だったんじゃないだろうか。

考えてもみる。『第一回IS世界大会の総合優勝者』、IS関連でこれ以上のビッグネームを挙げろと言われたら、それこそ『ISの生みの親』くらいしか思いつけないほどのネームバリューだ。

これが実現していたら、日本は世界に対する発言力をもつと持てていただろう。そうしたら、IS学園の運営に始まり、もう少し今と比べて世界情勢的な待遇は良かったんじゃないだろうか。

しかし実際にはそうは問屋が下ろさないのが、現実の厳しいところ。

「でも先生、実際に織斑先生がIS学園の教師になったのつて二年前ですよ？」

隣に座つてる子が俺が感じたことを口にしてくれた。

近くというかすぐ傍なのでよく見ることができたが、中々可愛らし

い子だ。

肩くらいまである濃い目の茶色い髪に、アーモンド型の目をしてい  
る。

さつきからチラチラこちらを見てくるが、やはり俺が二人目の男子  
IS操縦者だからだろうか。それにしても他の子のように不躰な視  
線でもないんだよな。

それにどっかで見えた気がするんだよな。どうだったっけ？ と俺  
は首を傾げるが、その間にも雑談は進む。

「都下の言うた通りや。本来なら大会終わった翌年にはIS学園に入  
る筈やったんやけど、なんか色々あったらしくって更に一年経ってか  
ら教師になったんやて」

ここでナナコ先生は一区切り置き、クラス全員を見渡したあとに続  
けて言った。

「でな、ちよつと言つときたいことあんねん。自分らな、このこともそ  
うやけど何でもかんでも本人に聞くなや？ 織斑センサー自身、自分  
から言わへん人やし、ウチら周りの人間も必要以上には何も聞かへ  
ん。ただでさえ、ブリコンヒルデとか言われて、周りからワーキヤー  
言われとんのにこれ以上ストレス与えんなや？ あの人かて人間や。  
聞かれとうない話の一つや二つはあるんやからな」

そう言い切ると、ナナコ先生はそれまで割と真剣だった表情を崩  
し、いたずらっ子のような笑みを浮かべる。

去年一昨年はそういう方面で織斑先生は苦労していたらしい。そ  
れを見ていたナナコ先生はそれを鑑みて自分のクラスだけでもと、先  
に釘を指すことにしたんだそう。

「そんなかわり、授業で分からないところがあるとか相談事があるん  
やったらじゃんじゃん聞いたらええよ。その方が本人も嬉しいやろ  
うしな。勿論最初はウチや木本センサーにゆうてくれるとええけど  
な？」

「……………」

ここで、今言われたことに対して感想を述べたいと思う。

なんて出来た人なんだこの人。気配り完璧じゃねえか！ 俺は今、

猛烈に感動している！

そうだよな。ちよつと有名だからって根掘り葉掘り聞かれて嬉しい奴なんていないよな。

ISを動かしてから学園に来るまでのことを思い返せば無理からぬことだった。

あの時の辛さを織斑先生は年単位で耐えていたんだよな。体験した俺は言うに及ばず、今の話を聞いてちよつとでも思い至れば誰もおいそれと聞けないはずだ。

ナナコ先生みたいな人が担任で俺はなんて幸せ者だ！

感動で目尻に涙が浮かび、自然と立ち上がって拍手をした。スタンディングオベーションというやつだ。

「ナナコ先生、これからは姐さんと呼ばせてください！」

「いきなりなんやそれ？　ウチはナ〇ワ金融道かミ〇ミの帝王に出てくるキャラか」

「それを言うなら極〇の妻たちじゃないですか？　姐さん」

盛大に溜息をつけてナナコの姐さんは言った。

「とりあえず、姐さんはやめよか。色々台無しや」

自分から言い始めたことだが、なんだこのノリ。疲れてんのかな。「ですな」

と、相槌をうつて大いに頷く俺（とナナコ先生）であった。反省。

昼休みになった。

空を見上げれば、名前も知らない小鳥が元気そうに飛んでいて、春の暖かな陽気と合わせて俺の心を和ませる。

四時限目の授業が終わると同時に俺は教室を飛び出し、購買部へダッシュ。菓子パンと野菜ジュースを買ってから屋上に上がり、更に昇降口の屋根に登り一人腰を下ろしている次第である。

なんでこんなことをしているのかというと。

例によって例の如く、周りが非常にうつと……じゃなかった騒がしかったからだ。

一年二組の皆はナナコ先生の言葉に察してくれたのか、必要以上に

こちらに干渉してくることはなかったが、その他の皆さんはそうじゃないよねって話だ。

そういう感じの野次馬の方々も休み時間毎に廊下に現れるので、昼休みになればおちおち飯も食ってられないという予感がした。

考えすぎかとも思ったが、昼食を購入して屋上に来るまでに少し追いかけられたのであながち間違いじゃなかったらしい。

入学式初日から屋上まで足を運ぶ奴なんてそうそういないだろう、という予想も見事に当たって一安心だ。

ああ、やっぱり平穩が一番だよな。

一人のんびりと昼飯を食いつつ、つかの間の平穩を満喫していた。と、真下から昇降口の扉が開く音が響いてきた。

「……ッ!?!」

反射的に身を伏せた。

おいおいおい、マジか? マジですか!! まさか居場所がバレた?

まさかそんな筈は、と戦々恐々とする。

とりあえず、下からは見つからないように少しだけ顔を出し、誰がここにやってきたかを確認する。

果たしてそれは、見知らぬ女子生徒だった。

とはいえ、そもそもまだ入学したばかりの現段階で知っている人間なんて数限られているのではあるけれど。

後ろ姿しか見えないが、今日が入学式初日であることと、雰囲気からして同じ一年であろうとあたりを付ける。

上からじゃ分かりづらいが、多分結構背が低めだ。両サイドが大きくカーブしている内ハネ気味の髪型に、ISのヘッドパーツのようなものを頭に付けている。

その子は一度あたりを見渡したあと、屋上に設置されているベンチに真っ直ぐに向かい、わざわざ寮で作って持ってきたであろう弁当箱を広げた。

角度的にこちらからも見えるようになった顔は眼鏡がかけられて、ちよつと内気そうな表情をしていた。

……タイの色からして同じ一年だけど覚えのない奴だな。二組に

はいなかった筈だから、他のクラスの子か。

にしても俺じやあるまいし、わざわざ人気のない屋上にまで来て昼食なんて、奇特な奴もいるもんだと思う。

とにかく、俺の追っかけ（人気からという訳じゃないのが悲しいところ）では無さそうなので、ホッと一息つく。

しかし、逆に困ったことになった。

今からじゃ気まずさから下に降りられなくない。

彼女の顔が見えるということは、反対にこちらの姿も見えるということ。今はまだ隠れているからいいが、降りようとする姿を晒すことになり、それはちよつと、なんというか気恥ずかしい。

……仕方ない。あの子がいなくなるまで待つか。

見つかった場合、変なレッテル貼られそうでもあるしな。

そんな訳で、なんちやつてスニーキングミッション開始である。

暫くして。

「何だアレ、すげえ……」

俺は心の底から賞賛の声を上げていた。

今、目の前で起きている光景が理解できない。

いや、少し違うな。目の前の光景が現実にあるなんて俺の想像の外だったというだけの話だ。

事の起こりは眼前の少女が弁当を食べ終わり、徐ろに空間投射型のホロウインドウを開いた時から始まった。

遠目からでは分かりにくかったが、何かのプログラムだと思う。考えながらなのだろう。断続的にはあるが、プログラムコードが物凄いスピードで打たれている。

そこでふと、俺は違和感を感じた。

彼女の様子を観察する。するとほどなくその正体に気づいた。

何かダブって見えた。最初は高速で動く指がそう見えるのかと思っただけが違う。

二重に見えたのは指ではなくホロキーボードだ。

オリジナルのキー配置がなされているキーボードを両手にそれぞれ上下に手を挟むようにして二枚、計四枚を展開している。



それを下のキーボードには普通に指の腹で、上のキーボードには指先や指を曲げた時の関節の突起でタイピングしている。

そんな超絶技巧によって成されるタイピング速度は、正に超高速に相応しいものだった。

もしキータツチ音がしたら（ホロキーボードなので音はしない）連続音ではなく、単音が伸びたような音が聞こえてくるだろう。それくらいに、凄かった。

どれだけ凄いなだよあの子。もしかして、IS学園ってああいう化物とか超人とか言われるような人間ばつかなのか？

流石にそれはないだろうとは思うけど、思った以上にとんでもないところに来てしまったと感じた俺だった。

その後、結構ギリギリまで件の彼女が屋上に居座っていたため、午後の授業に遅れそうになりつつも間に合い、無事に迎えた放課後。

寮の部屋に戻った俺は、これから来るという同居人を待っていた。

ナナコ先生から聞いた話によると、色々手続きやらなんやらの手違いがあったらしく、今日になって入寮することになったそうだ。

で、この実質女子寮であるIS学園寮に男である俺と同室になる人間など、常識的に考えて一人しかいない。

誰かといえば、俺がこんなところに来る羽目になった原因を作った張本人、『世界で最初にISを動かした男』である、織斑一夏その人だ。

本当に急に話がまとまったようで、後で聞いた話だが授業中に届いたであろう彼の荷物は着替えと日用品と携帯の充電器だけという、あまりにも悲惨なものだったそう。

ともかく、ここでの生活は数日とは言え俺の方が先輩になるので、温かく迎えてやろうという気遣いを珍しく見せているわけだが。

「……遅い」

予想していた時間になっても奴が現れない。時計の針も既に半週以上回っている。

実際そこまで遅い時間というわけでもないのだが、仮に職員室に寄ってからここに来るのだとしても、時間がかかっているように見え

る。

またぞろ、女子たちに捕まっているのだろうか。

それはあり得るなあ。あいつイケメンだから人気あるだろうし。どこの二番目くんと違って。

などと、しょうもないことを考えていると扉の向こうが俄かに騒がしくなった。

「ん？」

発信源はちよつと遠くみたいだが、妙にざわついた気配がする。

このまま部屋にいても暇すぎるので、廊下に出る。

廊下には放課後ということもあってラフな格好の女子生徒たちがちらほら見えた。

スタイルのいい子ばかりなので、どうしても視線が下がりそうになるがなんとかそれを抑える。

ネットか何かで、男のチラ見は女のガン見、なる言葉を見たとき衝撃が走った人間としては意地でも守りたいところである。無意識で見ってしまった分はノーカンだけどね？

それよりも、騒ぎの方だ。

辺りを見渡すと、少し離れたところに人だかりができています。

近づくにつれて喧騒の原因がなんなのかハッキリしてきた。

どうやら騒ぎの中心は俺の同居人本人らしい。どこで道草食っているのかと思えば……。

近づいた人混みの外側から女子たちの頭越しに中心を覗く。俺と大して変わらない背丈の子もいるが、見えないほど人数がいるわけではないので問題ない。

そして視界に入ってきたのは。

「……なにやってんだ、アイツ」

一〇五二のナンバープレートが貼られた扉に土下座で平謝りする情けない姿の織斑一夏だった。

「箒！ すまん、悪気はなかったんだ！ 許してくれ、この通り!!」

「うるさい！ 乙女の柔肌を見ていおいて、その程度で許されると思っているのかっ!?!」

もの凄い怒鳴り声が扉の向こうから飛んできた。姿は見えないが、どうやら相手の方は相当にお怒りの様子。扉越しにも怒気というか殺気が伝わってくる。

状況を察するに、織斑が着替え中の女子を覗いてしまったってところか。

入学初日からラッキースケベとか、ラブコメしてるなあ。

騒ぎの雰囲気からして必死さはあれど陰険な感じは伝わってこないの、もしかしたら未だ見ぬ女子と織斑は前からの知り合いなのかもしれない。

それに周囲の女子たちの反応も、ただ面白がっているだけで大事にはならなさそうだった。普通ならもつと酷い状況になると思うんだが。女尊男卑なんて言葉がテレビで言われるご時世だし。

とりあえずそろそろこのコント、終わらせるかね。

「すまんけど、ちょっと通してくんねーかな？」

断りを入れつつ女子たちの間を抜けて（無論彼女たちの身体、特に胸は絶対に触らないようにして）、織斑の傍まで行く。

近づく俺に気づいた織斑は涙目のままこちらを向くが、とりあえず無視。扉の方を向いて会話を試みる。

「おーい、そろそろ織斑を解放してもらいたいんだがいいか？」

「む!?! 誰だ貴様!」

こんなところで織斑以外の男子なんて一人しかいないだろうに……、とは思うが言わないでおく。

「二番目の男だよ、ザ・セカンド。そこで泣き入ってるザ・ファーストの同居人。来るのが遅いんで引取りに来ただけだ」

織斑が何とも言えない微妙な顔をするが気にしない。

「駄目だ! その馬鹿者にはちゃんと反省してもらわねばならんだからな」

「いや、そこを頼むよ。これから同室で生活する上で早めに決めておきたいこともあるしさあ。それにちよつと外見てみるよ、結構な騒ぎになってんだぜコレ」

俺がそう言うと、少しの間を置いて中からゆつくりと扉が開かれ

た。

周りを伺うようにして顔を出したのは黒髪ポニーテールの、ちよつと頑固そうな女の子だ。

ドアの隙間からしか見えないが浴衣を着ている和服系女子である。おかげで回避よりも防御の方が得意な、結構なものをお持ちというのがすぐにわかった。

なぜなら急いで着たのか怒りに身を任せて動いたからかなのかは知らないが、若干浴衣が乱れてすこーしだけ胸の部分がはだけているのだ。

そんなものが突然目の前に現れるんだ。そして絶妙なアングルなのが悪いのであって、俺は決して悪くない。

そんなナイスバディを持つ目の前の少女は、俺の言葉の真偽を確かめる為にキョロキョロと辺りを窺い、事実であることを知ると渋面を作る。

「む、何故こんなに人が集まっているのだ……」

「そりゃあ有名人とこんな騒ぎ起こしてれば当たり前だろ」

これで騒ぎにならないと思う方がどうかしてると思うんだが。ま、裸見られたんなら周りが見えなくなるくらい怒るのも無理はない、のか？

「とりあえず、後で俺からも男として説教入れておくから、この場はこれで済ませてくれないか？　ぶっちゃけ、そろそろ周りの視線がキツい」

ただでさえ騒がしかったのに、俺というもう一波乱起こしてくれそうな人間が追加されたのだ。好奇の視線が更に強くなるのは自明の理である。

「ぶ、ごめん簿。本当に俺が悪かった！」

「この通り、本人も反省してるようだしさっ…」

土下座姿勢に両手を合わせて拝み体勢の織斑に指を指す。

そんな織斑になおも厳しい視線をぶつける彼女ではあったが、ふと殺気を収めて肩から力を抜いた。

「仕方ない、今日はこれくらいにしておいてやる。だが一夏、次にこん

なことがあつたら……」

「わかつてる筈。本当にすまなかつた!!」

土下座姿勢のまま謝罪する織斑一夏くん十五歳。衆人環視の中でここまでやるとか漢すぎるだろ。

改めて土下座姿を見ても堂に入っていてじつに素晴らしい。そのうち、トリプルアクセル土下座でもしてくれないか。

「つと、じゃあもう良いよな? そんなじゃ俺たちもう行くから。ほら、君らも散った散った」

そう言つて俺が手振りを入れつつ締めると、周りの女の子たちは口々に好き勝手言いつつここから離れていく。

「もう終わりかー。つまんないの」

「もう少し見たかつたなー」

「ねー。けどあの土下座は凄いわ」

「ふふふ、入学初日からいいネタができて満足だわ」

最後になにか不穏なセリフが聞こえたような気が……? まあいいか。

ともあれ、俺も織斑を伴つてその場から離れるのであった。

一〇二五号室に戻つた俺は、さっきの騒ぎについて織斑から話を聞いていた。

「で、聞いた部屋番号を間違えたら既にいた女子と鉢合わせとベッドに寝っころがりながら、テキストに話を纏める。」

それに対して織斑は、彼の姉であるが持つてきたという荷物を荷解きしてその少なさに嘆きながら俺と会話していた。

「そうなんだよ。そしたら筈がバスタオル一枚でバスルームから出てきてさ。慌てるうちに部屋追い出されてあんなった」

なんとまあ。こいつ本当にラブコメのラツキースケベやってたのか。

「なんと羨ましい奴」

「羨ましくねえよ! 殺されるかと思つたんだからな!」

と言われてもな、普通の男子ならそこはなんだか言つて喜ぶべ

きところな訳でして。

因みに、俺と織斑は既に顔見知りだったりする。

入学以前に政府の役人に振り回されていた時に何度も顔を合わせていたのだ。

その時に、織斑の姉がああ『織斑千冬』と知って大声で驚いたのはいい思い出である。そしてお互い何度か会う度に顔がげっそりしていったのも、笑い話という意味でいい思い出である。

「にしても、その口ぶりからしてさっきの子とは知り合いなのか？」  
ふと、さつきから気になってきた疑問を投げかけてみた。

それに対し織斑は、そういう言えば言っていなかったつけ、とこちらを見て答えた。

「幼馴染なんだよ。篠ノ之箒って言うんだけど。それでさ、箒の家って神社なんだけど剣道場もやってて、小学生の頃は千冬姉と一緒に通ってたんだよ」

「ほー、じゃあ巫女さんで剣道小町なのか。確かに雰囲気はあったな」  
和風というか古風というか、硬そうな感じではあった。そのまま時代劇に出てても全く違和感なさそうな気がする。

「上手いこと言う。昔っから頑固なところがあつたけど、今もそれは変わってないみたいだったな」

小さかった頃を思い出しながらなのだろう。織斑はうんうんと頷きながらそう言った。

「それじゃ、小中と一緒にだったんだ？」

「いや、小四の時だったかな。箒が引越してそれつきりだった。だからここでまた会えるとは思ってもみなかったな」

小四だから……大体六年ぶりか。それでよくもまあ、あそこまでお互いに遠慮なく言い合えるもんだ。

「はは、運命の再会ってか？　こんなところでだなんて神様も粋なことを……ん？」

しののの？

「……なあ、確かISの開発者も確か篠ノ之つて苗字だったよな？」

篠ノ之東博士の事だ。

若干十四歳でISを発明した神童で、その名を世界中に轟かせた天才。

四六七個のオリジナルISコアを作ったあとは行方をくらまし、その技術力の高さから世界中の諜報機関から指名手配されているらしい。

そんな重要人物と同じ「珍しい」苗字の子がIS学園にいるという事実。これってもしかしくなくてももしかするのでは？

「あ、やっぱりわかるか。そうだよ、箒は束さんの妹だよ」

「マジか。……そーういや織斑千冬と篠ノ之束って同級生だったんだよな」

有名な話である。

ただ仲が良かったかどうかは、いまいちよくわかっていない。学生時代に周りにいた人たちの証言では一緒にいることは多かつたそうだが、関係が良好だったかと問われると首を傾げるらしい。本人らに聞こうにも片や黙殺、片や失踪してて聞くことすらできない。

「今頃何やってるんだろあの人。まあ、どこにいても元気でやってるだろうけど」

荷解きを終えた織斑は、硬くなった身体を解しながらそう言った。

成程、そういった縁で家族ぐるみ的な付き合いでもあったのだろう。コイツの話ぶりからして、そこそこ仲は良かったと見える。

「しかしそうになると、ISが世に出てから大変だったんじゃないか？」

「ああ、そうなんだよ。政府の人とか、どっかの企業や大学の偉い人やマスコミとかがひっきりなしでさ。箒が引越したのも重要人物保護プログラムが適用されたからだって、昼間に本人から聞いた」

「そ、そうか……」

さらっと言っているが、大変どころの話じゃないだろそれ。小四から今まで全国各地をたらい回しって意味だぞ。

重要人物保護プログラムを家族が受けるにあたり、俺もそれについて詳しく説明を受けていた。

アメリカの証人保護プログラムを基とし、本家は証言したことによる犯罪者からの報復から証人を守る為であるのに対し、こちらは重要

人物及びその関係者（主に肉親）が不当に利用（本人に限らず、関係者を使つての脅迫を含む）されない為にあるのがその存在理由だ。

これはISの発表や白騎士事件その他を含む一連の騒動、「ISショック」を経験した日本が、篠ノ之東博士個人の世界に与える影響力がとてつもなく高いことを鑑みて、異例のスピードで法案を固めて施行したという話だ。

その為、施行直後は色々と至らないところがあつたらしく、当時このプログラムを受けていた者（要するに篠ノ之家）は難儀な思いをしたという。

てな感じのことを例によつて例の如く、例の政府の役人さんに雑談混じりに聞いていたんだが、まさかその当人と出会うとは世の中不思議なものである。

「けど、ホント元気そうで良かったよ。こんな女子だらけの場所で知り合いがいるのつてすごく助かる」

うんうん、と腕を組みつつ頷く織斑。

そりやそうなんだけど、さ。……なんか引つかるものがあるんだよね。その篠ノ之箒に対して。

織斑が言うのだから間違いはないのだろうし、初めてあつた人間のことを完全に理解できるほど俺も出来た奴じゃないし。

心にできた小さなしこりを織斑に気づかれないうちに振り払う。考えたところでどうにかなる訳でもなし、そもそも問題にもなっていないのだから。

「んじやま、そろそろ飯にしようぜ？　そろそろちようどいい時間だろ」

「お、いいな。ここの食堂何があるんだ？　せっかくだから今日はお前のオススメで頼むぜ」

暗くなりそうな話はここでおしまいとばかりに俺は織斑を誘つて部屋を出る。

さてさて今日は何にするかな。全寮制国際学校の食堂を舐めるなよ。レパートリーは腐る程あるからな。

鍵を閉めていざ食堂へ、と歩き出したところで俺は、「あ」と織斑に



振り返る。

「すまん。そういえばこれを渡すの忘れてた」

俺は上着のポケットに入れてたあるものを織斑に渡す。

「おい、これ……」

それは一〇二五号室の鍵だ。渡されたそれを見た織斑の声は何故かちよつと震えている。

「実は今朝から預かっててさ。寮部屋に来た時に渡せばいいかって持ってたそのまんまだったわ」

「……待て。これ貰ってたら俺、箒に怒られてあんな騒ぎにならずに済んだんじゃないのか!? 夕食奢れよな!」

「はあ? 何言ってるんだよ。部屋間違っただのはお前の所為だろ! なんて奢らにやならん!」

忘れてたのは悪かったが、そこまでの義理はない。

だが食堂に着くまで言い争った結果、奢らされる羽目になってしまった。

なんでさ。

## その4

入学二日目になっても、一人目の男性IS操縦者である織斑さん家の一夏君の開幕スタートダッシュは、衰えというものを知らないようだった。

今度はイギリスのお嬢様系金髪縦ロール少女とトラブルを起こしたらしい。

どうやらクラス代表を決める際、件の彼女と互いの国を侮辱するよ  
うな域にまで口喧嘩が発展し、一週間後にISでの戦闘で決着をつけることになったそうだ。

クラス代表か。二組はどうすんのかね。ナナコ先生、なんにも言わ  
なかつたけど忘れてたのかな。

ふと廊下の窓から空を仰ぎ見る。今日も天気は良く、雲の白が青空  
に映えて見えているだけで気分を落ち着かせてくれる。

こんな日には外でのんびり美味しい昼食でも食べれば、さぞや幸せ  
な気分になれるだろう。

あー、腹減ってきた。腕時計を見ると、もう昼休み入って十五分ほ  
ど経ってた。

「ちよつとアナタ！ せつかくワタクシが話をしているというのに何  
ですかその態度は!?!」

「あ、はい、申し訳ございません」

条件反射で謝る俺。ただし心は込もっていなかった。

さてここで改めて、今現在の状況を簡潔に語るとしたらこうだ。

金髪縦ロールの外国人貴族少女に絡まれた。以上。勿論、織斑と口  
論したという件の少女、セシリア・オルコット嬢に、である。

昼休みが始まってすぐ、昨日と同じように屋上に行こうとしたら、  
「そのアナタ、お待ちなさいー！」

と、呼び止められてしまったのだ。

聞こえないふりをして走り去っても良かったのだが、どうにも後々  
面倒になりそうと思ったので、仕方なく呼び止める声に応じたのが失  
敗だった。

まさか十五分以上も公衆の面前で延々と、自身とお国の自慢を聞かされるとは思ってもみなかった。

背は俺より低いくせに、腰に手を当てたモデルポーズで下から見下すという器用なことをして妙に迫力があるもんだから、気が疲れることと疲れること。

やっぱリテキトーに相槌うってたのがいけなかったのか。寄り道しないで済むように既に購入済みだった昼食と腹の虫が泣(鳴)いてるぜチクショウ。

更に言うと彼女の一方的な話の十五分間の内約は、六割自慢、四割罵詈雑言(一組での騒ぎ≡織斑について)である。俺の名前なんて、一度として出てこない辺り、相当腹に据えかねているようです。

因みに一組の教室から出てきてこの光景を見た織斑は、(目が合ったにも関わらず)篠ノ之と飯食いに行きやがりましたとき。あとで覚えてろ。

「ところで、聞いておきたいことがあるのですが」

「ハイ、ナンデショウ?」

最早カタコトである。早く飯食いたい。あと周りの奴ら、ご愁傷様、みたいな顔すんな。泣きたくなってくるだろうが。

「もしかしてアナタ、あのイエローモンキーの様に入試での実技試験で試験官を倒していたりしてないでしょうね?」

うわあ……、ここまで発音の良い悪口初めて聞いたわ。流石本場のブリテイッシュイングリッシュ。しかしプライベートならともかく、パブリックな場で気品の欠片もないこと言ってるのに気づいているのだろうかこの貴族娘。あと、俺もイエローモンキーなのですがそんなことどうなのさ?

「実技試験? いや、刀一本で完膚なきまで叩きのめされたよ。五、六回は避けたんだけどそれからは全然。手も足も出なかった」  
事実である。

そもそもIS学園の入試試験はIS適性が発覚して、IS学園に放り込まれる際に形式的に受けさせられたのだ。

通常、筆記試験・実技試験・面接の三つを二日に分けて受けること

ろをたった半日の強行軍で受けさせられたので、成績なんて言わずもがな。元々IS学園入試レベルの勉強なんてしてなかったわけでもあるし。

そして、実技試験。

実はこれはあまりに酷いものじゃなければ合否にほとんど影響なかったりする。

これをする真の目的は、IS適正とISに対する適応力を見るためのものなのだ。

なのでこれに関してだけはその他大勢の受験者と同じ条件で受けることになったのだが。(このことを知ったのは試験後)

そもそもISに乗るだけでおっかなびっくりな状態なのだから、内容と結果なんて推して知るべしだ。

相手を務めてくれた試験官は最初の二合までは手を抜いてくれたのだろうが、三撃目からは素人目から見ても分かるくらいその鋭さが増していた。

いやあ、見えてはいたんだけどなあ。身体が付いてこなかった。ままならないもんだ。

「フ、フン！ やはり所詮男なんてそんなものですわね。きつとあれも何かの間違いで……」

大方、織斑のことを言っているのだろう。俺と織斑は別々に実技試験を受けて直接見たわけではないが、試験の合間にそれについて語り合ったりはしたのだ。

それによると織斑は運に恵まれたとはいえ、実技試験で相手を倒してしまっただけらしい。

試験開始直後、飛び出した試験官の方が緊張して壁に激突とか、それは倒したと言えるのか？ という顛末だが。

「偶々試験官を倒せたからっていい気になつて、これだから男は……」

機嫌が悪そうに悪態を付くのを続けるオルコット嬢ではあるが、

「あのさ、そろそろその辺にしてもらえないか？」

トーンを落とした俺の言葉に、動きを止めた。

「な、なんですか？」

一変した雰囲気に圧されてか、オルコット嬢が若干怯む。

こちらを伺っていた女子たちもそれに当てられてか、固唾を飲んで見守っている。

そして数瞬の後、俺は口を開いた。

「腹減って死にそうなんだよ。解放してくんね？」

「……………は？」

昼食が入ったビニール袋を掲げつつ言った一言に、オルコット嬢はおろか周りも呆気にとられていた。

「いや、そろそろ空腹で限界だし、言いたいことは分かったしもう良いよな？」

流石にもう付き合ってられないのである。普段なら嫌ではあるが、体裁を気にして最後まで付き合ってもいいと思えるかもしれないが、ごめん、今はもう無理だわ。空腹な上にしようもない話を聞かされるとか、拷問でしかない。

それじゃ、と袋を持った手で腹を抑え、反対の手で軽く（心のこもっていない）謝罪しつつ彼女の脇を通り過ぎる。

「なっ!? 待ちなさい! ハイキュー!!」

慌ててオルコット嬢が俺を呼び止めるが、知らないし聞こえねえ。尚も静止を促す声が聞こえるが、それを全て無視してその場を後にした。

で、

そのまま中庭に出て微妙に人が疎らな場所にあるベンチに座って、俺は昼食にかぶりついていた。

俺に気づいた女子たちがこちらを遠巻きに見ているが、話しかけてくる様子はなさそうだった。

「そりやそうだ」

さっきの騒ぎも知らないのにそうなのだから、今の俺は相当機嫌が悪く見えているのだろう。正直、有り難くはある。

初対面の相手に、しかも自分には何ら関係ないことで散々捲し立てられたおかげで、精神がガリガリ削られて結構疲れたのだ。

あまり良くない傾向ではある。

世界で二人しかいないIS操縦者という立場上、ここでの生活、そして卒業後のことを考えると周囲との人間関係は円滑にしておかなければならない。

そもそも織斑みたいに後ろ盾が何も無い俺は、在学中にIS業界の関係者と友好的関係を築いておかなければ冗談抜きで命の危険がある。

それに関する事を春休みの間に散々政府の役人さんに吹き込まれたせいで、若干人間不信に陥りそうだったのは忘れたい過去だった。

兎にも角にも、このままではいけないってことだ。

そもそも、昼休みに人目を避けるつても良くない。良くはないんだがこの学園の空気に押しされ気味でどうにもやる気が出なかった。

どうにもしつくりこないのだ。ズレてるというか、現実味がないというか。要は未だに自分の中で受け入れられていないんだろう、世界で二人だけの男性IS操縦者という肩書きを。

できることなら犬のエサにでもしてやりたかったがそうもいかなるのが辛いところ。

ああ、

「なんかもう、早速全部放り投げたくなってきた」

パンの袋やジュースの紙パックをビニール袋に片付けて、大きく伸びをする。

食欲が満たされたのと春の陽気もあって、だいぶ気分は落ち着いてきた。

そんな俺は心に余裕ができたおかげか、ふと視界の片隅に見慣れないものがあるのに気がついた。

手のひらに乗るくらいのサイズで、触ると柔らかくて気持ちよさそうな体毛、大きなつぶらな瞳、体と同サイズな尻尾、茶色くて四足歩行する小動物。

「……リス?」

そう、リスだ。リスが離れた茂みからこちらを伺うようにして顔を

出していた。

何故こんなところにリスが？ 元々この島にいた原生生物だろうか。

生でリスを見るのが初めてな俺は、しばらくそのリスを観察した。最初は結構可愛いもんだなと和んでいたが、理由のわからない違和感を持ち始めてもいた。

「どうしましたか？」

なんだろうと疑問符を浮かべつつリスを眺めていると、横から突然声をかけられた。

振り向くとそこには、我がクラスである一年二組の副担任、木本美南先生が第一印象と変わらない、冷めたような目でこつちを見ていた。

「あ、木本先生。どうしてここに？」

「質問を質問で返すのはあまり良くないですが、まあ良いでしょう。生徒たちが噂していたんですよ。男性操縦者の一人が一組の女子生徒に絡まれて機嫌が悪そうだと」

「ありや、先生の耳にも届いてましたか。すみません、それについてはもう落ち着いたんで問題ねえツス」

もう先生にまで知られているなんて、女の噂の伝達速度は音速並だな。いや、ある意味音速ではあるけど。

「それで？ 貴方は何を？」

「いや、大したことはないんですけど。見えます？ あそこにリスがいるんですけど……」

言いながらリスのいる茂みを指差す。

そちらに視線を向けてリスを視認すると、木本先生は微かに驚いたような表情を作る。

あ、この人別に無感動つてわけでもないのか。

こんなことを考えるのは失礼だとは思いが許して欲しい。てつきり無感動系クール美人かと思っていたのだ。

それはともかく。

「珍しいですね。学園内では初めて見ました」

「そうなんですか？ てつきり前からいる原生生物かなって思ってたんですけど」

「それはどうでしょう？ 学園が作られた時の開拓で島の自然も大分人間の手が入ったようですし」

ふむ。だとしても島の生物を絶滅させたわけでもないだろう。別にいても不思議ではない。

別の可能性として誰かのペットという線も考えられなくもないが、学園島はそもそもペットの持ち込みは基本禁止であるので除外だ。

などと考えながらリスを眺めていると木村先生が、

「おいで」

と、リスにおもむろに近づきしゃがんで手を伸ばす。

しかしリスの方は警戒したのか、伸ばされた手から瞬時に距離を取り、そのまま走り去ってしまった。

「むう」

「残念でしたね先生」

そう言つて俺は、ちよつと寂しそうな目をした先生と共にリスを送る。

「落ち込まないでくださいよ先生。また縁が合えば会えますって」

「……そうですね」

そう言いつつ立ち上がった木本先生の表情は、元の無表情に戻っていた。

当たり障りのない慰めではあったが、気を悪くしたわけではなさそうなので良しとする。

その後、何事もなく午後の授業を受けた。

その間、リスに対する違和感はなんだったのだろうと考え続けて、漸くその正体が分かった。

あのリスはこちらを見ている間、微動だにすらしていなかったのだ。

リスに関しては気になることがあるとはいえ、どうなることでもないことなので一旦置いておいて。



「そういう訳やからクラス代表、明日の放課後までに皆で相談して決めといてなー」

そう言いながらチャイムが鳴ると同時に教室を出ていく金髪教師。  
……おい待てコラ。

本日の授業終わりのHRのシメに、我等が関西弁教師が爆弾を投下していきやがりましたとき。

どうにもナナコ先生、今朝の時点ではクラス代表のことを忘れていたらしく、一組の騒ぎを知って思い出したそう。

クラス代表は読んで字の如く、行事毎にクラスを纏めたり矢面（クラス対抗などのIS戦闘含む）に立ったりする、所謂学級委員長というやつである。

でまあ、二組の代表を決めるにあたって、ナナコ先生は三つの条件を提示してきた。

- 一つ、決定期限は明日の放課後のHRまで。
- 一つ、立候補制は無し。他薦もNG。機会は皆平等に与えること。
- 一つ、いかなる方法を探るにせよ、教室内で済ませること。

「あと話し合いの進行役は君がせえよ。ええな？」

「は？　なんで俺が!？」

「君が一番平等やからね。他の子やと政治が絡んできて八百長とかの可能性もあるからや。それくらいには馬鹿にできへんもんよクラス代表。ま、誰か専用機でも持ってたらあまり角も立たずに済むんやけど」

「政治がどうこうって、俺が一番絡んでると思うんすけど」

「君の場合は絡みすぎて逆にどこも動けないからへーきや」

「や、でも……」

「ぎゃーぎゃー言うなや、男やろ？　それと、ないとは思うけどハニートラップだけには気いつけや。あ、それは卒業するまでずっとか」

ハハハと笑うお気楽教師。くっそ、他人事だからって……!

あと、何人が微妙に顔逸らしたたる。顔覚えたからな！　ブラツクリストに登録だお前ら。

「大変だね？」

「言葉だけでもありがてえよ」

隣の都下の労いに、机に突っ伏して応える。でも、涙が出ちゃう。だって男の子だもん。

この半端ない振り回され感も最初だけ最初だけと、なんとか自分に喝を入れて俺は立ち上がる。

「あー、んじやまー、クラス代表決めろってことだけどき、どーするよ？」

教室内を見渡しながら問いかける。なんかデジャヴを感じるが昨日の今日なので仕方なし。

「やはりここは戦いで決めるのが」「入試の成績じゃだめ?」「いやいや、どうやってそれを知るのよ? 学園側は見せてくれないと思うよ」「立候補出来ないってのが辛いわね」「力ある者がだな……」「教室内でバトルロイヤルをやれと? 無理無理」「なんかもうゲームとかでよくない?」「何も思い浮かばないよ」「ISに関係あることで決めたいわね」「ならばやはり戦いで……」「ちよつと黙つとこうか」

……ふむ。これだ! という具体案が出ないまでも皆意見を出し合ってるな。クラスメイトのことを知るには結構良い機会なのかもしれない。何人かキャラが濃いのもいるし。

「都下はなんか意見ねーの?」

「え? 私? そうだなあ、トランプ……とか?」

「トランプ?」

「う、うん。けどよく考えたらお気楽すぎるし、この人数じゃ時間もかかるし……」

「……いや、良い考えかも」

「え?」

確かに普通のトランプじゃ時間もかかるし人数捌けないし、ISの適正を見るって言う意味でもイマイチだ。

だけど一つだけ、一つだけそれら全てを満たせそうなゲームがある。

「なあ皆、ちよつといいか?」

そう言つて、俺は白熱しすぎそうになっていた議論に割り込みをか

けた。

「あのさ、トランプのスピードで決めね？」

『は?』

異口同音に発せられる疑問の声。

「戸惑うのはわかるが、まずは聞いてくれ。前提としてスピードのルール知ってる人は？」

戸惑いながらも手を上げるクラスメイトたち。だがその数は極少数。特に海外勢は全滅という有様。

というわけで説明タイムである。

1. プレイヤーは二名で、赤と黒の二組に分けた手札を一組ずつ裏向きに持つ。  
2. よく切ったあと相手と交換。そして場にそれぞれ四枚のカードを表向きにセット。これが場札となる。

3. 「スピード」の掛け声(別にどんなのでもいいが)とともに、お互いデッキの一番上から自分と相手の中央に一枚出す。これが台札だ。

4. 自分の場札をみて二枚の台札と隣り合う数字があればそれを台札の上に出す。場札に出せるカードがなくなれば、手札から最大枚数が四枚となるように設置。台札に出せるようならまた出し、これを繰り返して先に手札場札をなくしたほうが勝ちである。

5. もしお互い出せるカードがなければ3から仕切り直す。

「とまあ、これがスピードのルール。ちなみにエースとキングは隣り合う数字として扱うからな」

いろいろローカルルールもあるが、とりあえずこれが基本だ。

「これがどうして、相応しい勝負になるの?」

「それはやってみせたほうがわかりやすいだろ。誰かトランプ持つてる奴いる?」

「あるよー」

「お、用意がいいねえ。確かさつき手、挙げてたろ。ええつと……」

「菊池。菊池健美だよ。宜しく」

「こちらこそ。んじゃ、やってみる?」

「当然！」

教室の中央の席をを借りて、机を挟んで対峙する俺と菊池。周りには興味津々と女子たちが俺たちが二人を囲んでいる。

おお、やっべ、香りきつつ。

いつもより狭い範囲で囲まれているせいか、女子の香りに当てられそうになった。

「どうしたの？ あつれえ、もしかして？」

「ナンデモナイデスヨキクチサン。サアショウブラハジメマシヨウカ」

いかんいかん、と首を振る。いや、もう、ホント、マジ生物学的にアウエーすぎるよIS学園。

ともあれ、準備完了だ。

黒スートの俺と、赤スートの菊池という塩梅で、場札も勿論セット済み。

構えを取った俺たちの間に流れる緊張と静寂。

そして、

次の瞬間。

『スピード!!』

菊池と同時に叫び、ゲームが開始される。

出された台札は俺がスペードのAで、菊池がハートの8だ。

こちらの場札には左から7、Q、3、Jと並べられている。

出せる場札は7のみ。なのでそれを掴んで8の上に素早く置く。

その間に菊池はAの上に2を置いたのですかさず3を置いてやる。

だがここで俺の場札に出せるカードはなくなったので、手札から場に二枚追加する。

5とKが入り、その間に菊池が更にカードを二枚出していく。

「やるな」

「そつちもね。けどまだまだ本気じゃないよ！」

「俺もだよ。練習とは言え負けてやんねーぞ！」

軽口を叩きつつもカードから一切目を離さない。勝負はこれからだ！

と張り切りつつ、手に汗握る攻防が繰り広げられた結果、

「つはー！ ギリギリで勝てた……」

「まさか、私が負けるなんて……」

天井を仰ぎ大きく息を吐く俺と、頭垂れて呆然としてる菊池の図が出来上がっていた。

「お疲れー。よくわかんないけど凄く白熱したゲームだったね」

都下がねぎらいの声をかけてくれる。

その名の通り、スピード感があるゲームだからそういう感想が出るのも無理はない。

実際、周りにいる女子たちほぼ全員がその早さに驚いていたようだった。

小中学時代とかでもあまり見なかったのだろう。こんな唯一怪我人が出る可能性のあるトランプゲーム、男子しかやってるイメージないし。

このゲーム、下手すると突き指の危険性があるんだよな。これが結構痛い。

俺も小学校で流行ったとき、しょっちゅう痛い目を見てたっけか。担任にバレてトランプ持ち込み禁止令が出そうになったのはいい思い出である。(その時は仲のいい男子たちと必死に頭下げて先生を説得した)

「でき、なんで俺がこのゲームが良いって言ったかわかる？」

問いかけると大体の女子が頷いてくれた。

「反射神経が大事だからだよ」

「あと、カードの絵柄を確かめてどうするか判断能力かな？」

「……正確で素早い動作も要求される」

「カード運も実力に入る、かな」  
等々。

スピードが得意だからってISを動かすのが上手って訳じゃないけど、必要な部分が似てるってのもまた事実。

お手軽に代表者を出さないといけない今回の場合、割と適切な決め方じゃないだろうか。

「どうかな？ ジャンケンとかでもいいけど、他になんか案がなければこれでいいかな」

それからしばらく話し合ったあと、この方法に決定した。

そしてカードや対戦表などを必要数用意して夕食後の自由時間に対戦をし、上位四人が明日の昼休憩で準決勝と決勝戦を行うことになった。

その結果、序盤で俺に勝った菊池がそのまま優勝して晴れて代表の座を獲得した。

この間、特に面白いこともなかったので割愛させていただく。強いて言えば、消灯時間間に現れた寮長の織斑先生とナナコ先生が何故かエキシビジョンマッチを行い、下馬評を覆してナナコ先生が圧勝したことくらいか。

菊池が、「ダイス神ならぬカード神の悪戯だね」と言っていたが、その通りだと思う。

## その5

そんなこんなで約一週間、勉強に勤しみつつ。

一組のクラス代表決定戦に向けて織斑が幼馴染と何故か剣道で特訓している間、俺はプライベートでは何をしてたのかというと、

「何を作ってるんだ？」

「蒼獅子」

「？」

大いに自分の趣味を満喫していた。

IS学園の寮に入ることが決まるにあたり、大小様々なストレスを被ることを予想していた俺は、それを発散する為の様々な趣味のものを学園に持ち込んでいた。

漫画、小説、アニメ、ゲーム。写真にプラモ作成その他エトセトラ。オタク文化寄りではあるが多趣味だと自分でも思う。

両親ともにそういうことには寛容で、ある程度成績をとっていれば自由にさせてくれたので感謝していた。

そして今やっているのはプラモ制作だ。その他の趣味についても色々語りたいところではあるが長くなりすぎるので割愛する。

で、今作っているのはスナツピキットと呼ばれる、接着剤不要のプラモデルだ。

簡単に作れて、ピンキリなところもあるが説明書通りに作成すればイメージに近いものが作れるという、初心者から熟練者まで幅広い層に愛されているモデルだ。

人の形をした機械、所謂ロボットのプラモを夕食後の自室で説明書の通りに作っていた。

最近を作る暇もなかったが、IS学園に正式に入学して漸く一息つけたところで久々に作ってみるか、と一日三時間の制限を設けて手を出した。制限はただ単に一度に保てる集中力がそれだけだという話である。

「これ、いつ完成するんだ？」

風呂上がりの一杯を爽やかに飲み干した織斑が、製作中の俺に声を

かけた。

「うーん？ そうだなあ……。空いてる時間によるけど、素組だけならお前がボコボコにされる明日の夜には。そこから基本工作して塗装するから、このペースでやれば大体三週間後くらいか？」

「へー、すつげえな。そんなこともできるのか。つて、今酷いこと言わなかったか？」

「気の所為だろ？ それよりもそっちの調子はどうよ？」

ニッパでランナーからパーツを切り出しつつ聞いてみた。最初はランナーが余るようにし、次にパーツギリギリで切り飛ばし、そこからカッターやヤスリでその跡を綺麗に整えるのが基本だ。

「おう、大分カンを取り戻してきたぜ。思った以上に体がなまって大変だけだな」

「確か中学は年齢詐称してバイトしてたんだっけ？ 世界で二人しかない男子IS操縦者が前科持ちかあ。世も末だな」

パーツ同士をくつつけるときは、無理に挟んでポリキャップが変形しないように気をつけてと。

「さつきから酷くないか？ 知り合いに頼んで働かせてもらって小遣いもらってた程度だからな？ それにそもそも捕まってないし！」

「そうかいそうかい。それで、勝算はあんの？」  
「うっ」

途端に言葉につまる織斑。

いや、そこで狼狽えてどうするんだよ。試合は明日だぞ？

「あー、まあなんだ。頑張れ、としか言い様がないな」

「くっそう、見てろよ。絶対明日は驚かせてやるからな!!」

さてどうなるか。

「はいはい。期待してるよ」

噂に聞くところによると、オルコット嬢のISはブルーティアーズといつて、中々遠距離射撃に特化した機体だという。

ISにはある程度情報開示の義務がある為、閲覧権限が必要にはなるが（流石に全くの資格無しで見れるわけではない）標準武装程度なら調べればすぐにわかるのだ。



一般人であればカタログスペックと専用機であればそのパイロットの氏名まで。

IS学園の生徒や教師等は更に機密に触れない（整備可能）な程度の内部構造を。

更に専門の技術者（製造メーカーや研究所等）や関係者（ISに関する権力者）になるとほぼ全ての機体情報を見ることができ。

勿論、ここでのいう情報というのはISという機械の基本情報のことであり、特有の技術情報を含まない。

ただ、今現在唯一絶対の例外はISコアであり、ISの全ての情報が眠っていると言われる完全なブラックボックスに干渉可能なのは、ISの開発者である篠ノ之束博士のみである。

そんな情報閲覧権限ではあるが、俺は未だそれを利用していない。何故ならば、そのほうが面白いからである。

勿論、自分の試合の対戦相手、なんて場合は調べるが今回はそんなことを全く気にしなくていいのだ。

例えば映画等で、純粋に楽しむ為にあらずじだけで前情報をあまり仕入れずに観る、という人がいるだろう。まさに俺がそうである。

ただの観客として人生初の生ISバトルが見られるのだ。これを楽しまないのは損である。

織斑にはそっけない態度をとっているが、内心ワクワクしているのだ。

パワードスーツでガチンコバトルとか男心くすぐるではないか。興味ない男は男の子じゃないね！

「楽しそうだな。今度俺にも教えてくれよ」

「おお、いいぞ。ただし自費でな」

織斑は勘違いしているようだが、プラモ製作も楽しいので良しとする。

IS学園に入ったこと自体はあまり乗り気じゃなかったが、それとこれとは別の話なのだ。

ああ、明日が本当に楽しみだ。

そして織斑の試合当日。一組を中心に一年全体が浮ついていた一日が終わり、放課後の第三アリーナ。

その観客席の一角。

「さあさあ始まりました、一組代表決定戦。実況は僭越ながらワタクシが担当させていただきます。解説は——」

持っていたヒトカラ用マイクを横に座るロシア系女子に向ける。

「オリヴィエ・カーティスだ。全く、どうして私がこんなことを……」

「まあまあ、細かいことは気にせずに」

仕方なし、と嘆息する姿を見て苦笑するしかない。

鉄をも切り裂きそうな視線を放つ鋭い三白眼、今にも心抉る言葉が飛び出しそうな厚い唇。その上に軽くウェーブした背中まである艶のある黒髪。そして女性らしくはあるも鍛え抜かれた身体を持つイケメン女子、将来は女傑確定だろう二組きつての戦闘民族、それがカーティス女史である。

「今何か変なこと考えていたな？」

「いやいや、そんなことないですよ？」

あと、動物並みに勘も鋭いようで。

今俺は一組のクラス代表決定戦に興味を持った二組メンバーと共  
にいた。

で、アリーナに向かう道すがらの雑談の流れから、ロシアの代表候補というカーティス女史に試合の解説を頼んだのだ。ちなみにマイクは他の女子のものだ。何故持っていたかは謎だが。

「お、早速オルコット嬢が出てきたな。……さてカーティス女史、どう見ます？」

「……見たところ、変わったところはないな。基本装備のスターライ  
トmk.Ⅲと、背中に羽状にマウントされてるBT兵器があるだけだ  
な」

カーティス女史の言う通り、オルコット嬢の纏う蒼色のISには大  
型のライフルと背中に大型のバインダーが装備されていた。

そもそもISというのはIS本体、装備品、そして搭乗者（+IS  
スーツ）で構成されている。

IS 本体は、肘や膝の先から肥大化した頭部のない人体のシルエツトをしている。

四肢はパワーアシスト機能やPIC等の作用によって通常の何倍もの力をほとんど重さを感じずに出せる仕組みだ。

そして胴体。ここはIS各部を繋げる役目と、搭乗者を守るための装甲や各種生命維持装置、更にマッスルスーツの役目を担っている。ここはアウタースーツ（対して搭乗者側のはインナースーツと呼ばれる）とも呼ばれ、ISと分離可能で強化服としても使えるのだ。

「成程。初心者相手に気負う必要なしと、自分の戦闘スタイルを崩す気がないようですね」

自分にマイクを当てつつ、オルコツト嬢を見やる。

蒼いISを身に纏った彼女は、若干無然とした表情ではあるものの、特に緊張した様子はなく余裕を感じられる。

「さてお次は織斑選手ですが、なかなか出てきませんね」

「ISの起動に手間取っているんじゃないのか？ 確か、新型だと聞いたが？」

ふむ、と俺は頷いた。

そうなのだ。この度織斑には新型のISが与えられるらしいのだ。

どこぞの施設の倉庫の奥で眠っていたものを元に篠ノ之博士が仕上げて、倉持技研が調整したという、どうにも曰くあり気、というか確実にあるだろう機体だ。

その名を白式という。

「最適化に時間がかかっているのかもしれないですね。特別機つぽいですし。ところで、代表候補としてはいきなり専用機をもらえるというのは、やっぱり気になりますか？」

途端、

「ほう」

という呟きとともにカーティス女史から殺気が放たれた。

周りの女の子達から誰ともなく、ひつ、と悲鳴混じりの声が溢れる。

無理もない。相手の気配が読める、とかそういう達人めいた感覚のない俺にも感じられるほどの殺気だ。これに動じない人間など、少な

くともこの場にはいない。

かくいう俺も内心かなりビビっている。男の子の意地で悲鳴を上げなかっただけマシと思っていたんだけど。

「なかなか度胸があるじゃないか。専用機を持たない代表候補にそんな質問をするなんて、余程命が惜しくないと見える」

「や、やだなあ。冗談ですよ冗談。そんなマジにならないでくださいよ。ほら、みんな怖がってるからね？ ね？」

冷や汗をかきつつなだめようと試みる。まいった。やっぱり地雷だったか。

考えてみれば当たり前のことではあるんだ。専用機というのは個人差はあれど、血の滲むような努力をして評価されて、それでも与えられるかはわからない。それも四六七機しかないオリジナルISを与えられるというのは、IS乗りにとって誉れなのだ。

「けどまあ、その辺わかってるのかねえあいつは」

歓声にスタンドが湧く。

漸く、織斑が出てきたのだ。

試合は一方的だった。

「さあ織斑選手、開始直後から果敢に攻めていきます！」

織斑は頑張っている方だとは思う。でも相手が悪かった。

「だがしかしオルコット選手、ステップを踏むような華麗な引き撃ちで織斑選手を全く近づけさせません！ それにしても織斑選手、さつきから刀しか使ってませんが他に武器はないんでしょうか？」

「ふむ、初期装備になくて準備をしている時間がなかったのか？」

「ありえますね。入場時の様子から見ると、結構バタバタしていたようですね」

「それに比べて、オルコットは余裕だな」

「ええ、そうですね。ほら見てくださいあの表情。獲物を狙うハンターの目、というより完全に楽しんでますね。素人相手にDSですね」

「相手があればな。動きが読みやすくて簡単なのだろう」

「ですよー。もうちよつとどうにかならないですかね？ あ、下手くそ！ そこは下に避けたほうがスペースあるだろうが！」

『さつきから煩いな！ じゃあお前がやってみろよ！』

『シヤラップ！ それにワタクシはDSではありませんわ!!』

「えー？ 俺、専用機持ってないしー。あとそっちは鬼の引き撃ちしてるくせに何言ってるのさ。後で映像記録見てみるといいよ？ とうかツツコむタイミングが同時って、実は仲いいだろお前ら」

『どこがだよ!?!』

『どこがですか!?!』

「そういうとこだよそういうとこ」

見事にハモるお二人さん。なにこれ超面白いんですが。

もうね、観客一同大爆笑である。鉄面皮のカーティス女史ですら顔を背けて肩を震わせるレベルである。

『あとで覚えてろよー!』

『あとで覚えておきなさい!』

またもタイミングが合い、思わず顔を見合わせた二人は苦虫を噛み潰したような顔をする。

そして溜まった鬱憤を晴らすように今まで以上に苛烈に戦闘を再開する。

「……しかし、なんだかんだ言いつつも結構粘りますね織斑選手。試合開始からかれこれ二十分くらいですか」

「そうだな、機体性能に助けられているのも勿論だが、オルコットの方が手加減している、というのもあるのだろうか」

「やっぱりそうなんですか？」

「ああ、見ていればわかる。ほら、織斑がその手加減の際を攻めるぞ」彼女の言う通り、試合が動いた。

なんと、織斑がオルコットの虚をついてビットを次々と破壊したのだ。

B T兵器。カーティス女史の解説によるとイメージインターフェイスを利用した遠隔無線誘導型の機動砲台、という代物だ。某有名口ポットアニメのアレを想像するとわかりやすい。

「一体織斑選手は何に気づいたんですか？」

「まだわからないか？ オルコットはビットを操作するとき他に動きをとっていないんだ」

「……？ え、あ、成程!」

言われて納得。思い返してみれば確かにビットが飛び回っているときはオルコット嬢本人はその場から少しも動いていない。

ビットに敵を釘付けにしながら攻撃なりなんなりできるはずなのに、ビット操作に専念しているようだった。

だからだろうか。逆に織斑がオルコット嬢本人を牽制するとビットの動きが止まり、撃墜が容易になるみたいだった。

「ここで織斑選手、四機のビットを破壊してオルコット選手に向かっていく！ 勝負を付ける気だ!!」

『うおおおおおおお!!』

雄叫びと共に、織斑が最高速でオルコット嬢へ突撃していく。

ビット破壊直後でオルコット嬢は取り回しの悪いライフルを構える余裕がない。下手に避けても追撃される距離だ。ここはダメージ覚悟で防御に徹するのが正解だ。

だが、オルコット嬢には四つ目の選択肢を選んだ。

『甘いですわ!』

ブルーティエアーズの両サイドスカート部分の装甲が稼働。それぞれその先端を織斑に向けた。

その装甲の裏にあるのは筒状の物体。補助ブースターか何かかと思われていたものは砲塔だったらしい。

そして発射されたのはミサイル。

カウンターで放たれたそれを織斑は避けることができず、直撃をもらってしまった。

「おおっと！ オルコット選手、見事なカウンターだ！ これは織斑選手、今までのダメージも考えると止めになってしまったか!」

織斑がいた辺りに爆炎が広がる。それを見てオルコット嬢は得意満面の笑みを浮かべる。自分の勝利を確信しているようだ。

「これで終わりか。素人としては十分によくやったほうだな」

どうやらカーティス女史も同じ意見らしい。周りの皆も同様の意見だった。

だがちよつと待つて欲しい。

「いや、まだかもよ?」

「どういうことだ?」

「だつてさ、空中で撃墜されたなら落ちてくるはずだろ? それがないってことはさ……」

俺の言葉にカーティス女史が薄れゆく黒煙へ勢いよく振り向く。

『……まさか』

オルコット嬢が呆然と呟くのを聞いて、俺は言う。

「ああ、そのまさかつてやつさ……!」

皆が注目する中、煙が晴れたその向こう、先程とは似て非なる純白の装甲に身に纏った織斑がそこにいた。

先程までと比べて鋭角化した各部の装甲は今まで以上の力強さを見る者に与える。

背面の大型スラスタは、鳥が大きく翼を広げたような形に姿を変え、内に秘めた力を抑えきれないかのように陽炎を吐き出している。

そして手にしてる武器もその姿を変えていた。

光の剣。

一言で言えばそれだ。

元のISブレードの刃をいくつかに分割して格納。そうして空いたスペースからビームっぽい光が伸びてそれが刀身の形を作っている。

それらすべての印象を合わせると、どことなく西洋の騎士を思わせるデザインになる。先程までが一般騎士とするならこっちは精鋭部隊とか近衛兵とかの上級騎士のイメージ。カラーリングから白騎士とか呼ばれそうな感じの。

……ん? んん? 白騎士? なんだこの引っかかり。最初のISにあやかっただつていうには何か――、

『今まで初期設定で戦っていたんですの!?!』

「――ッ」

オルコット嬢の声で我に返る。今はそんなことを気にしても仕方ない。

織斑の様子を見ると、呆然として自分の身体や変化した白式を確認していた。

だがやがて何かに納得したか、そもそも細かいことは置いておき考えるのをやめたのか、気合を入れ直して突撃を再開した。

「これは驚いたな。まさか最適化が済んでなかったとは」

「カーティス女史、やはり一次移行してるとしていないとはそこまです違うものなのでしょうか？」

「ああ、聞いた話だが段違いらしい。あくまで機械を動かす、から自分の身体を動かす、という感覚に変わるそう。それこそISCなどと比べると段違いだろう、それほどまでに劇的変化するそうだが実際専用機を持つているわけではないから何とも言えん」

「成程。確かにそればかりは専用機持ちにならないとわかりませんね。聞こうにもそうそういませんし。いや、あとで戦ってる二人に聞いてみたらいいですね。……おっと、言ってる間に決着が付きそうですよ！」

機体性能が上がり、格段に動きの良くなった織斑がブルーティアーズから放たれるミサイルとライフルの銃撃を光の剣で切り払ったり、機動力に物を言わせて避けたりしてオルコット嬢に肉薄していた。

オルコット嬢の方は笑撃（笑うしかねえだろこんなもん。素人なのに代表候補の専用機持ち相手に舐めプすぎる）から立ち直りきれないのか、動きがぎこちなく、後手後手に回っていた。

そんな攻防の間、テンションが上がりすぎたかどうかは知らんが、『俺も、俺の家族を守る！』

などと織斑容疑者は供述しており、あとで一部の人間から腫れ物を扱うかのようにからかわれることになると思います。主に俺から。

そして、

「下に避けてからの切り上げ！ これで決着か!？」

『うおおおおおおお!!』

先程とは違い、ミサイルさえ突破されての突撃だ。オルコット嬢



は攻撃直後で反応は出来ても対応しきれないタイミングだった。

誰もがこれで決まる、と思った直後。

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット』

『——は?』

その瞬間、アリーナ全体の時間が止まった。

あ、うん。気持ちはわかるぞオルコット嬢。皆同じ気持ちだから。あの様子だと織斑自身も何が起こったかわかってねえだろうし。

勿論、観戦していた俺たち含め観客も全く状況を理解できないでいた。

であるならば、皆が我に返ったあとにくるリアクションは予想できるわけで。——さん、ハイ。

『ええええええええええええええええええええええ!!?』

アリーナ全体から、耳を塞いでなお鼓膜に響くほどの叫びが轟いた。

それから数時間後。

消灯時間を過ぎ、なんとなく自販機の飲み物が欲しくなった俺は、暗くなった寮の休憩スペースまで足を運んでいた。

消灯し、薄暗い廊下を非常灯の僅かな光だけを頼りに歩く。

その道すがら、一組代表決定戦からのことを思い返していた。

やはり、ISの戦闘はテレビで見るのと生で見るとでは全然違っていた。

五感全てで感じるあの迫力は、テレビで見ただけでは想到もつかないものだった。

他の生徒も似たようなことを感じていたのだろう。夕食の時間帯でもその興奮は冷めぬようで、食堂はどこもその話題でもちきりだった。

なんだかんだ言っただけで専用機持ちの代表候補は強いだとか、ビットは憧れるわ浪漫だわだとか、おりむーかーくーだとか、白式の一次移行と同時に単一仕様能力が発現するとかありえないでしょだとか、情報開示された零落白夜がマジチートすぎるだとかそんな感じに盛り

上がっていた。

もつとも、当の本人らは食堂には姿を現しておらず、馬鹿騒ぎになるほどではなかったが。

何人かに、

「ねえ、織斑君はこないの?」

と、織斑と同室ゆえに何度か尋ねられたものだったが、その度に、「流石にお疲れモードだつてさ。初めてのIS戦闘だったからな」

そう返す場面が何度かあった。

実際織斑は、帰ってきてシャワー浴びたらすぐに寝てしまった。ここの一週間張り詰めていた緊張の糸が切れてしまったというのもあるのだろう。今日くらいはゆっくりさせてやりたい。

そんな訳で部屋にいて織斑を起こしてしまうのも忍びないので、暇つぶしも兼ねて自販機が置いてあるブースに来たのだが。

するとそこには少女が一人。自販機の明かりに照らされる姿は確か隣の席の、

「あれ? 都下……か?」

「え? わつ!」

こちらに気づいて振り向いた都下は俺の顔を見て何故か驚き、その拍子に自販機のボタンを押してしまい、ガコンとジュースが落ちる音がした。

うわあ……、と取り出したものを見て都下が顔をしかめる。

都下がこちらに掲げて見せてくれた缶には、長い黒髪の美少女のイラストともに『ま口茶』とデカデカと書かれていた。

「うわ、よりによつてそれか。つーかなんでこんなところで売つてんだよこれ」

「……美味しくないの?」

微妙な顔をしているだろう俺を見て都下が尋ねる。

「飲んでみればわかる。大丈夫、不味くはないからさ」

その言葉に訝しみながらも恐る恐るま口茶を飲む都下。

よく味わうためだろう、目を瞑りその味に集中するが徐々に困惑した何とも言えない表情を浮かべる。

「なに、これ。美味しいのは美味しいんだけど、舌触りが必要以上に滑らかすぎて執念すら感じるよ。もしかして収益度外視してるんじゃない？　というかこの美少女イラストとネーミングは何？　秋葉原のご当地茶でもないのにこのパッケージングはないんじゃないかな。絶対損してると思うんだけど。どこが作ったの——って、I・A・Iなの？　ああ、なら仕方ないか……」

そこまで言って、都下は頭を垂れた。うん、その気持ちはよく分かる。俺も通った道だから。

「ついでに言うとな？　そのお茶、I・A・Iの学生との合同開発企画で作られたものでな。そのイラスト、企画に携わった男子学生の彼女が元らしいぜ。ネーミングもその学生がイラストを押し通して、『丸くてエロい尻の君が飲むに相応しいお茶、そう！　ま口茶だ!!』とか言って決めたらしいわ」

「……なんでそれ、誰も止めなかったの？」

「いやだってI・A・Iだしな。あそこ基本、変態かキ○ガイしかいねえし」

I・A・IとはIzumō Air technology. Industryの略で、元々はその名の通り航空機関連の仕事をしてたが、その内様々な産業に手を出し大成功を収めている会社だ。

無論ISにもその手を伸ばしており、どんなISもその内部部品の三割以上はI・A・I製だと言われている。

そしてどれもこれも無駄に超高性能なのではあるが、その分ピーキーなデザインが多く、変なところで応用が効かないらしい。故にIS業界でも二位の地位に甘んじているのだとか。

しかし天才となんとかは紙一重、という言葉もあるようにどうにもI・A・Iに勤めてる者はどこかおかしい人間が過半数を占めており、各業界で結果を出す傍ら、企業の変態性とも言うべき特性を遺憾なく発揮しているらしい。このま口茶もその一つだとか。

「ま、それは置いといて。お前も寝付けなかったクチ？」

言いつつ、ちやつかり普通のスポーツドリンクを買って都下に少し睨まれつつも俺は、彼女と共に備え付けのベンチに腰を下ろした。

一人分空けたその席は、夜だからか、少しだけ冷たい座り心地だった。

「うん、実は。君もなの？」

「ああ。今日生で初めて見たI Sバトルのことを思い出すとな」

「そうなんだ。私と同じだね」

それを聞いて、俺は視線を天井に向け、少し思う。

いい機会だし、都下に聞いてみるか、と。

「なあ、今日の試合を見て、どう思った？」

「どうって？」

都下の方を向くと、不思議そうな顔をしてこちらを見ていた。

「I Sが動くところを見てさ、正直な感想つてのを聞きたいんだよ。ただそんだけ」

彼女は少し思案するように首を傾げ、やがて口を開く。

「単純に凄かったよ？ 迫力があつたし。それに……」

「それに？」

「うん。正直に言うと、少し羨ましかった。あんなに自由に空を飛べていいなって。それに比べて今まで自分は何やってたんだろうってちよつと悔しくもあつたかな。……な、なうんてね！ そこまで大したもんじゃないよ、どうせ授業で乗れはするんだし」

そう言いつつ、恥ずかしそうに顔の前で軽く手を振る都下。

「……いや、いいんじゃないか？ そんなこと考えてても」

「ふえ？」

だつてさ、

「多かれ少なかれ、皆I Sに乗りたくてこの学園に来たんだろ？ 態々難しい入試まで受けてさ。どんな理由だとしてもそこまで頑張った結果ここにいるなら、恥ずかしがる必要なくね？ まあ、たまたまここにいる俺が言うのもなんだけど」

そこまで言つてスポーツドリンクを一口。何語つてんだらうなどは自分でも思う。

ただ、自分の本心ではあるのでまあこんなもんだらう。

嘘偽りないですし？ 否定する要素は一つもないですし？

とかなんとか、自分に予防線を貼りまくっていると、

「……優しいんだね、君は」

「は？」

何を言ってるんですかね、都下サン？

「女の子の言ったことを否定せずに後押ししてくれる男の子って、世間一般には優しい部類に入ると思うよ？」

「そういうものかなー」

「そういうものだよ」

笑顔でそう言ってくる彼女に、俺は苦笑混じりの笑顔を返す。

この表情の応酬もきつと「そういうもの」なのだろう。

まだまだ知り合ったばかりの微妙な距離感で、互いの本心をほんの少しだけ晒す、そんなのは今みたいな夜の雰囲気だからこそ出来ることだ。だから「そういうもの」なんて曖昧な言葉で済ませるのが丁度良い。

「……さてと、それじゃそろそろ戻りますか」

「先生に見つかると、拙いもんね」

そして俺達は小さな夜会に終わりを告げて立ち上がる。

こういうのは無駄に長く続けるものではない。

「んじゃ都下、おやすみさん」

「うん、おやすみ。また明日ね」

なぜなら、「そういうもの」なのだから。

## その6

翌日。

一年全体が一組代表決定戦の余熱に少し浮かれているように思いはするが、それでも授業は平常通りに進んでいく。

今はほぼ毎日あるISに関しての授業の最中だ。

ISについて学ぶためのIS学園ではあるが、この一週間、実は一年生は授業でISに乗ることはなかった。

というのも、宇宙開発用のパワードスーツという名目で開発されたISではあるが、現在のところもっぱら兵器運用されており、その扱いには慎重にならなければならない。

なので大半の生徒がISに殆ど触れたことがないというのを鑑みて、まずは運用するにあたって正しい知識をつけさせる、というのがこの学園の教育方針らしい。

よって、ISの授業の最初の一週間は実技の時間も全て座学となっている。

というようなことを最初のガイダンスで説明されたのだが、よくよく考えると織斑とオルコット嬢の試合の日程はその辺りも考慮されてたんだろうなど、教壇に立っている童顔眼鏡巨乳の山田先生と、電子黒板の横でパイプ椅子に座りながら授業の様子を見てる長身クル系の織斑先生を眺めつつだったら考えていた。

……自分で言っていてなんだが、一組担任ズの紹介が雑すぎる。なのでもう少し続けてみる。

片や世界的な超有名人である世界覇者。もう片方も、知る人ぞ知る実力者らしい。

ブリュンヒルデはともかく、山田先生には心底驚いた。授業中のちよっとした雑談で元代表候補だったという話が出たので嘘だと思っただけならほとんどだった。ぶっちゃけ今でも半信半疑である。

「というわけで明日から実技が始まりますが、皆さんこの一週間で学んだことは決して忘れないように。いいですね?」

はい！ と元気に返事をする二組の生徒たち。

皆、明日からの実習への期待に目を輝かせている。かくいう自分も期待で胸を膨らませているのだが。

「やっとISに乗れるんだね。漸くだよ」

隣から都下が話しかけてきたので、そうだなと返す。

「ずっとおあずけ状態だったからな。これでIS学園らしいことができるってもんだ」

そういう意味では、俺たち一年生は皆フラストレーションが溜まっていたとも言える。

ISに憧れて入った専門学校なのにその専門分野であるISに触れることすらできなかったのだ。そりゃあ不満と共に、期待も膨らむわけ。

代表候補生や一部企業や組織に繋がりがあある者を除いて、ここにいる生徒は今までISに触れたこともないド素人ばかりだ。それこそ入試試験の実技で数分しか触ったことが無いはずだ。

故に言い方は悪いが俺を含め、皆の気持ちを代弁するところなる。

「早くISに触らせろ」

いやもうホント楽しみで仕方がない。何の因果か偶然か。はたまた運命か、男なのにISを動かせるのだから世の中わからないものだ。

などとうんうん頷き――、次の瞬間勢い良く上体を反らす。

「授業中だ。私語はつつし――、む」

何故なら、そんな言葉と共に出席簿が眼前を上から下に通り抜けたからだ。

勿論下手人は織斑先生である。

いきなり何すんだという話ではあるが、この教師に限ってはそう珍しくないことだったりする。

この一週間で今回を入れて自分に二回、複数人の生徒に三回、織斑に十回以上（授業中はわからないので多分かなりの回数）、出席簿アタックを実行していた。

……アンタいつの時代の教師だと言いたい。

どうにもこの人、口より先に手が出るタイプらしい。どんなに早く

ても同時で口の方が早く出てたところを見たことないが、それは教師として大丈夫なのかどうなのかと。

まあ、やりすぎなところもあるが、弟に対する時以外は手の上げどころは間違っていないようなのでギリギリ許容範囲といったところか。

織斑に対しては事ある毎に叩いているのを見て、もう理不尽といつてもいいレベルだろうという感想だが、多分口に出したら速攻で殴られる。

「なにか余計なことを考えてないか？」

「いえいえ、そんなことはないですよ？」

「……ふん、まあいい。とにかく集中して授業は受けるように」

「イエスマム！」

なおも何か言いたげではあったが、そのまま織斑先生は踵を返し定位置に戻っていった。

……おお、怖い怖い。

ふと教壇の方を見れば、一連の流れを山田先生は苦笑しながら見ていたので、すんません、と軽く会釈を送る。

全く、織斑先生に比べて山田先生はホント癒しだねえ。

一組担任ズは何から何まで真逆の性質を持った二人だった。

そう考えると、二組の担任達も決して似たような性格とは言えない。もしかして、他のクラスもそんな感じだったりするのだろうか？

それから数時間後。

「俺は、俺の家族を守る！」

「やめろおおおおおおおおお！」

広く大きく、適度に雲と風あり、そして素晴らしく綺麗な青空に、男子高校生の痛々しい悲鳴が響いていく。

場所はIS学園屋上、時間はお昼休みの出来事である。

事の発端は四時限目の授業が終わり、入学初日のような醜態（昼休み逃走）を晒さず、普通に昼の時間を過ごせるようになった俺（それでもまだ半分慣れてない）は、いざ学食へ！ と廊下を歩いたのだが、



その時不意に呼び止められた。

「おーい、一緒にお昼食べようぜ」

女の園で絶対に聞き間違えることのない声に振り返ると、案の定、織斑がそこにいた。

「ん？ 別にいいぞ……、って、ホントにいいのか？」

織斑の背後に侍系とお嬢様系の少女が、空気読めって顔してるんですが。

「良いに決まってるだろ。遠慮すんなよ」

その発言に、後ろ二名の表情がさらに険しくなってきたんですが！

「いや、そうは言ってもな……」

「なんか予定でもあるのか？」

「ないけど。先約とかもないけど」

織斑の空気読めてなさすぎな発言に、二人の般若が実力行使に出ようとしてるんですが！！

「いっつも、誘おうとしてもお前いないからさ。たまには良いだろ？」

いつもより押しの強い織斑である。だからどうしてこういう時だけ……！！

うーん。

大体こんなことになるだろうって予想があったから、校内ではちよつと距離置いてたんだけどな。

これ以上は避けては通れんか。一度一緒に食べれば織斑も暫くは大人しくなるだろう。

「わかったよ。一緒に食うよ」

あ、やめて。そんな目でこっちを見ないでお二人さん。俺死んじやう。

「よっし。それじゃ屋上で食べようと思ってたんだけどそれでいいよな？」

「あ、ああ。良いよそれで。……っと。ちよつと待て。都下、カーティス女史、一緒に昼飯食わねえ？」

渋々承諾したのだがそこで点の思し召しか、偶然通りかかったクラ

スமைト達に声をかける。

「うん? ……ああ、良いよ。オリヴィエも良いよね?」

「……私も、構わんぞ」

おっけ。これで戦力差が埋まった。

一人だと一組女子コンビの視線に耐えつつの飯なんて、楽しむ余裕がなさそうだしな。

巻き込んで悪いが二人には道連れになってもらう。

二人もこの状況を理解できたのか、苦笑混じりだが承諾してくれた。理解が早くて助かる。ジュースクらいは奢つてあげようと思う。

そんなこんなで屋上に上がり、六人で食事を囲む。

お互い殆どが初顔合わせでもあるので適当に自己紹介し雑談に興じていると自然と話題は昨日の試合のことになる。

そこで暫く話が進んだところで織斑のモノマネをして本人からのありがたい悲鳴をいただき、程良く場の空気が温まったところで質問タイム。

「で、さつきから気になってたんだけどさ、なんで織斑とオルコツト嬢が一緒にいるのさ? 喧嘩してたんじゃないの?」

聞くと自分でもよく分かっていないのか、微妙な顔をしながら織斑が答えた。

「それは朝のHRでセシリアが謝ってきてくれたからさ。あと何故か俺が一組の代表を譲られた」

「なんだそれ?」

という反射で返してしまった疑問に、オルコツト嬢本人が答えてくれた。

「それはですね、一夏さんに実力をつけていただけだからですわ。今の実力では私が代表になるのは当たり前のことですが、それでは一夏さんが成長する機会を奪ってしまうことになりますもの。ですからワタクシのほうから辞退させてもらったんですの」

「……………、えー」

「なんですのその反応!?!」

いや、だって、ねえ?

そんな感情を表情に乗せて二組メンバーの方に振り返ると、二人に視線を逸らされた。

「だからなんですその反応は!!」

その言葉を受けて、俺達三人は顔を見合わせ、視線だけで誰が言うかを牽制し合っていたが結局俺が折れてしまった。

……仕方ないなもう。

「なら言わせてもらうけどさ、オルコット嬢。お前さ、昨日までと態度が百八十度逆じゃん。なんなの？ まさか織斑に惚れ——あぶっ!？」

電光石火というに相応しい速度で口を塞がれた。

「な、何を言ってますの？ 勘違いも甚だしいですわね。貴方にも無礼を働いたことを謝ろうと思っていました、その気もなくなりましてわ！」

顔真っ赤にしてそんな態度とられてもな。確実に惚れてんじやん。というか切っ掛けとしては昨日の試合でなんだろうけど、どこにそんな要素があつたんだろうか。是非とも教えてもらいたいものである。

「む。セシリア、やはり貴様!」

「いきなりどうしたんだセシリア？ 箒も怒って。何かあつたのか？」

「な、なんでもありませんわ一夏さん」

そうして騒ぎ出す一組の三人。成程、織斑は二人からの好意に気づいてないのか。確かにそっち方面は鈍そうだもんな。モテそうだけど。リア充はさっさと爆発しないものか。

それにしても、

「これがラブコメってやつかー。口から砂糖吐きそうだわ……。二人はこれ見てどう思う？」

「どうなんだろうね。うーん、好きな人がいるのは良いことじゃないかな?」

とは、都下の弁。

「カーティス女史は？」

「今のところ、興味がない」

さいですか。相変わらずの切れ味ありがとうございます。

「そういうお前はどんなんだ？」

「俺？ あー、俺もこれは無理だなあ。そもそも恋愛なんてする余裕もないし」

「勉強の所為で？」

この質問はそもそもがIS学園レベルの受験勉強をしていなかったことに起因する。なんだかんだでIS学園はエリート校なのである。地元の普通校を受験しようとしていた俺には厳しい偏差値を誇っているのだ。それでも何とか授業についていけるのは、きっと教師陣の教え方が上手いからだと思う。

「それもあるんだが、主な理由は俺のネームバリューとハニートラップ関連な。あとが怖すぎておちおち恋人なんて作ってられねえんだわ」

「大変だね……」

「本当にな。……あ、そういうえば一回お誘い受けたなあ」

「え!？」

「ほう」

いきなりの爆弾投下に驚いて目を剥く二人。中々悪くないリアクションである。残りの三人？ ラブコメしてて聞いてすらいねえよ。

「上級生かな。タイの色からして多分二年だったと思う。人をからかうのが好きそうな美人で、なぜか“誘惑”って書かれた扇子持ってた」

「そ、それで？」

「こつちの腕とって胸押し付けようとしてきたから、関節きめられる前に抜け出して全力で逃げた」

その際、振り返るといつの間にか上級生が持ってた扇子の文字が“残念”に変わっていたのは気のせいだったのだろうか。どうでもいいか。

とりあえず名前は知らないが顔は覚えたので、脳内ブラックリストの最上段に登録してある。因みにスタイルは良かった。勿体無かったとは思うが、命には代えられない。関わったらまずいって俺の危険察知センサーが全力で告げていた。

IS学園というのは俺にとって魔窟だと思った出来事である。俺の平穩はこの学園にはないのかと問いたい。

「へタレ」

「うっせーよ!?!」

だからそういう問題じゃないってーの。俺だつてなあ、楽しめるもんなら楽しみたいんだよ!

……とにかく飯だ飯。さっきからあんまり食べてなかったからな。だから心が荒れるんだ。きつと。メイビー。

そうして俺が購買で買った昼食を食べ始めると、一組側も落ち着いたのか、食事を再開する。

改めて目の前に広げられた食事を見る。

俺と同じように購買で昼食を買ったのが都下と篠ノ之。

弁当を持ってきているのが、カーティス女史と織斑とオルコット嬢である。

同室なんだからついでに織斑に弁当を作ってもらえばいいという意見もあるが、家族でもないのに男に弁当を作ってもらうとか、それはちよつとない。態々腐女子にネタを提供するようなお人好しではないので念のため。

で、二組の二人にそれぞれ昼食の内容について聞くと、

「いつもは作っているんだけどね。今日は時間なかったから」

そういえば、今まで昼休みになるとすぐに教室を離れてたから都下の弁当なんて見たことなかったなと思り返す。

「私の場合、栄養バランスを第一に考えて作っている」

……正直に言うとは意外だった。てつきりこういうことは出来ないものとはばかり思っていた。

どつちかというところ、そういうの気にせずガツガツ食べて、めちゃくちゃ動いて全部エネルギーに回してるイメージを持っていた。

なんて失礼なことを考えていたからか。カーティス女史がこちらを睨んでくるがやめてもらえないだろうか。考えを改めるからさ。

と、喋りながら食事をしていると、ふいにオルコット嬢が織斑に自分の弁当を差し出した。

「さき、一夏さん。これ、私の自信作ですの。ぜひ食べてくださいまし」

「お、良いのか？ それじゃ代わりに俺のも食べてくれよ」  
そのお礼にと自分の弁当のおかずを差し出す織斑。

仲直りして直ぐにここまで仲良くなるのは良いことだが織斑よ、いい加減オルコツト嬢とは反対側に座る篠ノ之ことを思い出してやれ。悔しさと怒りで物凄い表情してるから。

そんな篠ノ之に向かって、

「……そんなに悔しいなら、お前も弁当作ってきてやつたらいいのに。ってか、この一週間ずつと織斑に付きつきりだったんだろ？ そういう機会は沢山あったろうに」

「ぐ、……うぐつ。出来るならそうしてる。いや、そもそもなんでそれを思いつかなかったんだ私は……、ぐう」

言うのと、頭を垂れて唸る篠ノ之。どうやら追い討ちかけてしまったようだ。

「す、すまん、言いすぎた」

だから涙目にならないで欲しい。どう対処していいかわからん。

「し、篠ノ之さん？ 良かったら今度私がお料理教えてあげようか？ だからそんな顔しないで、ね？」

ナイスフォロー！ 本当に助かります都下さん。

「女の扱いがなってるいな」

ぐうの音も出ない。彼女いない歴イコール年齢なんです勘弁してください。

こつちが涙目になりつつ、ふと織斑の方を見るとオルコツト嬢の弁当を食べて非常に辛い何かを我慢していた。

ああ、凄く不味かったんだなオルコツト嬢の弁当。けどその我慢は彼女のためにならないと思うんだがなあ。

はあ、とため息を一つ。

……どうやら今日の昼食は、男子が割りを食うものだったらしい。

内容に面白味のない、しかし学生にとって大事な午後の授業を睡魔

と戦いから乗り切った放課後の学生寮。

一度部屋に戻り楽な格好に着替え、暇でも潰そうとブラブラしていると、廊下の向こうから荷物の山を抱えた女子がこちらに向かっていた。

その荷物は持つてる人物の頭を超えるほど高く積み重なっており前が見えておらず、フラフラと揺れてもいて、非常に危なっかしい。暫くその様子を見ていると案の定、俺の目の前でその人物は転けそうになって荷物を大きく傾けてしまう。

「あぶねっ！」

間一髪、前に出てその荷物を抱えることに成功する。

持つてみてわかったが、中々に女子一人では持つのに苦労しそうな重量で、よくこんなの運んでたなと感心するくらいには重かった。

一体誰だこんなの持たされたのは？ と運んでた人物を見ると、

「おりむー？ ありがと、助かったよ」

そこにはなんとというか、緩い笑顔を浮かべる癒し系な女子がそこにいた。

茶色い髪でツーサイドアップ、でいいのか？ 長めの髪の両横をひと房ずつ飛び出すように括っている。

その若干幼く見える髪型と柔和な笑顔のお陰で、見る者の心をほぐすような気持ちにさせてくれる、そんな少女だ。

「いや〜残念だけど、織斑じゃないんだな〜これが」

男の声が出たので織斑と思ったのだろうが、残念。不正解。

いやしかし、おりむーか。解りやすいといえば解りやすいのか？

なんとも不思議なネーミングセンスである。

「え？ あ、ごめんねー、間違えちゃった」

てへへ、と朗らかな顔で謝ってきたが別に怒っちゃいないので、気にすんなよ、と軽く返す。

「で、どうしたんだこの荷物？ 結構な量みたいだけど」

「それはね、パーティー用なのさ」

「パーティー用？」

はて？ 今日何か催し物でもあったか？ と頭を巡らすが無も

浮かんでこない。

「皆でおりむーの一組代表決定を祝うんだ〜」

「ああ、成程……?」

確かに、世界初の男子IS操縦者が自分たちのクラス代表になったのだ。馬鹿騒ぎしたい気持ちはわかる。わかるんだが、ちよつと待つて欲しい。

確か織斑は代表の座をオルコット嬢から譲られてなった筈だ。

そんな素直に喜べない経緯でなった代表のお祝いを派手にするつて、なんていうか、微妙だ。

「んー、それ織斑は承諾してんの?」

「うん、さつき皆でやろうつて決めた時に訊いたら、良いよつて言つてくれたよ〜」

……織斑さん、漢だわ。俺ならいたたまれなさすぎて絶対断るわ。まあ、本人も良いと言つたようだし、周りも楽しければそれで良いのか?」

「ふうん、まあいいや。それで、これ運ぶんだろ? 手伝つてやるよ」「え、いいの〜?」

「暇だしな。けど上のは少し持つてくれよ。で、どこまで運ぶんだ?」「……うんしよ。食堂だよ。それじゃレッツゴ〜♪」

持つのに無理がないだけの荷物を抱えた彼女は、陽気にそう言つて先を歩き出した。

一度腕の中の荷物を抱え直して俺は、その後を追う。

横に並び、互いのクラスの様子や話のタネになりそんな話を話しつつ俺達は食堂へと歩みを進める。

「へえ、じゃあなんだ。白式つて本当に雪片式型しか装備がないんじゃないかって、それしか装備できないんだ?」

武器がないだけであれば追加すればいいが、そもそも出来ないのであれば手の施しようがない。つまり、白式とは汎用性が全くと言っていいほどない機体ということになる。

「そうなんだよね〜。拡張領域が全部雪片で埋まつてるんだつて。おりむーも嘆いてたよ」



「それで高速戦闘向きで防御力は打鉄に毛が生えた程度だっただろう？ またピーキーというかなんというか、何考えてんだか解らない機体構成だな」

「というか現代戦で銃火器が一切ないとか、致命的だろうに。」

例えばの話、織斑の姉である織斑千冬は現役時代、雪片一本で第一回モンド・グロツソの総合優勝を勝ち取ったが、それこそ並大抵の困難ではなく、ピーキーな機体を十全に扱っただけの技量があったからこそ、そこまで運用できたんだと思う。

それを素人同然である織斑に求めるのは酷な話である。

「そーそー、篠ノ之博士ももうちよつと扱いやすいものを作ったら良いのにね〜」

「そういや、篠ノ之博士が元からあったのを勝手に弄って作ったって噂があったんだよな。あれって本当？」

「本当だよ。だから製造元の倉持技研は躍起になって白式のことを調べてるの。おかげでかんちゃん打鉄式式の開発も止まっちゃったんだけど……」

「……かんちゃん？ 式式？」

なにやら事情があるようで思わず聞き返したが、なんでもないと、と彼女ははぐらかす。どうやらあまり喋りたい話題ではないようだ。

「まあいいや。ともかく、何故かは知らないけどそんなブレオン機体を与えられたんだ。案外、篠ノ之との剣道特訓ってそこそ役立ってたのかもな」

「それは、う〜ん。どうなんだろう。うう〜ん？」

……やっぱ駄目ですかそうですか。特訓の方向性間違ってるよな。人のことは言えないが、何故誰も止めなかった。いや、篠ノ之が許さんか、あの様子だと。

そうこうしているうちに、俺達は食堂に到着。

どうやら祝賀会は食堂内の一角でやるようで、その辺りを中心に一組の女子達が楽しそうに、『織斑一夏くん、一組代表決定おめでとう！』と書かれた横断幕や飾り付け、食事の用意などを着々と進めてい

た。

そのうちの一人がこちらに気づき、

「あ、本音お帰りー。え？ どうしたのよ？ なんで彼が？」

という一言で周りも俺が居ることに気づき、更に食堂が騒がしくなる。

……この子、本音っていうのか。名前か……いや、苗字だろうか？

「えへへ、途中で荷物を落としそうになったところを助けてもらったんだ」

「で、危なつかしいし、ついでだからここまでつて感じで」

「そうだったんだ。一組の用事なのに、態々ありがとう」

「気にしない気にしない」

委員長属性っぽい子の言葉に手を振って応える。

それから雑談しつつ、ついでのついでで女子たちの手の届かないところ少し手伝いその場を離れた。

……皆、いい子っぽかったな。ただ全体で見ると没個性な気もするけど。

二組の面子と比べるのも酷というものか。まだ全員のことを把握しているわけではないがカーティス女史を筆頭に、菊池みたいにキャラが濃そうな多いし。

菊池ってあれだけ、趣味がTRPGでそっち系の会社の公式WEBセッションに一般ユーザー枠で三回も参加して、本にも載ってるほどのヘビーユーザーで一般ユーザーのカリスマだからな。

聞けばIS学園に入ったのも箔付けの意味合いが強いようだ。少し不純な動機とはいえ、見事にここにいるわけだから十分に変人枠である。

とはいえ一組の中では、世界初の男性IS操縦者、IS開発者の妹、英国の代表候補生を除いた中で、さっきの本音と呼ばれてた子は別だ。あれはなんというか、うん。反論の余地なく、

「癒しだよなー」

あれは少しでも気を抜くと、癒し空間に捕らわれて帰ってこれなくなる。学園バトル物から、ほのぼのの日常物に世界観がシフトチェンジ

しそうになるほどの。

そんな風に顎に手を当てて考えていると、

「何が癒しだつて?」

「うお!? おお?」

いきなり肩に手を置かれて吃驚する俺。誰だよ一体!?

反射的に振り返り目に映ったのは我がルームメイトの織斑、とその姉だった。

「ありや、姉弟揃つてとは珍しい」

授業中以外でこの二人が同じ場所にいるのは珍しいんじゃないかなるか。確か隠し撮りしたツーショット写真が高値で出回っていた筈。勿論、本人らには知られずに。

「それがさ、昨日白式が手に入っただろ? その為の書類手続きをさつきまでしてたんだよ。その書類の確認で仕事上がりだつて千冬姉が言うから、たまには一緒に——いつてえ!」

「ここでは織斑先生だと何度言ったら分かるんだ馬鹿者」

あ、また殴られてるよ織斑。懲りないな。いい加減学んでもいいだろうに。

というか本当によく見るなこういう場面。もう織斑姉弟のお約束と化しているような。

「良いんじゃないですか? もう放課後で先生も仕事終わってるし。今は家族の時間つてことで」

「——む、確かにそうかも知れんな。だがこいつは授業中でも言うから既に癖になつていてな」

「え? じゃあ殴られ損つてことか!? 酷いぜ、千冬姉! あがつ」

「だから織斑先生と——、すまん。今のは私のミスだな」

小さなミスで殴られる織斑。不憫である。

それにしても今のは絶対わざとだろ。間違いねえ。その証拠に笑顔ですからね織斑姉（世界最強）。

この場にいるのは当人らを除いて俺だけな所為か、スキンケアを取ってるつもりなんだろうな。

……家族の団欒に巻き込まれる前に退散しておいたほうが懸命だ

な。

「それじゃ先生、自分はこれで。織斑、——強く生きろよ」

「どういう意味だ!」

「どうもこうもない。そのままの意味である。」

「ちよつと待て。少し聞きたいことがある」

「? 何ですか先生?」

横を通り過ぎようとしたところで織斑先生に呼び止められた。はて、何の用だろうか。

「貴様、何か格闘技の経験は?」

「格闘技? いえ、ありませんよ。……強いて言えば中学のときの授業で柔道を少ししたくらいですね。それだって本職から見ればおままごとのレベルでしょうし」

おかげで、受身の取り方は覚ええました。組み手の方? 美人とならともかく、野郎とくんずほぐれずなんてごめんだだったので、怪我しない程度にしかやる気なかつたので実力はお察しである。

「そうか。スポーツもか?」

「ええ、まあ。それが何か?」

「いやいいんだ。すまなかつたな、呼び止めて。行つて良いぞ」

「? ……はあ。それでは」

……んん? 一体なんだつたのだろうか。

織斑先生の意図は分からなかつたが、お言葉に甘えて俺は二人から離れ、暇つぶしの散歩を再開した。

その後、暫くして一組の祝賀会が始まり、一組の人間ではないが食い物目当てでちよつとだけ参加させて貰つた。

一組の女子達の手作りらしき料理は美味かつたし、織斑は篠ノ之に殴られていたし、俺同様に他のクラスの子も混ざつて楽しんでいたし、織斑は修羅場に巻き込まれていたし、記念撮影にもこっそり写つたし、織斑は女子達のリクエストで食べ過ぎ飲みすぎで倒れていたしで、盛況だった。

そして一日が終わり、待ちに待った始めてのIS実習の日がやってきた。

## その7

以前言ったようにIS実習は二クラス合同で行われる。よって今、ここ第四アリーナのAピット内に生徒六十名プラス二名が集っているのだが。

「おい織斑、あからさまに視線を下げるな。死ぬぞ」

「わ、分かっているよ。お前だって目線が泳いでるじゃないか」

知らん。俺は目の前の壁に集中しているんだ。その筈だ。そもそも集中してたら織斑の視線に気付く筈がないとは言ってはいけない。ピット内は空間的には広く、実際にこれだけの人数が集合できるほどではあるのだが、今の俺には用途不明な機材が沢山設置されているので、あまり開放的とは言えない印象だった。

なのでそんな中で身体にフィットするISインナースーツに身を包んだ女子が六十人も集まればどうなるか。……健全な男子高校生には途轍もなく目に毒な光景が展開されるうえに、距離が近く結構くるものがあるのだ。

しかもスタイルのいい子が多いこと多いこと。パツと見だけでも殆どの子のボディラインに乱れがない。

これはISに関わる、もつと言えば操縦者には外見の良さにも気を使わなければならないからでもある。

これにはちよつとした理由があり、IS操縦者には国や企業の広告塔的な意味合いが含まれる為だ。

イメージ戦略とでも言えば良いのか、見るものに与える心理的影響”をも考慮されて選ばれるそうなの。

たとえば織斑先生が世界的に有名で人気があるのも、勿論その強さもあるがその美しさ（言つて恥ずかしくはあるが、キツイ系の美人であるのは確か）もその一因なのだ。

実際、IS操縦者でモデルや女優業のほうがメインになっているという、ある意味本末転倒なんじゃないかと言いたくなる人達もいるのだ。あまり芸能関係は詳しくない俺でもミーア・姫華やスチュアート姉妹など、すぐに二、三人は思いつく。

そういうこともあり、IS操縦者には、心・技・体・美の四つという、とてつもなく高いハードルを越える実力が必要とされる。

翻って、このIS学園にはその原石となる女の子が世界中から集うのだから色々察してほしい。

「……なあ、織斑。今気付いたんだが」

「どうした？」

「ISスーツで授業を受けるって事はさ」

「ああ」

俺はゆつくりと、しかしはつきりと言葉を放つ。

「先生達もISスーツ姿で授業をするってことだよな？」

『!?』

俺達の会話が聞こえていたのだろう。織斑も含め、周囲の女子達が一斉にこちらに振り向く。

軽く驚きはしたがそれを表に出さず、極めて冷静に言葉を続ける。

「そうだ、どちらも方向性は違えど十二分にモデルとしても通用するあの二人だぞ。色々耐えられるのかお前」

俺の言葉に結構な数の女子達が自分の身体を見下ろして表情を暗くした。

「……いや君らも結構スタイル良いし、美少女ばかりだからね？」

IS学園の入学基準に美少女偏差値とかあるじゃないかと疑うくらいには、そもそもその平均値が高いのだこの学園は。

「……………」

そんな中、織斑だけが何も語らず、動きもなかった。どうやら何かを考えているようだが。

「で、何を想像してるんですかねえ、織斑さんよ?」

「え? あ、いや、なんでもない。なんでもないぞ!」

その反応に、うんうんと頷き俺は織斑の肩を叩いてやる。男の子だもんな仕方ないよな。

「やめろよ!?! そういう全部分かってますよ的な反応!」

ははは、からかうと面白いなやつぱり。けど程々にしとかないとすぐにやりすぎでしまいそうになる。何事も度が過ぎてはいけない。

「む。一夏、よからぬことを考えていたのか!？」

「いけませんわよ一夏さん。そんなことを考えては。ど、どうせならば、ワタクシの完璧なボディを目に焼き付けてくださいませー!」

「な、何を言うんだセシリア! ええい、一夏もじろじろ見てるんじゃない!!」

「や、やめろって箒! ぐふっ!？」

織斑達は今日も平常運転だなーと、遠い目をしながら思う。なんかもう、一生やっつてろって感じ? まあ、見てる分には平和で何よりだが。

「それで、君はどっちが好みなの? 大きいほう? 小さいほう?」

「ふむ。無いよりはあったほうが良いが、だからってそれで全てが決まるわけでもなし。ただ、それでもそれのみで言わせてもらえれば掌大くらいは最低限欲しいと思う」

「へえ、そうなんだ。やっぱり男の子ってそういうものなんだね」

「……………」

背後から隣の席のステキナオンナノコの声がプレッシャー込みで質問を飛ばしてきたから答えたが、振り向く勇氣は俺には無かった。

……いや大丈夫だって! 俺の記憶通りならそこそこあるって。制服の上からでも出てるのは分かるんだから最低基準は確実に突破してるって! だからそんな殺気とも怒気ともつかない怪しい雰囲気はしまってください。

などと、しようもないことをやっている俺達に二種類の声が届いた。

「まったく、何をやっている。もう授業の時間だぞ」

「皆さん、ちゃんと整列してくださいね?」

勿論声の主はIS実技の担当教師である織斑先生と山田先生である。

山田先生は女子達と同じくISインナースーツ姿であり、若干身長は低いながらもメリハリの利いたボデイレインととてもふくよかな胸部装甲に思わず、

「でけえ」

と口を押さえつつも呟いてしまう程で、大変眼福モノでした。

しかしその呟きを一部（特に慎ましい方々）の生徒に聞かれてしまったらしく、白い目で見られたが男なんてそんなもんであるからして、許してくださいマジスンマセン。

ただ、ここで問題が一つ。

それは織斑先生の格好だ。なんと長袖の白ジャージ姿だったのである。

『なんでだよ!?!』

あまりにもその衝撃に織斑と一緒にツッコミを入れてしまった。

……えー、なんでだよ。そこは山田先生と一緒にISスーツ姿じゃないのかよ。俺もちよつと以上に期待してたんだが、なにこのがっかり感。

織斑なんてあまりの衝撃に白目剥いて茫然自失していた。大丈夫かこれ。

そんな俺達に、容赦なく織斑先生によるお得意の出席簿アタックが飛んできた。お陰で織斑は現実に戻ってこれたようだが、何故俺だけ平面打ちではなく角打ちで叩きに来るのか。

「ちよつ、あぶなっ!?! それ、洒落になってませんよ織斑先生!!」

空気抵抗が減った分、速度の上がった一撃を辛うじて避けて抗議する。

「お前がいつも避けるからだ」

「ひでえ!?!」

織斑先生の中で俺の扱いがどうなってるのか問い質したくはあるが、このままだといつまでたつてもぐだぐだが終わらないので黙っておく。

「さて、これから実際にISに触れるわけだが、注意事項は頭に叩き込んだな? 覚えてない、もしくはそう取れる言動が見られた場合は即刻見学させるからそのつもりでいろ、良いな?」

『はいー!』

織斑先生の確認に一齐に答える生徒達。

そんな気合の入った返事と共に授業が始まった。



一歩引いた織斑先生に促されて、山田先生が変わりに前に出て説明を始める。

「それではまず最初に授業で使うISについて、復習の意味も込めて軽く説明しますね」

そう言つて山田先生は俺達に見えるように、前に並んで鎮座するISに振り向く。

「右にある機体は、純国産第二世代近接格闘型IS『打鉄』です。基本装備は大小の近接ブレード『葵』と『桐』。他にもアサルトライフルの『焰備』もありますね」

銀灰色の鎧武者風の機体だ。

女性が扱うことが前提のISにとっては珍しく、無骨という言葉が良く似合う。

大型のスカートアーマーをはじめ、両肩部に非固定浮遊型方式で搭載されている大型シールドが特にそう思わせる要因だ。

見た目通り、防御力に物を言わせて近接戦を得意とするパワーファイターである。

更に第二世代ISとしてもソフトウェア周りの汎用性が高いらしく、様々な武装を装備しても問題が無い為、よくテストベッド用として使われるようだ。

「そしてこちらが、フランス製第二世代全距離射撃型IS『ラファール・リヴアイヴ』です。汎用性と機動力の高さ、それに拡張領域が全第二世代ISの中で最大で多くの武装を格納できる故の高い継戦能力が特徴ですね」

変わつてこちらは明度を押さえた緑色の機体だ。打鉄と比べ、線の細い印象を受ける分、説明通り機動力が高そうである。

「では早速搭乗訓練に入るのでありますが、打鉄とラファールを各三機ずつ用意していますので、このまま六グループに分かれてもらいます。ですがここではちよつと狭いので、最初に搭乗した人はそのままアリーナまで降りてください」

元々六列十人で整列していた俺達はそのまま縦列で別れ、グループを組む。

どのグループも誰が最初に乗るか軽く話し合いがあったのだが、織斑先生の、

「誰が最初だろうが同じだ！ 後で全員乗るのだからな、さっさとしろ！」

との仰せがあり、

「じゃ、じゃあ君で！ 早く早く!!」

と、都下に押し切られる形で俺が最初に乗ることが決まった。

他のグループも随時決まって前に出てくるが、その中に織斑とオルコット嬢の姿は無い。

この二人はすでに専用機があるため辞退したのか、聞こえてきた会話から察するに最初から選考に入っていないようだった。

そんな訳で入学試験以来の、検査以外での初の搭乗である。

搭乗機は深緑の機体、ラファール・リヴァイヴだ。

駐機姿勢のラファールに苦も無く登り、まずはズボンを穿くように脚部に足を入れる。

次に開いた胴体部に身体を預け、袖を通すように腕部も装着する。

「今、服を着るようにISを装着しましたね？ ISの胴体部分は先の授業でも習ったようにアウタースーツとも言って、IS本体から分離可能になっています。万が一ISが動かなくなったらアウタースーツにある緊急着脱機能を使ってくださいね」

山田先生の説明を聞きつつISに完全に身を任せると、開いていた胴体部が自動でこちらの身体を包む。

一瞬、軽い圧迫感があるが、瞬時にアウタースーツのセンサーがこちらの身体の形状を計測しアジャスト、最適なサイズに調整される。

そして眼前にホロウインドウが展開。チェック項目などのメッセージが高速スクロールし、最後に『起動完了』のテキストが表示され、内部の機械が上げる低い声と共にISが動き出す。

女子達から湧き上がる驚嘆の声。慣れないうちはこういう反応になるのも無理からぬ話である。

歓声を背にIS六機プラス二機はピットの発着場から飛び立つ。

そのうちの数機が空中制御が上手く出来きず織斑が助けに入り、オ

ルコット嬢がそれを悔しそうに見ていた。

「やめとけよー。この中で一番の実力者がなにやってんだって話になるから」

「わかってますわ」

ホントかね。なら今すぐにもハンカチ噛みそうな顔すんのやめろよ。

因みに他の生徒達と教員二名は、ピット内にある搬入用エレベータを使って降りてくるので暫く時間がかかる。

「ちよつとISのことで訊きたいことがあるんだけどさ」

「なんでしよう?」

なので、ISの事をよく知っている筈のオルコット嬢に少し質問してみた。

「ISに機能不全があるときってどうやって直せばいいんだ?」

「……? 質問の意味が分かりませんが、とりあえずは自動修復に任せれば良いのでは?」

「いや、ダメージがあるとかじゃなくて、そもそもその機能が働いてないときにさ」

「破損じゃなくて故障の場合ですか?」

「そう」

彼女は唇に立てた人差し指を当てて、うーんと考えた後、

「それはもうハードウェアかソフトウェアの問題になると思うので、専門の方に診てもらおうか、メーカーに出すしかないのではないでしょうか?」

「やつぱさうなるよなー」

半ば予想していた通りの答えに、俺は天を仰ぐ。

「どうかなさいましたの? 何か不備でもおありで?」

「そんなとこ。ちよつと見てほしいんだけど……」

と、悩み相談をしようとしたら、丁度良いタイミングで教員達を先頭に生徒達がアリーナに入ってきた。

「さあ、すぐに始めるぞ! 時間は有限なのだからな」

時間切れか。まあ、普通にしてる分には問題ないからいい、かな?

そんな感じで、ISを用いた初の実習授業は幕を開けた。

特に問題なく授業は進行したが、あえて言うなら織斑の班が奴のラッキースケベ発動と、それに乗じて織斑と仲良くなろうとした女子達の所為で、少し進捗が遅れたくらいだった。

つてか弟の所業に散々慣れているであろう姉のほうは兎も角、山田先生。アンタまで熱っぽい視線向けてどうするんすか。ISのセンサーで全部見えてるですよ、あと自主規制しておくけどその眩きも考えましようね、立場。

……だがまあ、これが俺の知るIS学園の平常運転つちや平常運転か。

そんな風によくやくここでの暮らしに慣れてきた俺ではあるが、この時はまだ知る由もなかったんだ。

この後、半月もせずに俺どころか二組全体をも巻き込む、小さな、しかし強烈な台風がやって来ることに。

と、普通ならここで一旦話を区切って仕切り直すところだが、そうは問屋が卸させてくれなかった。

件の台風が転入生という皮を被ってやって来たからだ。

そいつの名は凰鈴音。中国の代表候補生であり、専用機持ちでもある。

小柄な体格だが、ツインテールがよく動くことと澆刺とした表情、そしていかにも子供の時は男子と混じって遊んでましたって雰囲気から、かなり活発そうな少女だ。

奴はある日の放課後、学生寮のラウンジで寛いでいた俺達二組の前に突然現れ、自己紹介の後にこう言い放った。

「ねえ、クラス代表の座、私に譲ってくんない？」

勿論それを聞いた俺達は皆一様に呆気に取られた表情を作る事しかできなかつた。

そりやそうだろう。いきなり現れた相手に自分たちのリーダーの座を譲れと言われたのだから。

気の短い奴なら、何言つてんだお前？ と怒るかもしれない。

だが俺達は紳士と淑女の集まり（紳士の数が圧倒的に足りないのは置いて）だ。

なので大人の対応をさせてもらった。

「……そうか。詳しく話を聞こうか」

テーブルに両肘をつき、指を組ませたゲンドウポーズでそう返した。

「へえ、随分と余裕じゃない。やっぱりアンタがクラス代表なの？

二人目さん」

「いいや？ クラス代表はそこにいる菊池という者が務めている」

うえ、私!?! と驚きながら自分を指さす菊池。

……あのな？ 今クラス代表について話してるんだから話振られるの分かってるでしょ？ なんて当事者が静観決め込もうとしてのさ。

「ふうん？ あまり強そうには見えないわね……」

「そ、そりや、実際代表候補でも、ましてや専用機持ちでもないからね私!?!」

「……え？」

「え、えくと？」

どういうこと？ と疑問符を浮かべる凰と、その姿を見て更に困惑する菊池。

「なんで素人がクラス代表やってんのよ。このクラスには代表候補すらいらない訳?！」

何故か俺へ勢いよく振り返り凰は言う。

「何人かいるが?！」

事も無げに返しつつ確認を取ると、五人ほど手を挙げた。もう少しいたと思っただけどそうでもなかったか。

IS保有国で、同学年で、同じクラスになるという確率を考えるとこんなもんか？

それを考えると一組が代表候補以外全員日本人なのは、織斑のIS所属国（国籍ではなくIS関係の所属という意味で。因みに俺達二人ともまだ決まってない）を日本にしたっていう思惑が見え隠れする

気がするのは、深読みしすぎか。

その分、二組がバラエティに富んでいて、十ヶ国以上も国籍がバラバラなのが物凄い。

「はあ？ アンタ達それでいいの？ 代表候補のプライドとかないの？」

心底訳が分からないといった感じで凰が問いかける。

実はその辺に関して、一悶着なかったと言えば嘘になる。まあ、アレで決定したとあってはね。あの時はノリと勢いで押し切ったけど、そりゃ不満も出る訳で。

しかしそこは口八丁で乗り切りましたよ。語ると確実に一晩はかかるから詳細は省くが、説得の要点は二つ。

一つ、俺達全員ひよっこ（織斑千冬談）なのだから誰がやろうと同じだということ。

二つ、素人の菊池を鍛えモデルケースとし、二組全体の能力の底上げを図る。

勿論、二つ目が主な理由だ。

あと個人的に言えばジャイアントキリングが見たいってのもある。格下が格上をブツ飛ばすなんて面白いじゃあないか。

それなら俺でもいいのではってなるかもしれないが、どうしても『男だから』というのがついて回るから避けたかったのだ。

ということを凰に説明すると、

「成程ね、一応考えてはいるのね」

こちらの考えは分かって貰えたようだ。これで一安し……、

「けど、それでも譲ってもらおうわよ。駄目なら奪ってやるわ！」

「……………」

納得はして貰えなかったようだ。

もうこれどうすんだよ？ という表情で凰を指さしつつ二組の皆に意見を伺う。

「駄目だよ、人を指さしちや」

「ア、ハイ」

都下に注意され手を下すも、俺の目は死んだままだった。

話は通じてるようではあるが、完全に無視されてる。どうしても我を押し通したいようだ。

……お願いだから、折角纏まった話を混ぜっ返さないでくれ。

それにこの調子で話を続けても双方の主張はずっと平行線のままな気がするが、多分間違いないだろう。

どうしたもんかと、頭を悩ませていると、

「菊池、だっけ？ なんならこの子とクラス代表を賭けて勝負してもいいわよ？」

……あ、まずい。

「それでいいんじゃない、あいたっ!？」

「おいおいおいおい、それじゃお前が有利すぎるだろ。さっきも言ったが菊池は素人なんだぜ？」

凰の意見に同意しかけた菊池をテーブルの下で黙らせ（蹴っ飛ばした）。

痛がる菊池をこちらに招き寄せ、俺は凰に聞こえないように文句を言った。

「おいこら、なに流されそうになってんだよ」

「だって、やっぱり私じゃ力不足だよクラス代表なんて」

「良いんだよそれで。寧ろ最初は実力がなくらいで丁度良いんだよ。大体クラス代表なんて普通の学校の委員長とかと一緒に雑用みたいなものだろ？ そこまで心配することねえって」

「あ、やっぱりそれが本音!? 私に押し付けたって事？ 酷くない?」

……知りません。それにスピードで勝負した時も決して手を抜いたりはしてませんよ？ 勝ったら勝ったで、先の理由で辞退しようとは思っていただけ。

勿論そんなことは口には出せないの、口笛を吹いて誤魔化す。

「何これ見よがしに内緒話してんのよアンタ達。それで、譲るの？ 譲らないの?」

このままでは凰に代表の座を渡さないといけない流れになりそうだ。俺や他のクラスメイトは兎も角、現クラス代表の菊池がこの調子ではすぐに明け渡してしまいそうだ。

簡単にそんなことをされれば、クラス全員を説得した俺の苦労はどうなる。ホラ、気付けばカーティス女史が半眼でこちらを睨んでるし。説得するの結構苦労したんだからな。

ともかくどうする。このままこちらの意見を受け入れてもらうのは難しそうだ。こうなったら押して無理なら引いてみる作戦で行くか。

「そもそもさ、なんでクラス代表になりたいんだよ？ 転入して初授業より前にこんなこと言い出すなんて、よっほどの理由があるんだろ？」

こちらの意見が通らないんなら、向こうの理由を潰してしまおうという考えである。

こちらが立たないのであれば、あちらを引つ込めるしか方法がないのだ。

その為にはまず、鳳の動機を知らなければと思って聞いたんだが、「ぐっ、そ、それは」

何故か鳳は言葉に詰まってしまっていた。

頬を染め、手をバタバタと振る姿は、何か恥ずかしいことを誤魔化そうとしているかのよう。

「あー、なんか知らないが、訊いちやまずいことか？」

「い、いやそうじゃない……そうだけど、そうじゃないっていうか……」

さつきまでの威勢はどこへやら。この挙動不審な態度、どこかで見ただことがあるような気がする。そう、まるで、アニメなどで恋をしたヒロインがそのことについて訊かれた時のような……。

……マジで？

もしそうなら可能性があるのは、今まで面識のなかった俺ではなく、

「織斑か？」

訊いた瞬間、鳳は顔全体を赤くして、大量の汗をかきだした。

「そ、そそ、そんな訳ないでしょ!?! 変なこと言わないでよね。一夏と私はそんな仲じゃないわよ!」



凶星だこれ。一夏と呼び捨てにしている辺り、お互い仲は良かったようだ。

「墓穴掘ってんじゃねえか。ハア。……皆、後はお願いするわ」

「オツケー任せて」

「え？ なに、ちよ」

二組のコイバナが大好きな連中に、両腕をそれぞれ取られて食堂の隅までドナドナされていく凰中国代表候補さん。

このまま根掘り葉掘り、一から十まで全部吐かない限り解放されないだろうな。お気の毒様。合掌。

そんな様子を眺めた俺は一気に疲れが襲ってきて、机に突っ伏してしまふ。

「これさー、俺、出る幕なかったよな？」

「そう言わずに。お疲れ様」

言いながら手でこちらを扇いでくれる都下。ありがとうございませう。

「しかし何故あそこまで断ろうとした？ お前からすればクラス代表なんて誰でも良かったんだろ？」

「うーん？ まあそうなんだけど。けどさ」

「？」

首を傾げるカーティス女史。その様子に内心で苦笑しつつ、

「折角なんとなくなるとはいえ、クラスが上手くいったじゃん？ それを後からやってきていきなりあんなこと言い出したら、後で困るのアイツだろう？ そーいうの嫌なんだよね、俺」

話を拗らせる前に終わらせれば、そんなに根が深くなることもないだろう。そう思つての行動だった訳だ。座右の銘は日々平穩、ですのう。

「へえ、初対面の女の子のためにそこまで考えてあげるんだ。へえ」

「そんなんじゃないやねえし。含みのある言い方しないでもらえますか？」

理由は分からないけど、都下さんがちよつと怖いです。

その後、織斑との関係を全て白状させられた凰(三時間拘束)は、まるで幽鬼のような足取りで自分の部屋に戻っていった。

夕食食べてもまだやってたから、風呂に入った後に様子を見てきたらそれでもまだやっていて、呆れというか、感心というか、そんな感情を抱いたが、見る度にやつれた顔になっていく凰はちよつと面白かった。あの様子であれば二組の連中に溶け込むのもすぐだろう。

しかしそうやって聞き出された話と、公表されているプロフィールとを合わせると、アイツの半生大体わかるのではなからうか。恐ろしい話である。

とりあえずこのことは織斑には秘密にしておこうと思う。その方が面白そうだし。

そして次の日。

前日の暴露会にもめげずに朝っぱらから一組の教室へ突撃した凰は大見得を切るも、やはり知り合いだった織斑先生に物理的に注意され、何とも情けない体たらくで二組の教室へと退散してきた。

「そんじやもう知ってると思うけど、最初に転入生紹介するでー！入ってきー」

時間ギリギリにやってきたナナコ先生は昨日の事とついさつきあったことを知らないのです、ごく普通に転入生の紹介をするが、それが笑いを誘うのは仕方ないことだ。

凰もその空気に気付いているのか、とても恥ずかしそうに自己紹介をしていたが、これは我慢しても耐えられるものではない。

「く、くく……」

「ぶふっ！」

「ツ、……………ツ！」（↑限界を超えて息が出来ない）

皆、凰から視線を逸らして肩を震わせていたが無理もない。

「どうしたんや、早速いじめか？ 感心せんよ。君も辛いんなら正直に言うんやで。センセー、ビシツと皆叱ってやるさかいな？」

ナナコ先生、今その優しさは凰を更に追い込むだけであると同時に、俺らの我慢の限界を容易く破るものです。

腹筋崩壊。

「わ、笑うな！ 笑うなああああああああああ！！」

涙目少女の虚しい叫びが教室に響いた。

## その8

唐突だが、心が折れる音、というのを聞いたことがあるだろうか。実際にそんな音が鳴るといふ訳ではなく、何か絶望的なことで心が屈してしまう時に聞こえるという、文学表現の一つである。

だが、俺は今この瞬間、確かにそれを聞いた。

具体的には、プラモデルが砕ける音だった。

それは周りの騒音など無いかのように俺の耳へと飛び込み、脳を震わせ、次の瞬間、俺の中から感情という感情が抜け落ちた。

膝から崩れ落ち、呆然と残骸を見つめる俺に、消えた感情の空白を埋めるかのように記憶達が呼び起される。

発売されたのを知り、買いに走り、組み立て、改修し、塗装し、現状で出来るだけ心血を注いで完成させるまでの記憶の数々。

それらと共に、この悲劇が起きた原因も思い出される――。

事の起こりは、ほんの数分前に遡る。

夕食後に俺と織斑の寮室に突撃してきた来客がそもそもの発端だ。

その時織斑は漫画を読んでいて、その傍らで俺は完成した『蒼獅子』という名のロボットのプラモを携帯端末で撮影していた。

「楽しそうだな、鼻歌まで歌って」

「まあな。やっと完成した力作だからな」

IS学園に来て初めて完成した作品なので、記念的な意味もある。

そうでなくても、入学の準備で忙しい時期に暇を見つけてフライイング販売したのを運良くゲットできたものだからして。

好きなラノベのシリーズに出てくる、劇中で最初に主役が乗った機体であることもあって楽しみにしていたのだ。

持てる技術の粋を集めて作ったのだから、愛着も湧こうというものの。

因みに撮ってる写真は、『セカンドマン』というアカウント名でやっているSNSに投稿予定である。

日々のあったことや思ったことを呟いたり、他のユーザーと絡んだ

りできるサービスなのだが、こうして時々作ったものの画像をアップロードしている訳だ。

感想なども貰え、今回もどういった内容で返信が来るのかというのも楽しみだったりする。

と、アングルやポーズを変えて撮影し、それらをネットに上げていると、何やら部屋の外から騒々しい足音が聞こえてくる。

どうやら複数人の足音らしく、それはこちらに近づいてきているようだ。

そして、

『一夏ッ!!』

勢いよく開け放たれた寮室の扉から対照的な外見を持つ、二人の女子が突入してきた。

一人は日本の女子平均身長より高く、メリハリの利いたスタイルのポニーテール少女、篠ノ之箒。

一方、日本の女子平均身長より低く、メリハリの少ないスタイルのツインテール少女、凰鈴音。

この二人が異口同音に我が同居人の名を叫び、本人に詰め寄った。「ど、どうしたんだ？ 二人とも突然」

織斑がいきなりの二人の訪問に首を傾げて問うた。

「どうしたじゃない！ 貴様、鈴が酢豚を作れるようになったら毎日作ってもらおうと約束したそうだな？」

「え？ あ、ああ、そうだな。そんな約束もしたな」

「ちゃんと覚えてるようね」

うんうん、偉いわ、とでもいうかのように織斑の返答に頷く凰。

……ここで既に悪い予感を感じ取ってはいたのだが、それがどういう風に当たるかを予想できなかったのが悔やまれる。

「それがど、どういう意味か分かってるのか？」

「うん？ どういう意味って、……毎日酢豚を奢ってくれてるって事だろ？」

「え？」

「は？」

傍で聞いていた凰が呆然とした表情になったが、蚊帳の外だった俺も同時に同じ顔をした。

「あの頃はバイト帰りとかに毎日鈴の家でご飯食べていたからな。通常価格よりも安く食べさせてくれたから助かったぜ」

……おい馬鹿織斑こら。それ意味が違ッ!?

昨日のコイバナ事情聴取の過程で明らかになったことだが、凰の家は昔、中華料理の店をやっていたらしい。

だが両親の離婚を機に店を畳み、凰自身は母親について中国に帰属したそう。

その所為で織斑と別れることになり、その逆境を跳ね返すかのよう中国で出会ったISでその才能を開花し、一年足らずで代表候補までになり、今に至るのだそう。

しかし問題はそこじゃない。織斑が約束の意味をはき違えているのが問題なのだ。

「ふん、やはり勘違いしていたか。そんな事だろうと思った」

篠ノ之がそれみたことかと凰を見るが、当の本人のほうは顔を伏せてしまっている。

まさか織斑が一大告白（少なくとも凰自身はそう思っているようだ。それを聞いた二組の連中は俺を含め、皆生暖かい目をしたが）を盛大に勘違いしてたのだからそれも仕方ないことだろう。

中国に行った後、金も地位も名誉もない不愉快だった中学生の小娘が日本にいる織斑に会うには、今のご時世、ISに頼るしかなかったのだ。

それをたった一年で叶えるには、それこそ今の俺には想像もつかないような努力や苦勞をしてきたに違いない。

なのにこんなしょうもない勘違いで心の支えだった思い出を崩されたのだ。心中穏やかじゃいられない筈だ。同情に値する。

「まあ最初は雰囲気もあったから、毎日味噌汁を作ってくれてるっていうのと同じ意味かとも思ったんだけど……」

『!?!?』

余裕だった篠ノ之、意気消沈していた凰、そしてそれらを見守って

いた俺、その三人が織斑の発言にそれぞれ反応する。

……まさかこの朴念仁が、凰の告白を正確に理解していただと!?

しかし、

「けど鈴がそんなことを言うはずがないなって思い直したんだよ。きつとその時の俺の境遇に同情してくれたから言ったんだらうって。そうだ、もう酢豚は作れるようになったのか？ 今度食わせてくれよ」

血の気が引くとはこの事か。今この織斑の台詞には戦慄せざる得ない。

一旦下げてから持ち上げ、更に落とすとか、鬼畜の所業である。俺が凰の立場なら立ち直れない。女性不信に陥ること請け合いだ。

そして何よりも酷いのが、これらの事を無意識に発言しているということだ。

確かに、確かに凰も暴露中にこれは遠回しすぎたと語ってはいたが、ここまで乙女心を抉るようなフラれ方はない。断られるどころか、恋慕の情にすら気づいてもらえない。いや、気付いてもらえそうになったのに、真っ向から否定されるなんて。これなら悪意でフラれる方がまだマシだ。感情のぶつけ所が無さすぎる。

それでも、それでもどうしても溢れるものはあるのだろう。徐々に彼女の目に涙が溜まり、一つ、二つと零れていく。

そして静かに、しかし大きく息を吸い、内に溜まった荒ぶる感情を織斑に叩き付ける！

「一夏の……、一夏のバカあああー！ツ!!」

心からの叫びを上げ、凰は部屋から走り去って行く。

それを織斑は目を見開き呆然と見守るしかなかった。奴にとってあまりにも突然すぎる事態なのだろうから。

……けどな織斑、事情を把握しているこつちからすりや、黙って見ている訳にはいかねえのさ。

「おい織斑、さっさと追いかけるよ」

「……え？ あ、いやけど、何がどうなってるんだ？」

本気で分からないといった顔をする織斑。

唐変木、朴念仁、鈍感野郎、そう言った単語が幾つも頭をよぎる。前々から話を聞いたり、普段の態度だったりから多分そうだろうなとは思っていたが、ここまで酷いとは。

さすがに傍観決め込もうとしても許容範囲を超えている。

だから、

「馬鹿かお前、馬ッ鹿じゃねえのか!! またはアホか!! てめえ、本当に気付いてねえのか!」

織斑の胸ぐらを掴んで言ってる。この場で何の気兼ねもなくコイツ言ってるのは、第三者の俺だけなのだから。

そう、恥ずかしそうに照れながらも、それでもやってやったんだと満足気に語っていた時の凰の顔を知っている身としては、それを無駄にしない程度には言ってるやらないといけないのだ。

「今のはどう考えても告白だろうが! さっきの、いつ、どこで言われた?」

「あ……、ほ、放課後の、校庭の隅の木の下で」

「そんなとき、他に誰かいたか?」

「いなかった」

「その木の下で告白したら付き合えるとか、逸話がなかったか?」

「……あった」

「雰囲気、出てたんだろう?」

言葉では返さず、首を縦に振る織斑。

「それにちゃんと答えてやったか?」

「いや答える前に、怒られはしなかったけど、今みたいに急に走っていなかった」

恥ずかしさに耐えきれなくなったと、凰は言っていた。

言い方が回りくどすぎるし、返事も聞かずに分かれて、そのまま中々に引越してしまうから変に拗らせるんだ。まあ、答えを聞いても今のようになっただろうが。

「そんで? 俺が言ったからだけど、ちゃんと意味は理解したよな?」

「じゃあどうするよ?」

「……………ッ!」

織斑は顔を引き締め、俺の手を振り払う。そして風を追いかける為に部屋から出ようとする。

「言っておくけど、勢いやアイツへの同情で答えんなよ？ 失礼すぎるからな。どうなるにせよ、自分の気持ちを正直に言うんだぞ」

「……分かつてる」

「ホントかよ。まあいいや、後で殴らせろよ？」

「怖いな」

「女の子を本気で泣かせた罰だ。いいから早よ行け」

「応」

そして織斑は全力で風を追いかけていく。

青春してるなあ、と思う次第である。生まれてこの方、他人のも含め恋愛事には全く縁のなかった俺ではあるが、気分はもう若者の恋愛模様を温かく見守る中年の気分である。……枯れてないよね、俺？

取り敢えず、俺の出番はここまでである。人の恋路を邪魔したこともなければ、応援することもなかった俺ではあるが、今回は事情が事情なので仕方なし。あとはどういう結果になるにせよ、当人同士で解決していただきたい。これ以上は俺に出る幕なんてないのだから。

なんて、部屋の真ん中でしみじみ思っていると、

「おい貴様」

声をかけられた。篠ノ之だ。すっかり忘れていた。

「ん？ どったの？」

その声の硬さから、少し嫌な予感をさせつつも振り返る。

するとそこには、篠ノ之が木刀を構えた姿を見ることができた。

どこから木刀なんて持ってきた？ もしかして最初っから持っていたのか？ 急な事態で目に入らなかつたのだろうか。

「何故あんな……、鈴の手助けになるようなことを言った。前に私にアドバイスをくれたのに！」

いつさ？ もしかしてこの前、皆で屋上で昼飯食った時の事か？

「昼飯の時のあれか？ あれは事実を言ったままで、別にお前の為のアドバイスって訳じゃ……、って危ねえ!？」

……おいおいマジで木刀振り回してきたぞこの娘！



「ちよ、おま、シヤレにならねえぞ!」

「問答無用!」

ていうか俺なんかした? なんで篠ノ之はここまでキレてんのさ。いくらなんでも理不尽だろ。

剣道有段者の攻撃だ。整った場でないとはいえ、素人が容易く避けられるような代物ではない。それを何とか避けられている自分を褒めたくなる。

これ以上に速い剣戟といえば、IS学園の入試の実技で喰らった剣ではあるが、そう考えるとあの時の試験官ってどんだけの実力者だったのかということである。

と、思考がズレたが、気にしないといけないのは目の前の風切音を鳴らしている木刀である。

喰らえば怪我、当たり所が悪ければそれ以上もありうる事態も考慮しなければいけない状況だ。気を逸らしている暇なんてない。

右から左からやってくる木刀を無様なポーズで回避し続ける。

そうして篠ノ之の連撃を避けること数度、それは起こった。

篠ノ之の最上段からの振り降ろしをギリギリで飛びのいて避ける。すぐ傍を木刀が通り過ぎる音に冷や汗をかくが、直後に嫌な音が聞こえた。

反射的に発生源に目を向けると、そこには無残にも木刀で砕かれた俺の「蒼獅子」が。

「ああ!?!」

「む?」

そこで漸く我に返った篠ノ之が動きを止める。

だがそんなことはどうでもいい。既に俺の視線は砕かれた蒼獅子にしか向いていないのだから。

「す、すまん。ワザとではないんだ。ワザとでは」

ワザとなら万死に値する。というよりも、頭が追い付かない。は?

壊れた? まだ完成して三日と経っていないんだぞ。

「また作ればいいだろ? 壊した分は弁償するし、それで許してくれ」  
篠ノ之が何か言っている。しかしそれが脳に届いた瞬間、理性で抑

える前に感情が爆発した。

「ここから、出ていけえー！ー！！」

……これに費やした時間と労力と思えば、金じゃ解決しないんだよ!!

それから小一時間、織斑が返ってくるまで俺はずっと碎かれた蒼獅子を見つめていたという。

ちよつと受け止めきれない現実が辛い。不幸だ……。

世界が真つ白だ。

「ハハ、ヒバリが飛んでら。食ったら美味しいかな……」

「食べちゃダメだよ!？」

いつの間にか寝て起きて、無意識に支度をして、呆然自失としたまま授業を受けて、昼になって漸く自発的に発した最初の一言がこれだった。

今鏡を見たら死んだ魚のような眼を見ることができらるだろう。

そう、未だにシヨックから立ち直れない俺は、自分の席で灰になっていた。

因みに先の発言は、昼食に食ったもの全てに味を感じなかった為である。

これはイカンと頭の隅で警鐘が鳴っているが、今は何もする気が起きない。

「こんな状態の彼、初めて見たよ」

「重症だねー」

隣の都下や、やってきた菊池が昼食を食べながらこちらを心配してくれているが、もう暫くは無理そうです。

「……はあ」

そしてもう一人、魂が抜けた奴がこの教室にいる。

俺から都下の席を挟んだ向こう、二個隣の席で机に突っ伏しているのは凰鈴音だ。

彼女は俺と同様、授業に身が入らず、一日中溜息ばかりついていた。今も溜息のついでにご飯を食べているような状態だ。こちらもこ

ちらで重症のようである。

どうやらあの後、ちゃんと織斑は凰に追いついて話し合ったらしいのだが、織斑からも詳しいことは聞いていない。その余裕もなかったというのもあるが。

昨日の騒ぎは一年を中心に広く知れ渡ってはいるが、事情そのものは知られていないらしく、様々な憶測が飛び交っているのを風の噂で耳にした。

その影響か、さつきから一組がいつも以上に騒がしいことこの上ない。

どうせ木刀さんとオルコット嬢辺りが、織斑を挟んで姦しくしているのだろう。

因みに、篠ノ之のことは昨日の一件で木刀さんと呼ぶことにした。少なくともIS学園在学中は変えるつもりないです。ささやかな復讐ですよ。心の小さい奴だと思われようが知らん。

……凰のほうは、あの後何があったか、言いたくなったら言ってくるだろ。それまではそつとしておこう。

お互い、昨日は色々ありすぎた。心の休息が必要なのである。

『……ハア』

「人を挟んで溜息つかないでくれるかな!？」

いや、ホント、都下さんマジすんません。

で、丸一日かけてなんとか復活した俺は、性能テストに駆り出されていた。

ISではなく、ISスーツの、だ。

IS本体はどうした、と言いたくなるが、色々事情があるのだそう

だ。

ISコアの絶対数が少ないこともあるが、そもそもどこの国が俺のISを用意するんだ、というところからもめているらしい。

前例として、既に男で最初にISを動かした織斑にはISが提供されているが、アレは完全に曰く付きのもので、割とすんなりと支給されたのは特例中の特例だったそうだ。

触らぬ神に祟り無し、という諺が頭に浮かぶが、誰もが出てくるものが最大級の厄ネタだと確定してる藪を下手につつきたくなかったのだろう。

その反動からか、バックに何も無い誰もいない二番目の男子の方に色々試してみよう、ということらしい。

そしてどういう流れでそうなったかは知らないが、なんと俺自身にスポンサーがついたのだ。しかも複数社。

どうということかと思うかもしれないが、レーシングチームを思い浮かべてくれればなんとなく納得してくれるのではなからうか。

俺のIS関連の活動について色々サポートが入るのだが、IS学園にいる間の三年間を取り敢えずの期間として、そういうことになったのだ。……なって、しまったのだ。

ありがたい話ではあるのだけど、あまり手放して喜べないのだ。なんせ、話の規模が俺個人に対してデカすぎるからだ。

出資希望社総数、実に四二八。

ISを動かせる男というものの価値はこれまで何度か語ってきたが、これ程かと本気で頭を抱えたもんだ。

とはいえ、それじゃ多すぎるということで、国連やらIS学園やらが厳選し十分の一以下にまで減ったがそれでも多いと思う。

その中でいくつか挙げるとすれば、アーカム財団、ASE、ヴェクター・インダストリー、財団X、鴻上コーポレーション、ブキヤ、I・A・I、IZUMO、篠原重工、三菱重工、シャフトエンタープライズ、スターク・インダストリーズ、ウエイン・エンタープライズ、東亜重工、あと個人出資で寺月恭一郎の名前もあるが、俺に死ねというのか。

ともかく、そのサポートの一環として試作のISスーツ（アウターとインナーの両方）が何着か送られてきたので、それらのデータを取ってフィードバックし、俺にあうものを作ろうということだった。「どうです、山田先生？　なんか良いデータ取れました？」

打鉄に乗ってテスト項目をこなしていった俺は、規則上IS学園に直接企業が入れないので代わりにデータ収集をしてくれている山田

先生に通信越しに問いかけた。

『そうですね、中々良いデータが取れたと思いますよ。使ってみた感想はどうですか?』

「悪くないっすね。さっきのみたいにこっちの動きに反応しすぎるってこともないですし。ただ装甲の面積が少な目ってのはちよつと不安ですけど」

『成程。ではあと少しで終わりですので頑張ってくださいね』

「ういーっす」

と、こんな感じでデータ収集は進み、つつがなく終わるかと思つた時だ。

「てーい」

いきなり真横から、巨大な刃が襲ってきた。

「つとおお!」

危機一髪、弾かれるようにして反対方向へと飛びのきそれを避ける。

中腰の側転から態勢を整えつつ振り向くと、そこには、

「やつ」

見慣れないISを纏つた風が良い笑顔で手を上げていた。

「やつ、じゃねえよ! 危ねえだろ!」

「目の前をフラフラ飛んでたから、ついね」

「つい、じゃねえ!!」

死んだらどうする! と言いたいところだが、シールドバリアや絶対防御があるだろうと言われるだけなのでやめておく。

「……で、いきなりなんだよ? なんか用か?」

「いや、その、別に用があるって訳でもないんだけど……」

「ん?」

歯切れが悪い。人のことは言えないが、まだ昨日のことを引きずり……ああ。

「ああ、結局フラれたのか。成程そーいう」

「ちよ、馬鹿! アンタねっ!!」

いきなり攻撃されたんだから、これくらいの意趣返しはさせてもら

わないと割に合わんのだからして。

そしてどちらともなく一息吐く。

「……返事はまだよ。けど、その所為でうじうじ悩んでも私らしくないっていうのにやっとなづいて。それで気分転換に身体動かそうと思ってアリーナにきたらアンタがいたから」

「H A H A H A、そんなんで命の危険に晒されるとか、俺ってヤバくね？」

「うっ、悪かったわよ」

ばつが悪そうに謝るので、仕方なしに許してやる。あんまり追及しても仕方ないし。

「それで何してたのよ？ なにかテストしてたみたいだけど」

「それがな……」

何をしていたか凰に説明する。

すると凰はニヤリと笑みを浮かべて、

「じゃあ私が相手してあげるわよ。実戦データも取れるで一石二鳥でしよ」

「俺は別にいいけど。……ちよつと確認取るわ。山田先生？」

『はい、なんですか？』

今まで肉声で喋って通信に流していなかったので、山田先生にこのまま模擬戦をしていいか尋ねる。

すると了承を得たので、仕切り直す為に凰との距離を取る。

両者共に戦う準備をしている時にふと、

「そーいや、ISでまともに戦うの初めてかもしれん」

と、思い出す。結局これまでに戦ったのって、入試の時以来なんだよな。戦いになってたかどうかすら怪しいが。

『へーそーなんだ。じゃあISについては先輩である私の胸を借りるつもりで来ていいわよ』

「いやそんな薄い胸を張って言われても……あ」

『あ？ 今なんて言った？』

拙い。今俺地雷を踏み抜いたわ。

『言っではならないことを言ったわね。覚悟は良いわね？』

良くない良くない。絶対良くない。

その恐ろしい気配を漂わせる風から思わず視線を逸らすと、自主練をしていたり観客席に疎らに座っていた女子達全員からギルティコールを貰った。親指を下に向けられるジャスチャー付きで。

……くっそ、味方が一人もいねえ！

まあ、俺が悪いのは理解出来るので、何も言えやしないんだが。

『死ねえ！』

などと思っていると、この上なく分かりやすい死刑宣告と共に地獄が始まった。

そして、

「ぎゃあああああああ!!」

四分二十八秒。

それが、俺が全面降伏で土下座までし、食堂の豪華パフェを献上することが決まるまでのタイムだった。

## その9

授業が半チャンで終わる土曜日の午後、I S学園の生徒は思い思いに時を過ごしていた。

I S学園の生徒らしく、自主練に励んだり、勉学に勤しんだり。はたまた、部活や趣味に没頭したりと様々だ。

これが日曜や祝祭日になると、学校設備は兎も角、教師陣の殆どがオフ日となる為、土曜の内に相談などしておこうと、熱心に勉強のことなどについて訊きに行っている生徒もいる。

そんな中、俺自身と言えば大体が体力作りのために走り込みなどをしてている。

勿論毎日の放課後にある程度の運動はしているが、いくら男子として基礎体力が女子に比べてあるとはいえ、それに胡坐をかくようなことは出来ないのだ。

何故ならI S操縦者はトップレベルともなればオリンピックに出るようなアスリートと変わらない（というかアスリートから転向など普通にある事例）為、それらを育成する機関であるI S学園の生徒たちの体力も推して知るべしなのである。

無論、皆が皆、化け物クラスの運動神経という訳ではないが、たった二人しかいない男子生徒が女子達と混ざったとき、下から数えた方が速いくらいの体力しかないというのは考え物なのだ。男のプライドってのにも関わってくるのだからして。

そんな訳で入学当初よりは体力ついてきたかなと思う今日この頃であるが、その体力作りに最近、変化があった。

最初は一人でやっていたのだが、二組のいつものメンバーが合流することになったのだ。

理由としては単純で、一年二組クラス代表育成計画が始動したからである。

我がクラスの代表である菊池健美、彼女は学力は兎も角、体力はそんなにある方ではなかった。

そりゃそうである。元々ゲーム大好きっ子のインドア派少女なの



だからして。

話し合いの結果、ISの操縦技術云々以前に体力つけなきやどうしようもねえ、というのが満場一致（本人以外）した意見だった。

その時、本人は顔を青くしていたが、今と比べればだいぶマシといえよう。

何故なら、

「どうした！ もうバテたのか？ だらしないぞ、腹から声出せえ!!

いちにーさんしー!？」

『くろろさん!!』

「にーさんしー!？」

『くろろさん!!』

現在進行形でカーティス女史にスパルタ式で扱かれてるのだから。鬼教官からのプレッシャーにあてられた所為で涙目になっており、疲労とも合わさって中々に酷い表情をしていた。

「これは酷い。男の俺からはとてもじゃないが言えないので、都下さんお願いします」

「私に振る!! コメントに困るよ！ 私も結構辛いし！」

「何!! 二人して何さ!! これ以上私を追い込む気かな？ 泣くよ？」

私ホントに泣いちやうよ!？」

……自分で言ってるうちはまだ大丈夫だな、多分。

そんなこんなで現在、俺達は学園島内のジョギングコースを走っているのだが、これが結構きつい。

元々島であつたのを開拓して作られたIS学園である為、高低差もあり距離も長い。

それを後ろから怖ーい人に突っつかれながら走るのだ。涙目になるのも納得せざる得ない状況である。

因みに俺と都下も一緒に育成計画に参加しているのは、前にも言つたように二組全体の能力底上げという名目からの被験者になっている為だ。

「口を動かしている余裕があつたら、身体動かせ！」

「イエス、マム！」

このようにカーティス女史のドSっぷりがいかんなく発揮される  
訓練内容であるが……、

「おい、何か言ったか？」

「ツサー！ 何も言ってますせん、サー！」

……もとい、カーティス女史の適切な指導が光る訓練ではあるが、  
ただ闇雲にハードメニューにしている訳ではない。

育成計画の方針が決まり、訓練メニューを決める為に、我が二組の  
副担任で体育教師である木本先生にカーティス女史と共に相談しに  
行ったのだ。

その時の、カーティス女史と木本先生の会話が酷かったのをよく覚  
えている。

「木村先生、訓練メニューを考えたのですがどうでしょうか？」

「どれどれ。……もう少し全体的に量を減らした方が良いでしょう。こ  
れではオーバーワークになると思います」

「そうでしょうか？ これくらいやらないと他の生徒を超える、まし  
てやクラス代表としてやっていけないと思うのですが」

「そう思うかもしれませんが、これは貴女レベルではないにしろ、下地  
が出来ている者向けの内容ですよ。菊池さんは体力面では素人もい  
い所ですよね？ 加減は考えるべきです」

「成程、確かに」

「それにですね……」

「？」

「少しくらい余裕を持たせておけば、適時練習量を増やすことが出来  
るでしょう？」

「なんと、そこまでお考えでしたか」

「ふふふ」

「フフフ」

この時、窓の外の景色を眺めて現実逃避を始めたのは言うまでもな  
い。

……菊池に聞かせていたら、多分逃げただろうなあ。

と、回想していたら、

「残り一周！ 但しお前はそれプラス、ショートコース一周追加だ！」  
「はあ!?.. なんでだよ！」

「またいらん事を考えていただろ。私達三人がロングコース一周するまでにゴール出来なかつたら、この後全員にデザート奢りだからな」  
「ちよ、それ理不尽!!.. つかまだマシに見えるかもしれないけど俺も結構一杯一杯だからな!」

「お前のほうが速くゴール出来たら、なんといつたか、最新ガ○ダムのプラモ買ってやってもいいぞ?」

「無視かよコノヤロその話乗ったぞ見てろよチクショウ!!」

疲れた身体に鞭を入れ、ダッシュ開始。上手く乗せられたと思うが、気にしてはいけない。自分でも分かっているから。

なんとか余計な出費を抑えられた(だからと言って儲けた訳でもないが)、その日の夜。

携帯端末経由で、突然呼び出しを受けた。

送り主は我が一年二組担任、ナナコ・ブラックウエルだった。

何の用かと返信すると、『頼みたいことがあるねん。ちよつとこつち来ーや』とのこと。

なので普段は全く寄り付かない職員寮に向かうことに。

そもそも学生寮は学年毎に一棟ずつ、計三棟が並んで建っており、それが一階の渡り廊下で繋がっている。

そこから更に三年の寮の向こう、校舎からは最も遠い位置に同じような渡り廊下で繋がっているのが職員寮だ。

職員寮そのものは学生寮に比べて建物自体の大きさは少し小さく、部屋数もそれ相応だ。

しかしその分、部屋自体は大きく、全室個室なのだとか。

「改めて考えると、やっぱり金かけすぎだよなー」

IS学園及び、IS学園島の金の出どころは一応IS発祥の地というか元凶である日本から出ているが、各国からの設備やセキュリティ等に対する要望が強く、どこもが納得するレベルにするにはかなりの金額が動いたらしい。

しかし、どの国もその辺日本が泣き寝入りすると高を括っていたが、ここで開き直った当時の日本国首相が逆に、これらを十全に機能させたかったら金寄越せと逆脅しをかけたとか何とか。麻雀勝負で決めてたんじゃねえの？ とか言いたくなるが、真相は闇の中だ。その結果、IS学園島全体の開発費は日本が半分以上出し、作りもしたが、運営費についてはその負担が半分減っているのだという。まあ、そんな四方山話は置いて。

「おじやましませう……」

遠慮がちに言いつつ、俺は職員寮に足を踏み入れた。

エントランスに入ると、一部間取りや設置物の違いはあるものの、雰囲気は学生寮のものとそう違いはなかった。

そうして辺りを見渡していると、

「お、結構速かったなー。こつちやこつち」と、声をかけられた。

見れば壁際に並べられているソファーに俺を呼び出した張本人が座っていた。どうやらここで待っていてくれたようだ。

「ばんわっす先生。それで、何の用です？」

「おう、それやねんけどな。自分、明日空いとる？」

「明日つすか？ ……何の用事もないですけど」

明日は一日、部屋でのんびりして気が向いたら身体動かそうかなと思っっていたくらいだ。

まだまだこのレベルに学力が追いついてないので勉強しろという話でもあるが、それもまあ、自分に言い訳程度にはしとこうかとも考えてはいたが。

「そうか、じゃあ明日本土のほうに行くから、うちに付き合えや」

「え？ 付き合え？ デートの誘いですかヤツフォー!!」

「なんでやねん！ ちゃうわボケエ!!」

ツツコミ頂きましたー。ですよねー分かっています分かってます。

「ハア、自分、そういうボケ、余所じややめとけや？ 自分の首絞めるだけやで」

「いやあ、最近どうにもそつち方面で鬱憤が溜まってまして。あ、思春

期特有のリビドー爆発的な意味でなく」

「なんかあつたんか？」

「それがですね、最近妙な先輩に付きまとわれてる気がするんすよ。書かれた文字の変わる扇子持った人なんですけど。今日もランニングしてたらいつの間にか視界の隅にいて、悩殺とか眼福とか書かれた扇子広げてジョジョ立ちで見せつけてくるんすよね」

「あー、あの子か。あの子なあ」

「知ってるんで？」

「知ってるも何も自分も一度は見たことある筈やけど、……まあええわ。うちのほうから少し言っとくわ」

「問題児って奴ですか？」

「せやな、そんなところやわ。いろいろ事情が複雑でなあ」

「よく分かんないですけど、お疲れ様っす」

「……自分にも原因の一端はあるんやけどな。とはいえ、自分じゃどうしようもないか」

やっぱりハニートラップ関係なのだろうか。

「いや、あの子も面白半分冗談半分でやっと思っただけ。というか、まさか本気引つかかりそうになってたりせーへんやろな？」

「あ、それは問題ねえっすわ。アレ、絶対人をからかうのが楽しいってタイプだろうし。まともに付き合ったら疲れるだけですよね、多分」  
「分かっているならええわ」

どちらともなく一息ついて、この話題は終了。本題の続きへと戻る。

「それで本土に行くって言ってましたけど何しに？」

「君の息抜きがてら、うちの買物に付き合っただけや。ほれ、入学してからこっち、君と織斑君、学園島から出られへんかったやろ？」

「マジっすか!？」

朗報である。

俺達男性IS操縦者は安全確保の為、学園島から一切の外出を禁じられていたのだ。

勿論女子生徒並びに教職員などはこの限りではなく、ある程度の制約はあれど定期便などで本土に渡れるのだが、それを横目に歯痒い思いをしていたのだ。

確かにこの島にも特殊な閉鎖環境を考慮してか、娯楽施設や通販対応もしている買い物施設もあるが、いかんせん、満足しきれるものではない。

「いや、けど、本当に良いんですか？　今はまだ勝手に動き回られると色々問題があるって、入学前にさんざん言われたんですが」

「ま、そこは大人の事情つてもんがあるんやけど、簡単に言えば、思春期真っ盛りの男子がハーレムに閉じ込められて暴走されても敵わんからガス抜きさせろつてとこやね。まあ、逆に思春期ゆえの暴走どんと来い、つて派閥も少数とはいえ確かにあるんやけど」

「うわあ……、聞きたくなかったかも」

今後ハニトラには要注意つてことか。今の所は扇子先輩以外は笑い話で済むレベルだが。

「そんでまあ、今回の外出における条件なんやけど、うちと木本センサーの同伴という名の護衛と定期連絡が絶対条件。あと行けるエリアも限定されとるな。こっちは監視体制の問題やな。そもそもあの時は必ずこちらの指示に従うこと。あと細々としたこともあるけど、普通にしてる分には問題ないかな」

妥当なところだと思う。VIP待遇万歳である。

「全然大丈夫ですよそれで。……そうだ、もしかして織斑も外出許可降りてるんですか？」

「ん、別の日になるけど許可はでとるよ。そっちは織斑センサーと山田センサーが同伴することになったとるけど」

「あ、やっぱり」

IS界最強の護衛か。豪華なもんだ。姉弟なんだから当たり前つて言えば、当たり前だが。

「んじやま、そういうことやから明日朝八時に港集合な。遅れたら置いてくぞ？」

「了解つす」

こうして、一か月以上ぶりに本土に行くことになった。あ、ニチアサちゃんと録画しとかなきゃ。

「おはようございます、木本先生」

「おはよう。今日もいい天気ですね」

IS 学園島港二番乗り場。

そこに八時十分前に辿り着くと、潮の香りと共にすでに待っていた木本先生の姿が見えた。

何時ものスーツ姿ではなく、薄茶の長袖の上着でその下に青シャツ、焦げ茶色の七分丈のスキニーパンツにパンプス、あと女性物の小さいシヨルダーバックという出で立ちだ。

「おお、これが大人の着こなしか。似合ってますよ先生」

「……そうですか？ ふむ、褒められて悪い気はしませんね」

とか言っているが、若干嬉しそうにしているのだからこの人、結構かわいい所があると思う。

割とスパルタなところがあるこの体育教師、勿論自身の能力も相応に高い。

どれだけ強いかと言えば、素手限定の真つ向勝負であればどこぞの世界最強とも渡り合えるのかなんとか。

そもそもの話、ここの教師陣は全員、護身術の訓練を受けているというのだからある意味徹底してるとも言える。

その中でトップクラスの實力を誇る木本先生がいてくれるなら、とりあえずは安心できるというものである。

「それで、学園生活はどうです？ 少しは慣れましたか？」

「まあ少しは。中々イベント多いですけどね」

ちよつと前までは中学生で、それまでは多少の山あり谷ありとはいえ日々平穏な学生生活送っていたのだが、気付けばこんなところにいるんだから、我ながら不思議なもんだ。

「けど、振り返ってしみじみするには、まだ早いと思うんすよね」

「ふふ、確かに」

お互い苦笑を一つ。

……よくもまあこちらを振り回してくれるもんだよ、ISって奴は。

なんて思ってしまうが、仕方がないのかもしれない。

「つと。そういうえばナナコ先生遅いっすね」

「そうですね。もうすぐ船の出航時間なのですが」

木本先生と雑談に耽っていたら大分時間も経っており、もうそろそろ定期船に乗っておかないとまずい時間になってきた。

「一緒に職員寮を出なかつたんですか？」

「朝弱いですからあの人。一応起こしてはきたので、大丈夫かとは思ったのですが」

だからいつも一時限目に英語の授業があるときは、時間ギリギリなのか。

と、その時だ。

「おお〜い！ チョイ待ちチョイ待ち！ うちもそれ乗るで〜」

学校施設や寮施設に続く道から、ナナコ先生が慌てて走ってきた。

迷彩柄で薄地の長袖シャツに紅色の袖なしサマーコート、それにスキニージーンズに運動靴という姿で息を切らせて俺達の傍までやって来た。来たのだが。

……あれ？

「……………」

「ナナコ先生、ギリギリですよ。私、ちゃんと起こしましたよね？」

「うっ。起きたんよ？ 起きたんやけど、着るもの殆ど洗濯してなくてなあ。探すのに手間取ってたんよ……………って、どした自分？」

「いや…………、なんでも、ないです。ないですよ？」

「なんやねん、ハッキリせーへんなあ。…………ん？ 自分、もしかして」

……やば、気付かれた。

そう、実はこの金髪女教師、何時ものスーツ姿じゃ分からなかったが、かなりスタイルが良かったのだ。

「ふっふ〜くん。自分も漸くうちの魅力に気づいたんか。うち、着痩せするタイプでなあ。学生時代は気安く話しかけられて、気立ても良くて、それに抜群のプロポーションから男女問わず大人気やったんや



で。そんなうちの魅力にやられてまうんも、しゃーないな！」

カツカツカツ！ と高笑いを上げるナナコ先生。

くそ、悔しいが事実なので反論できないのが辛い男の性である。しかし気立てが良いってのは、ちよつと疑問なんですけどどうでしょうかね。

「全く、馬鹿言っていないで乗りますよ二人とも」

呆れた風に言う木本先生に、へーいと答えて続く俺とナナコ先生。

……よく考えたらこれ、美人さん二人と買い物なんて、両手に花状態なんじゃなからうか。

そう考えると、IS学園に来たのもそう悪いことじゃないかもと思えてくる。

さて、どこぞの軍隊から巻き上げたらしい高速貨物船で太平洋沖にあるIS学園島から小一時間ほどで本土に上陸し、そこから更に公共機関を乗り継いで十分程。

千葉県某所にあるショッピングモールに俺達は来ていた。

できてまだ一年くらいらしく、小奇麗で巨大な建物が俺達を迎え入れてくれた。

中に入ると、構造自体はどこにでもあるショッピングモールとさして変わらず、蛇行しつつL字を書いたメインストリートの両側に、多種多様なお店が軒を連ねている。

視線を上げると、二階三階部分は吹き抜けになっており、連絡橋代わりに何ヶ所かサービスカウンターや広場的なスペースが、二階と三階で被らないように設置されていた。

そうして辺りを見渡していると、あることに気付く。

「そういえば、よく見たらIS関係の商品売ってる店、多くないっすか？」

店内に入らずとも、外から覗ける位置にISとタイアップした商品が並んでいるのが目に映る。

そもそもISは表向きスポーツとして広まってはいるが、一般人が気軽に触れられるものではない。

例えるなら、戦車同士の戦いが流行ってはいいても、だからと言って一家に一台戦車がある訳ではないのと同じ理屈だ。

……けどあのアニメじゃ部活で触れるしなあ、やっぱ世界観無理があるだろう。家元ってなんだよ。いや、面白かったけども。

閑話休題。

「ああ、それな。そもそもこの辺ってIS学園が出来て発展した地域やからなあ。言うてみればIS特産地みたいな状態になっとんねん。例えば……ほれ、本土に上陸するとき見いへんかったか？ 隣接してた臨海公園に展望台があつたやろ？ あれ、学園島を望む為のビュースポットとして建てられたんやで？」

世界で唯一のIS専門学校が見れるということで、観光名所にもなっているんだつたか。

「そんなのもあつたなあ」

しかし入寮時に一度見かけはしたが、強制連行同然に連れて行かれた為、あそこで景色を楽しむ余裕なんてなかったのを覚えてる。

「それにIS関連企業が一部出資してますからね、このモール。特別協賛としてIS学園からも名前出してますし。ここの全体的な売り上げのほんの一部ですが、それがうちの運営資金に充てられてもいるんですよ」

「へえ」

ギブアンドテイク、という奴なのだろう。なんとなくだがその辺、法の隙間を縫っていたり、超法規的措置とかとられていそうではあるけど関わらない方が身の為なんだろうな。

ともあれ、研究・開発や、スポーツ・軍事等、直接関わる部分ではなく、副次産業的な意味合いで発展した地域、ということなのだろう。「ま、そんな話は横に置いて、さっさと買い物しよか」

「そういうええ何買うんです？ まだ聞いてなかったですけど」  
「ん？ まあ趣味的なものが大半かな。メジャーなものは兎も角、ニッチなものになると学園の通販じゃリストになかったり、頼めない、頼みにくいものもあるからな。因みにうちの分だけじゃなくて、教員連中に頼まれてるもんもあるからな」

「あれそれ俺荷物持ちじゃね？ ひよつとして」

「話が速くて助かります」

酷い。これ、騙された形になってね？ 俺の外出と見せかけて、体よく荷物持ちゲットされただけじゃね？

『まあまあ』

確信犯ですかそうですか。

そうして買い物すること数時間。

途中昼食等を挟みのんびり雑談しつつ、モール内を巡る。

時間経過と共に荷物が多くなってきて、正に漫画みたいに大量の荷物を抱える羽目になったのには乾いた笑みを浮かべるしかない。

女性の買い物に付き合わなければならないと、事前に腹をくくっていたおかげで、女性服の専門店やランジェリーショップに立ち寄り、恥ずかしさのあまり悶死しそうになったが、醜態を晒さずにすむことができた。

勿論服飾関係だけではなく、日用品やインテリアなどの小物、アウトドア系の物品なども購入し、書店に寄ったときは自分用にラノベや漫画などの新刊も購入できたので良しとする。

教師二人もそれなりに楽しんでたようなので、荷物が重いこと以外は特にいうこともないし、俺自身も気分転換できたので良かったな、などと小学生の夏休みの宿題で出た読書感想文みたいなことを思う。いやしかし、本当に織斑以外で久しぶりに生で男を見て、安堵している俺がいるのが何とも言えない気分させてくれる。

……嫌だぞ？ IS学園に通っていたら逆に男に目覚めましたとか。

「俺はノーマル。俺はノーマル……」

「何さつきからぶつぶつ言っとんねん」

何でもないっす！ と返しつつふと、もしかしたら織斑も同じこと考える可能性に気付いて戦慄する。

うん、奴には最大限注意しておこう。特に奴が外出から帰った直後は。

密かにそんな馬鹿らしくも割と冗談にならないことを決意していると、粗方買いたい物も買い終えたのか、

「そろそろ帰りましようか」

「もう全部買ったんかな？」

「ええ、大丈夫だと思います」

との事だったので、帰ることになった。

しかし。

「ん……？」

二階の隅のエリアであまり人影のない位置で一息入っていた俺達だったが、少し離れたところに俺達以外の数人の人影が目についた。

男三、女一の組み合わせみたいだが、どうやらナンパの現場を目撃したようだ。

男達の陰になって、女の方の姿はよく見えない。

男達の浮かれようから、少なくとも外見のレベルは高い女性なのだろう。

更に暫く見ていると、場所を移動するらしくその場から離れようとしていたが、どうにも女性にはあまり歓迎されておらず、態度自体は柔らかいものの剣呑な雰囲気醸し出していた。

そうして動いたお蔭で空いた男達の合間から、付きまとわれた子の姿が覗いて見えた。

その子を見て、まず目に飛び込んできたのは二つの色だ。

一つは背中にもまで届く長髪の、光を受けて反射する月のような輝きを持つ銀の色。

もう一つはレースの付いた少々ゴシック感のあるワンピースの、夜を思わせる黒の色。

そんな目立つ格好の彼女であるが、更に無視できない特徴があった。

伏せられた目と、手に持った杖だ。

それは彼女が盲目か、もしくはそれに近い弱視だということだろう。男達に絡まれている状況でも決して開かれることがないことから察せられる。

見てる間にも男達に連れて行かれそうになる彼女は、しかしその表情を崩すことはない。

それどころか、こちらを向いた。

「……………」

すぐに視線を切ったが、明らかに目が見えない筈なのに、離れた場所にいる俺達を、いや、俺の方に真っ直ぐ視線を向けたのだ。

その間、一度も彼女は眼を開けていない。

単なる偶然とは思えなかった。明らかにこちらを意識していたように思う。

ただまあどういふ事かは分からないが、

「ご指名なら、応えないとな」

声はなくても、この状況で呼ばれて無視できるほど、義理も人情も捨ててやしない。

立ち上がり、彼女を追う。

「お？ 行くんか？ うちも付き合おうで。大人として、男の子してる生徒はほつとけんしな」

「本当はトラブルは御免なんですけど、仕方ありませんね。なるべく穏便に、迅速に済ませましょう」

「あざっす」

そんじやま、行きますか。心強い味方もいることだし。

人氣が完全に途絶えた、客が通る動線から外れた一角にある男子トイレ。そこが男達が彼女を連れて向った場所だった。

追跡する中、迷いなく向かったことから手馴れているようである。この様子だと、従業員や警備員の巡回時間などもある程度把握しているのかもしれない。

トイレの中にまでは監視カメラもない上に、モール内の喧騒や店内BGMで少々騒がれても気付かれにくい環境だ。

近づくにつれ、男達の話し声が聞こえてくるが、頭の悪い内容ばかりなので気にせず無視して三人で男子トイレへと進入する。

「んだガキ。お取込み中なんだよ、さっさと消えろや」

「おお!? ちょっと待てよ。後ろの二人、結構すげえぞ!」

「金髪巨乳にクールなお姉さんかあ、いいねえ」

当然、俺達に気付いた男達はこちらを追い払おうとするが、先生達の姿を見て色めき立つ。

同じ男としてわからんでもない。

が、

「称賛したくなるほどの屑つぶりだなアンタら」

「なんだとテメエ!」

男達の内、俺達の一番近くにいた奴が、俺の挑発につられて俺の胸ぐらを掴もうとする。

だがそんなもの、織斑先生の出席簿アタックを避けられる俺からすれば、児戯に等しい。

なので、逆に伸ばした腕を掴んで引き寄せ、まだまだ拙い思いながらも同時に足を引つ掛けバランスを崩し転ばせる。

更にダメ押しとばかりに転んだ男の頭を踏んづけて、起き上がれないようにすれば、ハイ終了。

頭を押さえられ、立ち上がることもできないこの男はこれで無力化できた。

今後どうなるかわからんが、絶対に護身術は覚えておけと言われ、相手を無力化する方法をカーティス女史から文字通り身を以て叩き込まれて(といっても、チンピラ相手に一対一で漸くどうにかなるレベル)いたが、こんな早くに役立つのだから、俺の人生素敵すぎるんじゃないかなろうか。

「で、お兄さん方、まだやります?」

暴れて起き上がるようにする男に対し、乗せた足に更に体重をかけて大人しくさせつつ、残りの二人に問う。

「チョーシにノってんじゃねえぞ!」

「上等だクソガキ、てめえが死ね!」

仲間をやられて、激昂した二人が同時に襲いかかってくる。

最初の一人を抑えてる為、動けない俺には回避することさえできない。

勿論そのまま逃げることもできなくはないが、その気はないし、する必要もない。

なぜなら、

「フーン！」

「オラア！」

複数の格闘技有段者である木本先生が片方の懐に素早く飛び込み、顎に掌底を叩き込み、

もう一人にはナナコ先生が任侠映画ばりの、しかもえらく腰の入ったヤクザキックもとい前蹴りを相手の腹に突き刺すように喰らわせたのだから。

掌底を喰らった方は脳震盪でも起こしたのか失神して倒れ、蹴られた方はなんと反対の壁まで吹き飛ばされてそのまま崩れ落ちた。

「女だからと……」

「……舐めたら怖いで〜？」

お二人共、かつこ良すぎです。伊達にIS学園の教師をしている訳ではない、といったところか。

IS学園はその特殊性から荒事にもある程度対応できないといけない。

木本先生は兎も角、ナナコ先生もしっかりと格闘術を修めている訳ではないが、IS学園教師番付をしたら上から数えた方が速いくらいには喧嘩慣れしているそうな。

そんな二人が俺のクラスの担任副担任を任されるあたり、やはりそれだけ俺には価値があるのだろう。どういう価値かはあまり考えたくはないが。

その後すぐに二度とこういう事をするなと軽く脅しつけて男達を解放し、そこで漸く連れ込まれた少女に振り向く。

「大丈夫だったか？」

「……ええ。まあ、私一人でもどうにかできたのですがね」

目の前であれだけの騒ぎだったにも拘らず、終始彼女は全く表情を変えずにいた上で、そう答えた。

「……お人形さんのような見た目やのに、肝が据わってるんやな」

呆れたようにナナコ先生が言う。

「なんというか、言ってる内容は兎も角、こうも反応が薄いとどうしたら良いか困るんだが。」

「俺達はどうしたもんかと思っていると、彼女が口を開いた。」

「質問があります」

「へ？ あ、はい。なんででしょう？」

「何故か微妙に敬語になってしまった。」

「何故私を助けた……、助けようと思ったのですか？」

「やはり目が見えるかのように、真っ直ぐにこちらに顔を向けながら問うてくる。」

「それに俺は、」

「いや、だって、なあ？ 誰だってさつきみたいな状況なら助けるだろ、まともな感性してたら」

「何を当たり前な、と保護者二人を仰ぐと同意するように首を縦に振ってくれた。」

「では……一緒のお二人がいなければ？ さつきの男達より自分が弱かったら？」

「さつきから何を知りたいのか分からんが、それならそれで近くの店員が警備員でも呼ぶけど？ あと警察」

「どういう問答なんだろうコレ？ しかも男子トイレで。」

「しかしそんな事はどこ吹く風で、件の少女は一人納得したようで、……ふむ、成程。そうなんですな」

「なんだろうなんだろう、なんか凄い勢いで見定められている気がするんですが！ これ後々なんかのフラグになってたりしないよね？ 現実でイベントフラグ管理とかやりたくないですよ？」

「分かりました。お答えいただきありがとうございます」

「は、はあ」

「なんともゴーイングマイウェイを地で行っている感が凄い少女だった。」

「では、この借りはいずれ、ザ・セカンド」

「軽く会釈だけをして、彼女は立ち去って行ってしまおう。」



それを俺達は狐に化かされたような顔で見送るしかできなかつた。

「なんだったのですかね?」

「さあ?」

いや、ホントに。

しかしふとそこであることに気付いた。

「……あれ?」

どうして彼女は自己紹介もしていないのに俺の事に気付いたのだろうか? 終始瞼を上げず、俺の顔を捉えてはいなかった筈なのに。

## その10

本日は晴天也。

故に今日は何をするにも絶好の日なのだろう。そう、何事にも。

五月も半ば、普段なら三時限目が始まる時間帯。

IS学園は各学年毎の、今年度初のクラス代表対抗戦が行われる。予定としては、ここから五時限目の時間まで昼食を挟みつつ、それぞれの学年で総当たり戦をし、六時限目の時間を使って自習という名の反省会をすることになっていた。

そしてこれからその一戦目が行われることになるのだが……。

『どうしようどうしようどうしよう！ どううくしくよくう!!』

「ええい、うるさい！ 今更ガタガタ言うな！」

「落ち着いて、ね？ 良い？ まずは落ち着て？ オリヴィエも！」

「アンタ達、いつもこんな感じよね」

「言うな……」

他は知らないが、二組陣営は現在進行形でテンパっていた。

何故かと言えば、誉れ（笑）ある二組代表の菊池武美がこの期に及んで怖気づいていたからである。

朝から落ち着きがないとは思っていたが、試合直前になってそれが限界に来たらしい。

ピットで出撃準備中の菊池から連絡が来たかと思うと、緊張で軽いパニック状態の菊池の叫びが聞こえてきた。

一発でこれはアカン、と感じた俺はすぐさま携帯端末を通常の通話状態からホロヴィジョン通話状態に切り替えて皆と現状を共有した。切り替えるとすぐに空間投射されたディスプレイに菊池の顔がアップで表示されて少し驚いたが、それでも僅かに見える首元の装甲や画面横から移りこんでるアンロックユニットから見て、既にISを装着していて、ISから直接こっちに連絡してきたらしかった。

纏っているのは打鉄で、画面からは確認できないが装備は実弾射撃武器で固めてる筈だ。

色々考えてみた結果、心得が全くない近接戦闘よりも、ゲーセンの

シューティングゲームで覚えのある射撃戦に重きを置いた結果だ。

打鉄をチョイスしたのも、本当は機動力のあるラファール・リヴァイヴの方が良かったんだが、その分防御力がないので菊池の今の技量を考えると、ペースを崩されると速攻で倒される危険があったからだ。

それはそれとして、泣き言を漏らすどころか大量放出してる菊池をカーティス女史と都下が宥めていた。

カーティス女史など、俺の端末をひたたくって怒鳴るほどだ。よっぽど酷い感じなのだろう。だが今の菊池にとって逆効果しかないと思うのだが。

都下も二人を落ち着かせようと必死だが、焼け石に水のように収集がつかなくなってきた。

「全く、何やってんだか」

「アタシも初対戦の時は結構テンパってたけど、ここまでじゃなかったわね」

「そう思うなら二人共手伝ってくれるかな!？」

溜息と共に漏らすと、都下から愚痴が飛んできた。

「だつてさ」

「仕方ねえなあ」

凰に促された俺は、渋々それに承諾した。

都下と凰にジェスチャーで少し離れるよう指示し、両の掌を卵を包むようにして両腕を構える。

そして菊池とカーティス女史の二人が同時に黙る——息を吐くタイミングを見計らい、僅かに位置をずらして思いつき打ち鳴らす!すると空気が爆発したような破裂音が強烈な大音として周囲に響いた。

「ヒッ!!」

『ワッ!?!』

それを間近で受けたカーティス女史と菊池は同時に身体を震わせて沈黙した。

「二人とも一旦そこでストップな?」

なんとかか、シヨック療法というか強制的にはあるが、二人を止めることが出来たようだ。ありがとう、殺せ〇せー。

「カーティス女史、頭ごなしに言っても落ち着く訳ないだろ？ 自分がヒートアップしてどうすんだ」

「む、……悪かった」

すぐに自分の非を認めてくれたようで何より。

「菊池もさ、そんな緊張しなくても良いだろ？ ゲームかなんかだと思えばいいのさ」

『でも、実際に銃とか剣とか向けられちゃうんだよ？ こっちも相手を傷つけちゃうかもだし』

至極当然な不安である。が、

「大丈夫だつて。ISにはシールドバリアも絶対防御もあるんだから。他にもちゃんと安全確保してあるんだから気にすんなつて」

『そ、そうかな？』

「そうそう」

『……わ、分かった』

完全に、という訳ではないだろうが、漸く菊池もその辺を納得して落ち着いてくれたようだ。

そりやいくらスポーツとして認知されてるとはいえ、実際に殺傷力を持った武器で攻撃し合うんだから不安にもなるうつつもんだ。サブゲーでプロテクターを付けた上でのBB弾の撃ち合いとは違うのだから。

その分ISは防御、操縦者の安全には最大限の安全策が講じられており、余程のことがない限り、あまり心配しなくても良いのではあるが。

その辺も含めて更に菊池に言葉を投げかけ、納得させる。

「……アンタさ、よくもそんなに舌が回るわね。将来詐欺師にでもなれるんじゃない？」

「カミソリセカンドとでも呼んでくれるか？」

「……アンタねえ」

呆れて溜息を吐く嵐。お互い冗談として言っているのが分かって

るんだから良いじゃないか。

そんな弛緩した空気の中、漸く試合が始まるようで、最初の対戦。一組代表の織斑一夏と、二組代の表菊池武美がアリーナ内に姿を現した。

お互い軽く挨拶をした後、開始合図のブザーが鳴る。

試合開始と共に織斑が速攻で菊池に迫る。

だが皆で考えた対策と予想を立てていた菊池はその動きを読んでおり、織斑を飛び越えるような軌道を以て回避。そのまま距離を開けてIS用のショットガンとサブマシンガンの二丁で射撃を開始する。織斑もそれを回避や防御をしつつも突撃し、雪片式型で攻撃しようとする。

それに対して、菊池はまたも攻撃を回避し、距離を取って攻撃を再開。それを何度も繰り返す。

「よーしっ、なんとか対策通りに動けてるな。これで暫くは持つだろう」とにかく雪片式型は触れるだけでシールドエネルギーをぐっさり減らされるので、少なくとも今の菊池の技量では、基本は回避一辺倒とするしかない。

兎に角避ける。相手の進行方向に沿ってさえ動かなければそれで良いとは伝えてある。真っ直ぐくるしかないと分かっていたいれば、防御重視の打鉄でもなんとかなる。

あとは下手な鉄砲数撃ちや当たる、を弾数に気を付けつつも実践しろ、という事になった。

泣きそうな顔してるけど頑張るなあと、菊池の表情を見て思う。伊達に超難関高倍率のIS学園に籍を置いてないといったところか。

「……………なあ」

暫くはこう着状態になるなど踏んで風に話しかける。

「なによ」

「結局織斑と話してどうなったんだよ?」

「なっ!? それを今訊く?」

「今だからだよ。皆試合に集中してるし、声も小さくしてんだろ?」

今お前と話しても傍からじゃ違和感もねえし」

一応、こちらとしてもタイミングを図った結果なのだ。それにあの時織斑をけしかけた身としては、やはり気になるのだから。

「……分かったわよ」

暫く逡巡していたものの、結局は話してくれるみたいだ。

「対抗戦が終わるまでは返事を待つてくれって。いきなりそんなこと言われても、パニックだから落ち着いて考える時間が欲しいって……」

「結局先延ばしかよ」

「でも、ちゃんと考えるつて言ってくれたから……。だから、良い」  
「恥ずかしそうに、耳まで真っ赤にして顔を伏せる風。それでも僅かに口元を嬉しそうに歪ませてるのを見て俺は、

「ま、それなら良いか」

と、空を仰ぐしかなかった。

そして、

「やば……」

一筋の閃光が、アリーナの中央に落ちるのを見た。

それは、破壊力を持った光だった。

一見しただけではレーザーかビームかは分からない。

だがそんなことはどうでも良く、観客保護や上昇制限の為に展開されていた、アリーナのシールドバリア突き破る程の威力を持っているのが問題だった。

雷と同等の閃光に反射的に目を庇い、同時にあちこちから悲鳴が上がるのを聞く。

「なんなんだ一体!! ああ、くそ。まだ目がチカチカする」

強すぎる光は、庇った上からも目にダメージを与えたらしく、白くぼやけた視界がなかなか回復しない、

「み、皆、大丈夫?」

徐々に回復していく視界の中、都下の周りを心配する声が聞こえてくる。

「私の方は何とか」

「……なによ、アレ？」

カーティス女史の返事を聞きながら横を見ると、既にISを展開していた凰が呆然とした眩きを吐いた。

漸く視界に失明した訳ではないことに安堵しつつ凰の視線の先を見ると、アリーナの中央にゆっくりと新たなISが降り立つところだった。

先程空を見上げた時、閃光が放たれる直前に見たISだ。

全くと言って良い程光沢を感じさせない黒一色のISで、地面に着くほどの大きさと長さを持つ両腕と、首と頭の代わりにただ単に盛り上がっているだけの部分にレンズがくっついているだけの頭部が特徴的だった。

光を反射しない黒サフを吹いただけの、作りかけのプラモみたいな印象があるISだ。

異形のISはしかし、派手な登場をした割に今は静かにアリーナの中央に佇んでいる。

アリーナ内にいるISを纏った織斑と菊池はもとより、避難しなければならない筈の俺達を含む観客一同、そして指示を出さなければならぬ筈の教師陣、その全員が動けないでいた。

この緊張した空間で、まともに働いているのは非常事態を告げるアラートの音だけだ。

不明ISの正体が分からない。目的が、性能が。そして、

謎のISが何故いるのか、何をしたいのか、如何にしたいのか。

その全てが不明で、謎で、分からない。

なのでどう動けばいいか、件のISの動きを受けてからでないと判断がつかない。

完全に後手だ。下手に動いて刺激して、これ以上被害を拡大しては元も子もない。

だが、それでも、

「——ゆっくりだ。皆、ゆっくりと出口に向かうんだ」

静かに、だがはつきりと俺はそう告げた。

人命尊重が最優先だ。取り敢えず皆の安全を確保しない事にはどうしようもない。

俺の言葉が伝播したからか、アリーナの観客席にいた生徒達はゆつくりと、だが恐怖を顔に張り付けて避難を開始する。

その間、乱入してきたISはその様子を見ても微動だにしていなかった。

正直助かる状況ではある。

俺を含め、ここにいるほぼ全員が成人すらしていない子供なのだ。いきなり命の危険に晒されてパニック寸前の状態でこれ以上何かあつたら、手の打ちようがなくなる。

しかしここで問題が二つ。

一つは教師陣、ひいてはIS学園側の対応だ。

警報は鳴ったようだが、それ以降何のアクションも起こしていないのは気がかりだ。

このアリーナの外の連中は動いているのか分からないが、この状況を把握している筈の管制室は何をしているのか。

……もしかして、何もしないんじゃないのか？

例えばあのISの出現以外にも何かトラブルが起きたとか。勘弁してほしい所なんだけどな。

兎も角、動きがない以上は頼りにはできない。だからこそ避難を促したのだ。

そして二つ目。

アリーナは構造上、観客席が建物の二階相当の高さから階段状に設置されていて、その裏というか階下にぐるっと囲むように通路やら搬入口がある造りだ。

だからまず観客をそこに移して、アリーナのシールドバリアと構造物とで気休めでもいいから生存率を上げておきたい。

だというのに、

「嵐、織斑に連絡。皆がいなくなるまで動くなって」

謎のISの近くにいる織斑が痺れを切らせかけていた。

折角向こうさんが動かないでくれているのだ。その間に避難を終



えておきたい。

織斑的には自分に気を引かせて置きたいのだろう。俺も織斑の立場ならそうしたいところだから気持ちは分かる。

だが、まだだ。今動けば戦闘の余波で人的被害が出る可能性が高い。

「だから、もう少し待てよ……」

連絡を入れたおかげで、焦れてはいるが織斑そのまま待機してくれるようだ。

その間に現状の把握に努める。

観客席にはもう半分以上生徒達の姿はない。逆を言えばまだ半分近く残っているということでもあるが。

アリーナのシールドバリアは、想定以上の高負荷がかかった所為か、一部穴が開いているが、まだそれ以外は動いてくれている。が、それもいつまで持つかも分からない。

相変わらず学園側からの動きはこちらからは見ることが出来ない。……期待するだけ無駄かもしれない。

「ていうか、アンタも早く逃げなさいよ」

「そうだよ。早くここから離れないとー!」

「うえ!? 都下? なんでまだいるんだよ。皆と一緒に逃げた筈だろ!?!」

既にいない筈の都下の声に驚いて振り向くと、青ざめた表情の彼女がいた。

「そうなんだけど、扉のロックがかかっていて出られないの!」

「なに!?!」

「オリヴィエが下で内通で管制室に連絡しようとしても繋がらないし、携帯端末も何故か圏外だし、だから直接伝えに来たの」

……なんだよそれ。まるで設備がハッキングされてるみたいじゃないか。あ、だから大人達の動きがないのか?

「つて、まさか!?!」

慌てて自分の携帯端末を取り出す。やはりこちらも通信不能になっていた。

「まさか、皆圏外になってるのか？」

「う、うん」

「ハッキングの上にジャミングまでつて、どこの犯罪組織だよオイ」  
思わず愚痴が零れた、その時だ。

例のISが、動いた。

向かった先は織斑達だ。何がどうなってるか分からないが、一戦交える気らしい。

「おっぱじめやがった！ 鳳は織斑と協力してアイツを抑えてくれ！  
菊池には援護射撃だけして無理すんなって伝えておいてくれ！」

「分かったわ！ それと」

「ん？」

鳳が獰猛、とも呼べそうな笑みを浮かべる。

「抑えろとは言うけど、アレを倒してしまっても、構わないでしょう？」

「……お前それ、死亡フラグだから」

「え、なによ？」

「なんでもない。さっさと行ってこい」

パタパタと手を振って、鳳を促す。

飛び立った甲龍を確認して、まだ横にいた都下にもここから離れるように言った。

「君も早く逃げよう！」

「おうよ。お前含めて皆の避難が終わったらなー」

「でもー」

「良いから良いから。まだちよーつと、やることもあるからさ」

都下の背を押して無理矢理避難させる。

彼女は尚も後ろ髪を引かれるような態度をとっていたが、渋々と  
いった様子で従ってくれた。

さて、さてさて、さてさてさて、である。これからどうするか。

都下にはああ言ったものの、どれだけ安全を確保できるかは知らないが大体の避難も終えた今、俺が観客席にいる意味は殆どなかったりする。なのでさっさと避難してしまえという話なのではある。

あるのだが。

「なーんか嫌な予感がするんだよな。なんだこの感覚？」

小骨が喉に刺さったときのような、吐き気はするのに吐けないときのような、そんなもどかしさ。

気のせい、多分そうなんだろうとは思う。思うが、どうしても不安がぬぐいきれないでいた。

……なんだ？ 何が引つ掛かっている？

違和感の正体を探る為に、あのISの行動を事を思い出す。

まずはアリーナ上空からの砲撃。

それからアリーナに降りてからの静止。

そして突然の織斑達に対する戦闘行動。

たったこれだけだ。

戦闘行為も未だ継続中で、織斑が前衛で積極的に雪片式型で斬りかかり、合流した凰が衝撃砲と大型ブレードを巧みに操って中衛を務め、離れた位置から菊池が後衛として援護射撃、といった戦術で敵ISと戦っている。

単純ではあるが、堅実な戦い方だ。なにより凰は兎も角、他の二人が素人に毛が生えたくらいの戦闘知識なので分かりやすいくらいで丁度良いのだ。……無論、人のことは言えないが。

その様子を気にしつつ、観客席最上段に移動する。

さつきから流れ弾がこちらにばかり飛んでくるのだ。

どうにも半信半疑ではあるが、敵ISがそうなるように仕組んで動いている、ように思える。

勿論、アリーナのシールドバリアがそれらを防いでくれてはいる。だが連続して負荷のかかっているそれが、いつまで持つか分かったもんじゃない。

もし破られて観客席が崩壊した場合、階下の皆が危険に晒される。だからできるだけ射線を上方に逸らしておきたい。

……というか、なんで俺が狙われてるんだよ。

何か悪い事したろうか。さっぱりだ。

だけど、それなら直接狙ってきても良い筈なのにそうしないってこ

とは、俺は物のついで扱いか。

やはりあのISの目的が見えない。何がしたいんだろうか。時々、ふと何もせずに立ち止まる事もある。そのおかげで、戦っている三人は一息つくことが出来ているみたいだが。

突然襲撃してきた割には、その後の行動が受け身な感じだ。

まるで時間稼ぎか観察でもしているみたいだった。では、そうなる  
と何を待っているのか、もしくはは見ているのか、という事になる。

そこまで考えて、思考が行き詰る。正しいかどうかは別として、情報  
が少なくてこれ以上は考えを進めることが出来ない。

そしてふと気が付けば、いつの間にかあのISの侵入口付近まで来て  
いた。

アリーナの一部分が破壊されているここはアリーナのシールドバリア  
が働いておらず、生身じや大変危険だった。

なので踵を返そうとしたのだが……、

「何をやっている一夏！ それでも男かつー！」

何故か反対側から木刀さんが急に姿を現し、そんな事を叫んだ。

「ちよっ!？」

彼女としては織斑を叱咤激励しているつもりなのだろう。

だがこの場所でそれはまずい。

前述の通り、今ここは身を守る物が何もなく射線が通っている状態  
だ。そんなところで相手の注意を引くようなことをしたらどうなる  
か。

案の定、敵ISが反応して木刀さんに両腕の砲口を向ける。

背筋が凍るとはこの事だ。

「何やってんだこの馬鹿!!」

敵ISに反応したのは、思わず木刀さんを庇おうとして駆け出した  
俺と、砲撃を阻止する為に突撃した織斑だ。

砲口がこちらを向いているから分かる。内部でエネルギーが溜まっ  
ているのだろう、光が強まってきている。

それに対して俺は勝手に動いてしまった身体に心で罵声を浴びせ  
つつ、その動きに逆らうことなく更に加速し木刀さんを横から突き飛

ばして一緒に倒れた。

織斑も嵐からなにやら衝撃砲のブーストを得て今までにない加速で突っ込み、零落白夜の一撃を以て敵の片腕を切り降ろした。

しかし体勢を崩しながらももう一方の腕から砲撃は放たれ、こちらに飛んでくる。

光の本流と熱波、そして衝撃が襲う。

辛うじて直撃は避けたが、余波が凄まじい。

「ッ……………!!」

叫び声を上げる事さえままならず、倒れながらそれらが止むのを待つしかなかった。

長くても数秒程だったであろう砲撃が止んで、思わず閉じていた目をゆっくりと開ける。

「あたた……………おい、大丈夫か?」

押し倒す形になった木刀さんを確認する。状況が状況であれば中々な状態ではあるが、そんなことを言っている余裕は勿論ないので、素早く怪我がないかを見る。

「う、ううん…………?」

まだ突発的な事に混乱して動けなさそうではあるが、取り敢えず見た目的には何ともなさそうなので良しとする。

ならばとアリーナの方を確認すると、いつの間にか織斑が吹き飛ばされていてピンチに陥っていた。

が、

「これはワタクシの見せ場ですわね」

これまたいつの間にかISを展開して完全武装したオルコット嬢が隣に立っており、スターライトmk.Ⅲを構えていた。

そして次の瞬間にそれを発射。発射されたレーザーは敵ISの急所に命中したらしく、そのまま動きを止めた。

そのまま警戒を解くことなく注意する一同。

いくらか時間が過ぎ、漸く倒せたかと全員が気を抜いた、その瞬間、  
「なっ!!」

敵ISが再起動して一番近くにいた織斑に向かって砲口を向けた。

「うおおおおー！」

狙われた本人はすぐさま反応して、向けられた砲口に零落白夜を叩き込んだ。

そして爆発。爆炎が二機を包んだ。

……なんて往生際の悪いっ！

しかし数秒程で煙も晴れて見えてくるのは、白式を展開したまま倒れている織斑と完全に破壊された敵ISの姿だった。

気絶してはいるようだが、織斑の方はISが守ってくれたのでとりあえずの心配はないだろう。問題は敵ISの方だ。

ここから見える件のISの傷口から中身が少し覗けた。しかしそこには生身の人間が存在しなかった。あるのは機械のみである。

まさか、無人機だったとは。これには驚く他なかった。

少なくとも現在公開されている技術では実現不可能な事の筈だ。

それこそどこぞの秘密組織や大天才でもない限り難しい話の筈だ。

等と、思考を巡らしていると、

「なんで、「夏じゃない……」

「ん、お？ 起きたか」

何か呟いているようだが、どうやら木刀さんも目が覚めたようだ。取り敢えず今回はこれで無事に終わ……、

「さっさとどけー！」

「けふっ!？」

何故か至近距離の直下から掌底を顎に受けてしまった。

木刀さんの上で腕を突っぱねるようにして身体を支えていた為、とつさに避けることが出来なかった。

かなり良いのを貰ったみたいで、脳が揺さぶられそのまま意識を手放してしまった。

その際、倒れる拍子に何か柔らかいものが顔に当たったような気がするが、多分気のせいだろう。

「知らない天井だ」

目を覚まして寝ぼけた頭で状況をなんとなく察し、鉄板ネタを呟い

てみる。もはや古典を通り越して死語な気もするが気にしてはいけない。

場所は多分 I S 学園の保健室だろう。初めて訪れた(?)が、自分が寝ているベッドやそれを囲むカーテン、そして医薬品の僅かな刺激臭からそれを察せられた。

窓から差し込む西日で現在時刻を推察、どうやらあの騒ぎからそんなに時間は経っていないようだった。

どうやら、騒ぎそのものは収束したようで特に騒がしくもなく、静かな空気が保健室に漂っていた。

そしてふと、カーテンで仕切られた隣のベッドに人の気配を感じた。

「あ、起きた?」

「……よう、鈴じゃないか。どうしたんだよ、そんな顔をして」

隣は織斑だったようだ。そして見舞い人は風か。

「何でもないわよ。折角人が心配してあげてるのに」

「悪かったよ。心配してくれてありがとうな」

二人は俺が起きた事には気付いてないみたいだ。

そのまま二人は二言三言言葉を交わし、次第に話題は告白の事に移る。

「なあ鈴、あの事なんだけど」

「あの事って何よ。ハッキリ言いなさいよ」

「う。……お、お前が告白してくれた事だよ!」

ああ、姿は見えずとも雰囲気だけで分かる。二人とも相当顔を赤くしている事だろう。

そしてもどかしいくらいのやり取りの後、織斑が切り出した。

「なあ鈴、その、返事なんだけどな……」

「……うん」

緊張の一瞬である。

「あれからずっと考えたけど、鈴に対する気持ちに友情としての好きはあっても、恋愛感情の好きは、ないと思う。だから、お前の告白には、……答えてやれない」

織斑の言葉に、場が痛い程の沈黙が訪れた。

……これは、なんとまあ。

なんとも言葉にしがたい結末である。

織斑としても心苦しくはあるのだろう。発する言葉の端々から凰に対する申し訳なさが滲み出ている。

申し訳なく思うんなら応えてやれよという意見があるかもしれないが、しかしそれでも自分の気持ちに正直になって返答した織斑は偉いと思うのは、同じ男だからだろうか。

「……そう、なのね。わ、分かったわ。ひぐつ……、ちゃんと、考え、てくれた上で、ひつ、返事してくれたなら、良いわよつ……」

「……………」

「すまない」

「あやまららないでよう、余計惨めに、なるだけじゃない……ひつく」  
凰の涙声が聞いていて辛い。けど、こういう事になる可能性だって十分にあると分かっていた筈だ。十分に覚悟できていたかどうかは本人にしか分からないが。

きつと顔も涙で酷い事になっているのだろう。さつきから袖で拭く時の衣擦れの音が収まらない。

「私、もう行くわ。これ以上、耐えられそうに、ない……」

そして織斑の返事も聞かず、凰は保健室を飛び出していった。

暫しの沈黙。

織斑も俺も、何も言葉にする事が出来ない。まさか寝起き草々、こんな修羅場に遭遇するとは、それこそ夢にも思わなかった。

しかし織斑は兎も角、凰が心配である。これは最後まで見届けた責任として手を打たねばならないだろう。

という訳で、ベッドの傍にまとめられていた荷物の中から携帯端末を取り出し電話をする。

「あ、もしもし、都下？ 今ちよつと良いか？ ——ああ、うん大丈夫大丈夫。軽い脳震盪ってだけだし。——ああ、いや詳しい話は後で。ちよつとお願いががあるんだけどさ、凰の様子見に行つてやつてくれな  
いか？ アイツ、織斑にフラれてさ、フォローして欲しいんよ。うん、



内密にな？ 数人くらい巻き込んでも良いけどあんまり話は拡げない方向で頼むわー。ああ、また後で」

「——って、おいしいおいしい!?!」

通話を切ったところで織斑が勢い良くカーテンを開けてこちらに顔を出してきた。

「よっ」

「よっ、じゃねえ！ お前起きてたのかどこから聞いていた!?!」

「凰の、『あ、起きた?』ってところから」

「全部かよおおおおお!?!」

その場で崩れ落ちる織斑君。大変だなあと、他人事みたいに言っちゃった。

「お前って奴は……。いや、もう良いさ」

なんか、うんまあ気持ちは分からなくもない。俺だって逆の立場だったら嫌だ。

「んな顔すんなって。もうお前答え出して言っちゃまったんだろ？」

「じゃあ仕方ないさ」

「け、けど」

「吐いた言葉は取り消せねえよ。こんな時は特に、な」

「……そう、だな」

そう言って、織斑は力なく自分のベッドに寝っ転がった。そしてぼうつと天井を見つめながら呟いた。

「あーあ、全部上手くいくやり方ってないのかな?」

「はん。そんなんあったら、最初から苦労しねえよ」

男二人、溜息吐いたって何も楽しくない。

その後。

軽い脳震盪と擦り傷だけだった俺は軽く治療と問診だけで済み、すぐに解放された。

織斑の方も無意識にISの絶対防御を切っていたらしく、その状態で攻撃を受けていてそこそこの怪我をしていた筈なのに、何故か同時に解放されていた。

「にしてもオルテンシア先生、だっけ？　なんで治療器具の使い方も分からないのに、織斑治せたんだろう？」

治療用のナノマシンでも使ったのか。けどアレ、トリアージのレベルが黄色以上、それこそ赤に近いくらいじゃないと滅多に使われない筈なんだけどな。いやそもそもあのやる気のない態度からして、保健医が務まっているのか。うくん、謎だ。

なんて、そんな事を考えながら暗い廊下を歩く。

いつかの夜のように、消灯時間を過ぎた後の深夜徘徊である。

とは言っても、目的も前と同じで自販機の飲み物狙いなのだが。

少し涼しいくらいのはやはり昼間とは違う雰囲気、静けさがこの時間の主役だった。

やがて、自販機の明かりが見えてくる。

そして自販機コーナーに入ると、何となく予感していた通り、先客がそこにいた。

都下だ。

ベンチに座り、今度はまともな飲み物を口にしながら虚空を見つめていた。

「よっ、都下。奇遇だな」

「ふえ!?　……ああ、君か。もう、驚かさないでよね」

「悪い悪い」

テキストに謝罪しつつ自販機でお茶を買い、少し間を開けて横に座る。

都下の顔を伺うと、少し疲れたような表情をしていた。

「どーしたよ？　元気なさそうだけど？」

「うーん。元気がないっていうより、ちよつとした考え事、かな？」

「煮え切らねえなあ。世界で二番目の男に言ってみ？　聞くくらいならできるぜ？」

俺の言葉に都下は腕を組んで更にうくん、と唸り悩んでる風に首を傾げた。

「まあ、君になら良いかな」

そう言って、都下は話を切り出した。

「君に言われて鈴ちゃんと話したの。あの子の部屋で」

「ん？ じゃ、同室の……」

「うん、ティナだけは巻き込んだよ」

ティナ・ハミルトン、鳳と同じ部屋のアメリカ国籍の少女である。

「まあそれで、一杯泣いたんだよね、鈴ちゃん。わんわん泣いてさ。最後の方なんて私みたいに良い女を振るなんて馬鹿じゃないの！ なんて叫びながら」

「言ってそう言ってそう」

「それ以外にも色々話したけど、そこは女の子同士の秘密だから言えないかな」

ちと気になるが、訊いても教えてくれないんだろうな。

「例えば君に対する評価とかも話したかな」

「何それ超聞きたい」

「だーめ。教えてあげない」

「そっちから話しておいてひでえ」

俺の反応に、ふふ、と彼女は笑う。

「悪い評価ばかりじゃなかった、とは言っておくね」

「おっかねえなあ」

今度は二人して笑う。

そして、場が温まったところで本題だ。

「今日の鈴ちゃんの様子を見てたら、自分の初恋の事を思い出しちゃって」

「……それ、俺が聞いても良い話なのか？」

「なんとなく、知ってもらいたいんだよね。自分でも理由は分からないけど」

そして彼女は語る。自分の昔話を。

中学時代に憧れた先輩がいて、けど先輩には彼女がいて。そして想いを告げられなかった過去の話だ。

どこにでもありそうな話だが、都下はそれを懐かしみと苦笑いが混じった、左右非対称の妙な表情で話した。

訊けば既に未練や後悔はないという。

「ただね、先輩達二人の仲を見て、『ああ、これは告白できないな』って悟った時、とても悲しかったなって思い出したの」  
「……………」

俺は黙って聞いてるしかなかった。

単にコメントに困るといふ事もあるが、彼女がこういう話をする程度にはこちらに心を開いてくれている、という事に気付いたからだ。一体どこでそんなに友好度稼いだかなと、首を傾げるがさっぱり分からない。

「でね、鈴ちゃんとは私と同じ……、ううん。私以上の悲しみに暮れてるんだらうなって思うの」

まあ、それはそうだろう。

告白すらできなかつた都下。

対して告白してフラれた凰。

どちらの方がダメージが大きいかは明白だ。

しかし、

「だけどその分、未練はないと思うの。忘れるでもなく、目を背けるでもなく、乗り越えていく。きっと、ずるずると未練ばかりが残って引きずっていた私より、元気になるのは早いんじゃないかな」

「だろうな。アイツがずっといじけてるなんて想像もつかん」

「ふふ、そうだね」

同じ結論に至り、同時に頷く俺達だった。

……今俺達がやっているのは、他愛のない、どうという事のない単なるお喋りだ。後で思い返すこともないただの暇潰し。

だけどそれが悪い事じゃないと思えるのは何故だろう。今はそうでもないが、後々思い出す事で価値が生まれるのだろうか。

「どうしたの？ いきなり黙っちゃって」

「んにゃ、なんでもない。……ただまあ」

「うん？」

「こういうのも、『悪くねえ』んじゃないかって、そう思ってたさ」

その言葉に、彼女は黙って左右対称の笑みを浮かべるのであった。

## その11

結局の所、織斑と凰の関係はどうなったかというところ。

「アンタにフラれてすつきりしたわ。これからも今まで通り良い友達でいましょう?」

「お、おう。でも、良いのか? その、なんていうか……」

「良いの! うじうじ未練がましくしてても仕方ないしね。そんなのアタシじゃないし! けど……」

「けど?」

「アタシをフツたんだから、アタシより良い女を捕まえないと絶対に許さないんだから! 良いわね?」

「……ッ、ああ!」

という会話が、朝早く他に誰もいない二組の教室で交わされた。

凰から早朝に織斑と一緒に来てくれと連絡があり、出向いた先での話だった。

少し離れたところでそれを聞いていた俺は、安堵と共に一息吐いたのであった。

厄介事が減り、これで漸く落ち着けるかと思ったのだが、この時の俺はもう一つ問題が残っていたのを忘れていたのだった。

そして半日後の、生徒指導室。

そこで昨日の事件に関わった生徒達が呼び出された。

ここは普通の教室からは少し遠く、しかし職員室には程近い場所で、更に生徒指導室とは名ばかりに半分倉庫と化している、生徒はもとより教師ですらあまり寄り付く者もないような所だった。

「……実は俺と織斑ってさ、事情聴取されるの二度目なんだよな」

「ん? アンタ達二人まとめてって事は……」

「そ、初めてIS動かした時に連行された先でさ。あんときはマジでビビったよな、織斑?」

「ああ、あの時は本当に生きてきた心地がしなかったな。訳も分からないまま質問攻めされて、訊きたいのはこっちだって言うのに」

「しかも休憩なしで連続三時間」

「うわ、それはご愁傷様だったわね……って、あれ？ それ私が二組の連中に尋問されたのと同じくらい？」

「ははは、イグザクトリイ」

「ノンノン。発音が宜しくありませんわ。E x a c t l y、ですわ」

「おお、やっぱり本場の発音は違うね」

等と割と穏やかな雰囲気で雑談に興じる俺達だが、

「……貴様ら、昨日の今日で元気だな？」

「これなら今日の授業、手加減しなくても良かったですね」

『……………』

一気に現実に戻された。

オーケイちよつと待て。授業でIS乱取りと、時間一杯まで走り込みさせた人の言うセリフじゃないですよ？ 織斑先生に木本先生？

どこのヒーローのアカデミアだよって気分だが、あながち間違いでもないのが恐ろしい。流石IS学園。ここは御山かと言いたい。俺達、総長連合入り目指してたつけ？ というか、そんなきつつい授業内容に最近ちよつと慣れ始めた自分が怖い。

「なんだその顔は？」

「いえ、何でも……ありません」

なのでこの場にいた生徒全員、啞然とした顔をして許されると思  
うんです、ハイ。

さて、ここには俺、織斑、木刀さん、オルコツト嬢、凰、菊池が呼  
び出されている。

勿論理由は明白で、昨日のIS襲撃事件についての事情聴取と、再  
度の箝口令を出す為だ。

昨日の時点で簡単な聴取と口止めはされていたが、それを改めて、  
という訳である。

事情聴取は兎も角、箝口令の部分が重要で、一、二組の担任と副担  
任がこの場に揃っている事（更に言えば織斑先生は学年主任）からも  
その重要さが察せられる。

この場に呼ばれた生徒は皆最後まであの場において、襲ってきたIS

が無人機だったというのを目撃したメンバーだ。  
無人機。

それは各国の専門の機関が開発に乗り出すも、未だ研究段階を出ない代物である。

例えばドローンや無人偵察機等、遠隔もしくは自動操縦で動く代物というのは民間から軍事まで幅広く運用されているが、それらは今の所単純作業や決められた行動をするだけの存在である。

それがISで、しかも不確定要素ばかりの近接戦闘までこなしていたのである。少なくとも今現在のAI技術でISを実戦レベルで動かすのはスタンドアローン方式は不可能の筈だ。

ならば遠隔操縦ならどうか。

例えばオルコット嬢のブルーティアーズ。

アレのビットのように操縦するとしたら？

確かにそうすれば不可能ではないだろうが、それだと操縦する側とされる側、二機分のISが必要になり、コストとりターンのバランスが取れない。

もつと言えば、ISを動かす為のエネルギーの問題もあるし、デメリットに関しては言い出したらキリがない。

あえてメリットを上げるとすれば、人命を危険に晒さなくていい事くらいか。

他にもメリットデメリットがあるかもしれないが、足りない頭で思いつくのはこれくらいだろうか。

兎も角、そんな扱いに困るものを軽々しく口にしてはまたぞろ厄介な問題が発生しかねない故の箱口令だった。

「ま、それがいつまで通用するかは謎なんやけどなー」

と、疲れた様子でナナコ先生は言った。

色々対応に追われていたんだろう。お疲れ様ですとしか言いようがない。

「新年度早々こんな事になって、先が思いやられます……」

あ、山田先生が重症っぽいな。

だけど誠に遺憾ではあるが、多分今年は波乱の一年になると思いま

すよ。全くだどこ行った平穩、早く帰って来い。いや、ホント、マジで。そんな感じに一時間程教師陣からの話（と愚痴）を聞き、解散の流れになったのだが、

「あ、篠ノ之さんと貴方は居残りです」

と、山田先生に呼び止められた。

「え？　なんでです？」

「貴様ら、IS同士の戦いの場に生身で近づいただろ。危険行為をしたという事で反省文を書いてもらう」

うげつ、と思わず変な声が出た。

「いや、でもあれにはそれなりに理由が……」

「確かに分からんでもないんやけどやな、やっぱり危険行為は見逃せへんよ。ま、事情も事情やし、原稿用紙一枚分くらい書いてくれたらそれでええから」

要は形式上、必要だからって事らしい。

あの場に生身でいるなんて、自殺行為にも等しいと言われれば反論しようもないので、仕方ないか。

そういう訳で他の連中を見送り、大人しく木刀さんと共に反省文を書く事になった。

「……………」

大人しく反省文を書きつつ、木刀さんの様子を窺う。

木刀さんは黙って反省文を書いているが、どこか遠くを見ているよな、心ここに在らず、といった様子だった。

そういえばここに来た時からずつとこの調子で、何か思いつめているようであった。

少し気にはなるが俺は特に何か言う事もなく、そのまま三十分程で反省文を書きあげた。

「先生、お願いします」

「はい、確かに。もう戻ってもらって構いませんよ」

「ういっす」

席を立ち、残ってくれた山田先生に反省文を渡し、生徒指導室を出て行くこうとするのだが、



「ま、待ってくれ。少し話があるんだ。すぐに書き終わるから」  
何故か木刀さんに呼び止められてしまった。

「ん？ ……別に良いけど」

特に急ぐ理由もなかったので、そのまま席に座りなおして木刀さんが反省文を書き終わるのを待つことにした。

木刀さんが反省文を書き終えるまで暫く、何をするでもなくぼう々と待ち続けた。

指導室内には木刀さんがペンを走らせる音だけが鳴っていた。

この学園において、誰かという状況でこんな静かなのは数えるほどしかないなと思いつ返す。

皆キャラ濃いからな。誰がどう濃いかについては言及を避けるけど。

そういえば山田先生は何をしているのかと振り返ると、情報端末を開いて熱心に画面を見ていた。雰囲気から察するになにか電子書籍でも読んでいるのだろうか。

ただ、姿勢が少し前かがみになっていて、ただでさえ大きい胸なのにそれが首元からより覗けるような角度でこちらから見え、非常に教育に悪かった。勿論眼福である。

もつと眺めていた誘惑を辛うじて振り切り、木刀さんを横目で見ると、これまた豊かな胸部装甲造形が真横から見れた。

その立体感は素晴らしいの一言であり、よく見ると胸に限らず身体のバランスや各部の肉の付き方等も制服姿から察せられる範囲だけでもかなりの高レベルで、非常に目に毒であり、そして目に優しかった。

……あー、エロと思考が直結してんなあ。

考える端から頭を空っぽにするようにアホな考えを捨てているので、欲情する程ではないがどうにも馬鹿だろ俺。いや落ち着けよ。女子高で生活することになって色々鬱憤が溜まっているのだろうか。そろそろここらで一度発散させとくべきだろうか。いやだから落ち着け。

しかし木刀さん、こうやって黙って静かにしていれば結構な美人さ

んなんだよな。普段の言動がちと残念で破天荒なだけで。

なんて事を考えていると、

「ふう。終わった。……あ、なな、何だ？」

「いや？ 何も」

反省文を書き終えた木刀さんがこちらに気付いたが、なんだろう？

いつもより動揺が大きい気がする。

「はい、じゃあここ閉めますからね。早く出てくださいね？」

少し疑問に思うも、山田先生に声をかけられ、木刀さんと共に大人しくその場を後にした。

そして暫く廊下を歩いたところで、木刀さんに尋ねた。

「で、話って何さ？」

「うっ、その、出来れば人に聞かれたくないんだが」

と、言われたのでさてどうするか。

今の時間帯だともうすぐ夕食時である為、人が集まりだす食堂は使えないだろう。屋上で話すにしても、島の上という立地の為に夕方以降はちよつと風が強くと落ちて着いて話せるという感じでもない。となれば……、

「じゃあ、教室に戻るか。流石にもう誰も残っていないだろうし」

「ああ、それで構わない」

同意を得られたので、教室へ。

その間、やはり木刀さんは無言だった。

いつもと違う態度に、それ程重要な話でもするのだろうかと思いを傾げるも、それもすぐに分かるかと思ひ直す。

まあ、実の所。

——俺は木刀さんが少々苦手だったりする。

そりゃあ折角作ったプラモぶつ壊されて、命辛々助けたと思ったら殴られりや、俺じゃなくても良い感情はないだろう。

そうでなくとも普段の織斑に対するツンギレっぷりを見てれば、なんというか……引くよね？

とまあ、あまり俺の評価は宜しくないのだが、だからといって嫌いか？ と問われれば首を横に振るう。

今まで木刀さんから色々被害を被ってきた訳だが、ワザとやったわけでも悪意があつた訳でもないからだ(多分)。

何故そこまでされて嫌わないのかと問われれば、出来るだけ人を嫌う事はしたくないからだ、と俺は答える。

座右の銘は日々平穩。標語は皆で幸せになろうよ。事なかれ主義と笑いたければ笑え。それが俺の基本スタンスだ。

とまあ、無駄な脱線をしている間に教室に到着。

教室の真ん中辺りで木刀さんと向き合う。

「……で、話つて?」

なんとなく言いくそうにしているので、こちらから話をするよう促す。

「その、な……。き、昨日はすまなかつた!」

「お、おおう?」

それでも暫く口籠っていたが、腹をくくつたのか勢い良くこちらに頭を下げた。

とうにか勢いつきすぎて、跳ねたポニーテールが鞭のようこちらに飛んできたんですが。勿論避けましたよ? ええ。

「俺を殴った件か?」

「ああ。折角助けてくれたのに思わず殴ってしまった」

いやまあ、あれは俺も少しは悪い訳で。多分倒れて手を着いた時、木刀さんの胸触った筈だからな。人生初のラッキースケベでした。

……思いつきり殴られた所為で感触思い出せないけど。

「いやらしく手を動かすなっ!」

「ア、ハイ。スンマセン」

正直もつたいたいとは思ったが、口には出さない方が賢明って、俺、IS学園で学んだよ?

「……実はな、助けてくれたのがお前じゃなくて、一夏なら良かったのにと思ってたんだ」

……そんな事も言ってたな。

「命の恩人にそんな事を思うなんて最低だろう? 私自身そう思う」

うん、まあ、確かに。あまり褒められたものではないな。

けどそれを被害者である俺に、正直に自分から言ってきたくれるのは悪くないと思う。

「だから私の事を罵ってくれて構わない。なんなら殴ってくれても構わない。お前にはそれだけの、恩を仇で返すような事をしたんだから」

自罰行為の為ってのがマイナスだけど。

今回だけじゃない。IS学園に来る以前からも、思わず誰かを傷つけてしまう事があつたんだと彼女は言う。

成程、彼女の態度からその以前の事も含み、後悔も反省もして、俺に対しても後ろめたく思っているのは分かった。

だから俺は、木刀さんの言葉に対して、

「ハアアア~~~~」

思いつきり溜息をついたのだった。

「な、なんだその態度は！こつちが謝っているのに!!」

「あーうん。そのな？木刀さんが誠心誠意を以て謝ってくれているのは分かるんだ。けどだからって罰を求められても困る。ってか、実際にやったら俺が悪役になっちゃやし。それにな、そんな事をしても楽になるのお前だけじゃん？」

開き直らないだけマシではあるが。

俺は思うのだ。私は罪を犯した。だから罰を受けました。よって償われました。だから満足です。そうじゃねえだろう、と。

確かに償ってもらわないといけない事も世の中にはあるが、今回の件に関しては俺は別にそこまで思っていないのだ。

その代り、俺の平穩の為に協力はしてもらおう——。

「じゃあ私は一体どうしたら良い!？」

「変われば良いんじゃない？」

「え?」

今のままで、今の自分では迷惑をかける、誰かを傷つける、そんな自分が嫌だというのであれば。

「そんなに今の自分が嫌なら変わるしかないんじゃないかな。自分自

身とは縁を切ることなんて出来ないんだし」

「そ……そんな簡単に言うが、それが出来ていれば苦労はしない!!」  
今まで木刀さんと会話してきた中で、一番力の籠った叫びだった。  
きつと彼女なりに努力した事もあったのだろう。切実さが声に表  
れていて、視線も揺れている。

「そりや、今すぐには無理だろうさ。だけど、ちよつとずつならどうに  
かなるかもよ?」

「そこまで言うからには、何か考えがあるのか?」

「大した事じゃないんだけどな」

ちよつと一計を案じてみようかな、と。

という訳で再び移動である。

向かう場所は木刀さんの寮室だ。

そこまでの道すがら、俺は木刀さんから色々話を聞き情報収集をす  
る。

内容は人間関係についてだ。

何故そんな事を聞くかというところ、今までの彼女を思い返すに、彼女  
が発端となったトラブルの原因は人付き合いに対する経験値が足り  
ていないのではないかと思っただ。

ぶつちやければ、コミュニケーション能力の不足。スラング的な言  
い方をすればコミュ障だ。

すぐに手が出る、我慢強くない、頑固、周りが目に入らない、子供  
の癩癩かと思えるくらいに歳不相応に感情の起伏が激しい、等々。

いくらか誇張も入るが、概ねこんな感想を抱くことは難しくない。  
言われて木刀さんが吐血したが、知ったことじゃない。かつこ笑  
い。

じゃあ人間関係の経験値を意図的に得るにはどうしたら良いか。

皆と会話をしたら良いのである。

「しかし私は口下手で、その、……話すのは苦手なんだ」

「そうか? 俺や織斑とかとは会話できてるだろ。現にこうして話し  
てるんだし」

「それは、そうだが……」

俯く木刀さん。変なところで自信がないな、この娘は。

確かに織斑やその周り以外の人と喋っている姿を殆ど見たことがなかったが、割と重症のようだ。

だがそれも仕方ない事なのかもしれない。

小さい頃から各地を転々とし、友達を作ってもすぐに別れる生活を送っていて、次第に自分から友達を作る事をやめていた、という事情があったのだし。

そんなだから意識が自分の内へ内へと向き、以前から習っていた実家がやっていった剣道に打ち込むしかなく、気付けば周囲に友人と呼べる存在がいなくなっていたらしい。

……うん、これ、思った通りへビイな話だったわ。

けど、めげてはいけない。彼女の為、ひいては俺の為にならないのだから。

そんなこんなで俺達は一〇五二号室に到着。ノックする。

「態々する必要あるか？ 鍵ならあるぞ？」

「良いんだよ。これから二人でお願いするんだから」

礼儀というかなんとか。心の持ちようの話だ。

「はい」

と、扉の奥から声が聞こえてくる。いってくれて助かった。

「やつ」

「あれ、どうしたの？ 珍しい組み合わせだね」

現れたのは木刀さんの同居人、そして一組最後の良心、鷹月さんだ。

以前織斑の歓迎パーティーの設営の手伝いをした時に少し話をした子だ。

あの時も思ったが、やっぱりしつかり者の雰囲気があり、委員長みたいな職が似合う子だなと感じる。

……この子ならお願いしても大丈夫かな。

「まあな。で、実は頼みたいことがあってさ」

かくかくしかじかうまうまと、事情を説明。

彼女は話を聞いてうんうんと頷き、

「それで、私にどうしてほしいの？」

「ちよつと考えがあつてさ。木刀さんと一緒に毎日ドラマとか映画とかを観て感想を言い合つてもらいたいんだよね」

「うん?」

「どういう事?」

俺の言葉に、二人は首を傾げる。

「いやさ、木刀さんの話を聞くとさ、口下手以前に人付き合いの知識そのものが足りてない気がしたんだよ。あまり娯楽自体してないって言うし。ほら、普通は学校以外でも家でテレビ見たり本読んだりして、無意識にその辺の知識を吸収したり影響されたりするってあるだろ? だから今からでも少し駆け足になるけど見て体験してもらおうかと」

「成程ね」

無理のない範囲でと考えたら、毎日一〜二時間くらいか。ドラマなら一話か二話分。映画なら一本分で鑑賞会をしてくれたら良いんじゃないかと。

「……それ、上手くいくと思う?」

「実は三、七で分が悪いかなあとは思ってる」

鷹月と一緒に頷き合う。

「おい貴様」

自分の胸に手を当てて考えてみるよ木刀さん。それに俺だって本職のカウンセラーとかじゃないんだから。

「私の趣味でも良いの?」

「常識の範囲内なら。健全に頼むぜ健全に。あと恋愛要素が入ってる作品だと後々織斑の苦労が減る、かもしれない。だからって激甘な恋愛系ばかり見えて恋愛脳になって貰っても困るから程々にな」

どうやら前向きに協力してくれるらしい。軍資金に関しては電子マネーを鷹月が使えるようにして一万円分渡しておいた。

最初は遠慮した鷹月だが、IS関係のスポンサー料で小遣いはあるからというのとデザート数回分で納得し、受け取ってくれた。

「おすすめの商品とかある?」

「バック・トゥ・ザ・タイムと回る大捜査線」

「ああ、好きそうだよね君」

「そっちは？」

「プリティイー・ガールとオーリー」

「恋愛系と感動系かあ。まあこの辺りを攻めてもらえると助かるか」

あ、木刀さんが不思議そうな顔をしてる。結構名作ばかりなんだが聞いた事すらないか。

兎も角、鑑賞後に感想を言い合うのが大切だと思っている。

ただ漫然と観るだけではなく、それがどんな話で、登場人物がどう思っただ行動したかというのが理屈で分かるし、議論そのものが人付き合いの練習にもなるだろう。

そういった事を期待しているんだが、上手くいくと良いなあ。

「上手くいくかは分からんが、取り敢えずやってみる。本当にすまんな」

「いいのいいの。回りまわって俺の為になるんだから。いや、ホントに。もう二度と御免だぜ？ 正直に言えばプラモの件は未だに根に持ってるし」

「それに関しては本当に申し訳なかった」

木刀さん、最敬礼である。

こうして木刀さんこと、篠ノ之箒性格矯正プログラムは始動した。

暫くの後、仲間内以外の人とも険のとれた表情で会話している木刀さんを見る事になり、少しは効果があったのだろうと思うのだった。



## その12

その日、朝のホームルームで、同じ出来事がありながらも一組と二組は明らかに温度差があった事だろうと思う。

何故ならこの二クラスに転入生がやって来たからだ。

どこぞの中華系まな板少女（言ったら殺される。おい何故今こつちを見た？）よろしく、時期的に微妙すぎるタイミングで、だ。

これは明らかに外部からの圧力があつたと思われる。それで良いのかI S学園。

ただ学園側も不祥事さえ起こさなければ妥協できる面もあつただろうし、メリットがないという訳でもないのだろう。

例えば、無茶なねじ込みを強要してきたドイツとフランスに貸しを作る、みたいな。

という訳で、確実に俺と織斑目当てだろう転入生を紹介しようと思う。

まずは一組に転入してきた、ラウラ・ボーデヴィツヒから。

ストレートに背中に垂らされた銀髪と左目の眼帯と反対側の赤い目、そしてその他者を寄せ付けようとしない、剥き出しの刃物のような雰囲気纏った少女だ。

転入初日に大恥をかいだ丘陵系女子（だから何も言っていないのに睨んでくるな）よりも尚小さい身体から放たれるそれは、まるで軍服のように改造された制服と相まって、お堅い職業軍人を思わせる。

実際、彼女の周りの空間は少し空いており、明らかに避けられている節があつた。

なんでも最初の挨拶の時に名前を告げた後、堂々とお前達と仲良し小良しをするつもりはないと宣言したそうな。

しかもその直後に漸く見つけた怨敵に対するが如く、織斑を殴り飛ばしたとか。しかもグーで。

どうやら何か理由があるようではあるが、織斑曰く心当たりどころか会った事すらない、との事。

どこで恨みを買っているか分からないという良い例なので、俺も気

を付けようと思う。真面目に。

一方二組には、ボーデヴィツヒとは真逆のような雰囲気少女がやって来た。

シャルロット・デュノア。

彼女がナナコ先生に呼ばれて教室に入ってきた時の皆の反応は、それはもう物凄いものだった。

優雅さや気品等が求められる英国貴族であり、その為手入れも完璧であろうオルコット嬢にも負けない輝きを放つ金髪と、顔面偏差値が高いIS学園においても更に抜きん出た中性的な美貌を持った彼女はそれだけでも世の男共はもとより、その気になれば同性にさえ惚れさせる事すら可能だろう。

そして更に俺達を驚かせたのは、彼女の服装である。

性別を偽っている訳でもないのに、俺と同じ男子の制服に身を包んでいたのだ。

所謂、男装の麗人という奴である。

しかも先日失恋した防御力ゼロ乙女（心が読めるとでもいうのか貴様）が羨むどころか恨みさえ抱きかねない胸部装甲が、体型的に余裕がある筈の男子制服を押し上げている辺り、俺を殺しに来ていた。

某超有名ソーシャルゲームで言えば、紅顔の美少年、黄金律（体）、それにもしかしたらフェロモンのスキルさえ持っているのではないかという盛り具合だ。ふう、対魔力スキルを持っていなかったら危なかったぜ。

とまあ少々誇張込みではあるがそんな人物がやって来たのだ。教室が爆発したのかと思えるくらいの歓声上がるのも無理からぬことなのかもしれない。

言動もそれに恥じない落ち着きと穏やかな口調で、即日ファンクラブが出来る程だった。

「シャルロット・デュノアです。変な格好をしていると思うでしょうが、どうか気にせずお付き合いください」

朝の教室でそう自己紹介をしたデュノアは今、IS実習の授業で模擬戦をしているISの解説を行っていた。

織斑とオルコット嬢の専用機ではなく、その相手を務めている山田先生のラファール・リヴァイブの、だ。

なんとデュノアはフランスのISメーカーの社長の娘だそうで、自社製品を中心にISについては詳しいとの事。

解説中であるラファールもそんな自社製品の一つで、詳しくも簡潔な説明には感心する事この上ない。

「説明上手だねシャルロットさん」

「そうだな。成程、ここに編入してくるだけの知識はある訳だ。さて、実際の腕前も見たいものだ……」

都下とカーティス女史がそれぞれ感想を述べる。

皆そう思うよな、と思いつつ模擬戦をしている三機を目で追う。

元日本代表候補である山田先生は、現英国代表候補の専用機と篠ノ之博士謹製（ほぼ噂は事実だろうから断言しておく）の第三世代機二機を相手に苦戦するどころか翻弄していた。

運用思想が全く違うとはいえ、スペックだけで考えれば劣る機体でここまで優勢を保っているのは、ひとえに経験値の差だろう。

それこそ、

「よく見ているお前達。普段は頼りなく見えるかもしれないが、山田先生の実力は本物だぞ」

と、織斑先生の太鼓判を貰える程なのだから。

織斑とオルコット嬢の方も頑張っているのは分かるのだが、いかんせん、地力と連携の練度不足が目立って、機体の性能を十全に発揮できていない。

というか、それを分からせるように戦ってくれている山田先生の能力がマジで半端ない。

……教育者としてなら、織斑先生より山田先生の方が断然上なんじゃね？

なんて思ってたなら、ボールペンが飛んできたので二本指でキャッチしました。

……自覚があるんなら直そ？ 厳しいのが悪いとは言わないけど、たまには優しくしないと誰もついてきませんよ？

「お見事」

「いやあ、日々の特訓の成果ですかね」

なんだか最近、身体のキレがいいのだ。運動で身体能力を上げることが新しい趣味になりそうなくらいだった。

などと考えている内に、上空で戦っていた三人の内、織斑が被弾された際にバランスを崩し、こちらに向かって墜ちてきた。

どうやら被弾してからの立て直しに、無理矢理瞬時加速を使おうとしてタイミングを誤って暴発させたらしい。

「うおわあああああ!?!」

しかもコースが悪い。固まっている生徒達のと真ん中を突っ込んでくるような形になる。

逃げる時間はない。突然車が突っ込んでくるようなものだ。来ることが分かっているとしても生身の人間では対処する事などできない。

そう、生身の人間であれば――。

だから俺はこの場で最適解を持っている人間の名を叫ぶ。

「凰――」

「ラウラー!」

同時、織斑先生も解決手段を持つ者の名を叫んでいた。

この二人が持つ共通の手段――、それは勿論ISだ。

呼ばれた二人は瞬時に皆の前に出てISを起動させ、深みのある赤色の機体と、初見となる黒い機体を出現させる。

そして次の瞬間には凰の甲龍が前に出ようとするが、その予備動作で何故か動きを止めてしまう。

「な、なんでっ!?!」

しかしそれを一番驚いているのは、俺達ではなく凰本人だ。動こうとしない愛機に、狼狽した様子を隠せない。

だが時間は待つてはくれない。もうそこまで白式が迫ってきていた。

もう駄目かと思われたその時、黒の機体がおもむろに片手を白式へと向けた。

するとどうだ。ボーデヴィツヒが手を向けた先、あと数十センチで

ぶつかる、といったところで、織斑の動きが止まってしまった。

何かに受け止められたかのように、いや、それこそ一時停止ボタンを押したかのような動きの止め方だった。

「うえ？ あ、あれ？」

「……フン」

とても不機嫌そうな表情を隠しもせず、彼女が作動させたと思しき停止現象を解除する。

それと同時にバウンドしていて浮いたまま停止していた織斑が、その場で落下。鳳も動けるようになったらしく、駆けだしそうな姿勢からつんのめっていた。

……成程、鳳が動けなかったのもこの機能の所為だったか。

「ふう、良くやったラウラ。……それと織斑。放課後、職員室に來い」  
「これくらい当然です、教官」

「そんな千ふ……、はい、織斑先生」

なんだか織斑の方は、綺麗にオチが付いた形になったな。『落ち』だけに。まあ皆を危険に晒した上に自業自得なのでなんとも言えないが。

山田先生とオルコツト嬢も慌てて降りてきた。

特に山田先生の慌てぶりは凄いが、大丈夫ですよ。悪いのは全部織斑ですから。

「ちよつとアンター！ さつきなんでアタシまで止めたのよ！」

皆が安堵の息を吐き、いつもの織斑姉弟のコントを眺めていると、鳳の怒気が籠った声が響いた。

確かにあの時点でただ織斑を止めるだけであるなら、ボーデヴィツヒは鳳を止める理由はなかった筈だ。

ここにいる人間の殆どはボーデヴィツヒが使った「相手を停止させる力」を知らなかったが、それならそれで一声かけるなり、やりようはあった筈だ。

なのに何故？ という疑問は直後に彼女自身が語ってくれた。

「ハッ、貴様は二組の人間だったか？ だったら改めて言っておいてやる。私はISをファクションか何かと勘違いしているような連中

とつるむつもりはない。さつき貴様も止めたのも単純に邪魔だったからだ」

中々キツイもの言いだ。

これにはISに真剣に取り組んでいる者、特に専用気持ちや各国の代表候補生が反応する。

「なんですって〜！」

「聞き捨てなりませんわー！」

ほら、煽り耐性の低い専用機持ちが反応した。

二人の気持ちも分からないでもないし、横でカーティス女史が割と物騒な気配を放っている辺り、今のは相当な暴言だというのが窺える。

ただ、言った本人が現在ISを纏っている状態なので、同じく専用機を持っている者しか声を上げていないだけで、他にも憤りを感じているのが何人もいるのが察せられた。

そして俺にも分かる事が教師達にも分からない筈もなく、織斑先生は溜息を吐き、山田先生ですらあまりいい顔をしていない。

「貴様ら、その辺にしておけ。授業を続けるぞ」

織斑先生が無理矢理締めるが、どうにも面倒事になりそうな気配がする。転入生にまともな奴はいないのかね？

その後、いつも通り班に分かれてISの基礎訓練に励んだのだが、案の定、ボーデヴィツヒがやらかしてくれた。

専用機持ちという事で彼女も班長に選ばれていたのだが……。

「あ、あの、ボーデヴィツヒさん。どうやったら上手くできるか教え

……」

「ふん」

「うっ」

教えを請いに来たグループメンバーをバツサリと切り捨てていた。あれではリーダーやっていない意味はないのでは。

どうにも刺々しい態度が過ぎるのだ。

他にも口を開いたかと思えば、

「トロトロするな！ 教官の言った事は速やかに実行しろ！」

「クズが！ なぜこんな簡単な事が出来ない！ 教官の話を聞いていたのか！」

「貴様ら全員教官の前から消え失せろ!!」

罵倒、罵倒、罵倒の嵐だ。どこのブートキャンプだよ。ハ○トマン軍曹もびつくりの、ただの素人いびりだった。

……酷い。これは酷い。あの罵倒、愛の鞭とかじゃなくて、本当にただ貶しているだけだぞアレ。

どうやら最初からまともに物を教える気がないようだ。

彼女の様子を見てみると、教官と呼んでいる織斑先生以外は全員敵だとも思っているかのようなそぶりだ。そもそもここ、IS学園にいること自体が不服だともいうような。

どうにかしろよと織斑先生の方を見れば、深い溜息と共に額に手を当てていた。

「あー、デュノアさんや。俺ちよつと先生に言ってくるわ。流石にアレは周りも集中できないし、あの子らが可哀想すぎる」

「……あ、うん。そうだね。分かったよ」

自分のグループのリーダーをしていたデュノアに一言言っただけで俺はその場を離れた。

他のグループがそれぞれ練習している横を通り過ぎる。

班分けは専用機持ち五人十代表候補生一人をリーダーとして基本十人編成で分かれ、練習機二機を用いて先生に言われた事をこなしていた。

織斑班は木刀さんを中心にラブコメ的なハプニングを起こしつつ、なんとか課題を進めていた。

オルコット嬢の班は、リーダーの具体的すぎる教え方（角度や距離等の数値の列挙）に解りやすいと納得する者と、そうでない者がハッキリと分かれているのが印象的だった。

凰の所は、班を更に二つに分けて競い合わせる形で教えており、一番活発な印象だった。

新参者であるデュノアがリーダーを務める我が班は、最初のコンセ

ンサスを取るところで親交が少ない事が理由で若干遅れたが、それ以降は彼女の人柄と教え方が良いので順調に進んでいった。

そしてボーデヴィツヒ班を飛ばし、ロシアの代表候補生であるところの二組の女傑、カーティス女史がリーダーを務めるグループは、少々厳しくはあるがしつかりと教え教えられている様子だった。意外と面倒見が良いんだよな、カーティス女史。

こういった実習系の授業は後々二組クラス代表育成計画の参考にされるので、二組の中でも一部の者はメモを取っていたりする。

それらを横目で見つつ、織斑先生の傍までくると、

「どうした、何か問題でもあったか？」

「いやいやいや、何とぼけたこと言ってるんすか。新入生の態度つすよ、一組の方の」

言うつと織斑先生は、あからさまに目を背けた。

「先生、あの子と知り合いなんですよ？ どうにかしてくれませんかね。あそこの班の子達は勿論、周りもやり難いんですが」

「……分かつてはいる。だがすまんが、もう少し様子を見てやってくれないか。あれも色々複雑なんだ」

珍しい。織斑先生にしては歯切れが悪い。普段ならすぐにでもボーデヴィツヒに出席簿アタックを見舞うだろうにこの態度。何やら事情があるようだ。

「……分かりました。とりあえず今は黙ってます。けど、あの罵詈雑言はやめさせてくださいよ。流石にアレはないっすから」

「ああ」

そう言つて織斑先生はボーデヴィツヒを嗜めに行った。

「……はう」

「どうしたんです？ 山田先生？」

「いえ、どうして今年はこの厄介事が舞い込むのだろうかと……」  
「そんなの、IS学園に男子が入学してそのクラスの担当になって時点で諦めなきや駄目でしょ」

「ですよね……」

あ、目に見えて凹み始めた。



「まあ今度、飯くらい奢りますから」

「うう、はい……。ありがとうございます」

山田先生の目に浮かんだ涙を見ないように首を振ると、織斑先生に怒られて渋々といった様子で従うボーデヴィツヒの姿が見えたのだった。

今更ではあるが、IS使用可能施設であるアリーナ群と主に座学を行う校舎との間にはいくらか距離がある。

これは単純に安全面での問題で、万が一にIS戦闘での流れ弾や、先日の無人機襲撃等が例に上がる、事件事故による人的被害を避ける為だ。

お陰で授業に間に合う為には少々急がなければならないのが、生徒・教師共通の悩みの種だったりする。尤もその代わり、IS実習は通常の授業よりも五分遅れて開始され、逆に終了はその時の教師の匙加減ではあるが、五分早く終わることが多い。そしてその分割られた時間は土曜日に回される。

その分でいくと今回は色々問題があり(主犯はボーデヴィツヒ)、早めに切り上げられたので、俺はさっさと制服に着替え、二つあるうちのアリーナに近い方の食堂に向け、のんびりと遊歩道を歩いていった。今日は織斑や他の女子達とは特に一緒に昼食をとる予定もないので、一人である。

普段はその時その時の流れでつるむことはあるが、こういう日もある。特に実習後が多いのは言わぬが花、というものだろう。

などと考えていると、そろそろ校舎及び食堂が近くなってきた。ここまで来ると校舎の方で授業を終え、昼食を取りに来たり、アリーナに向かったりする生徒がちらほらと現れてくる。

その中で一人、一方的にはあるが見知った人物がいる。

いつぞやの、屋上で超高速タイプピングを行っていた女子である。

未だに名前は知らないが、四組代表で専用機持ちの日本の代表候補生だという子である。

いつも何となくすれ違う時に会釈をするくらいの関係なのだが、実

は問題が一つ。

彼女自身に問題はないのだが、時々、彼女の後ろに妙な人影があるのだ。

彼女と比べてスタイル抜群で手に扇子を持った、しかし彼女と似た容姿の二年生の影。

何を隠そう、あのイタイ先輩である。

普通に考えて姉妹なのだろうが、では何故姉であろうザンネン先輩はストーキングの真似事なんぞされていらっしやるのか。はなはだ疑問なのである。

妹がいる時は俺の事に気づいても悩殺ポーズをとるだけでこちらには近づかず、妹を追いかける事を優先していた。というかナナコ先生に注意された筈なんだが懲りてないのだろうか。

前々からその件で妹の方が心配だったので、意を決して、今日はその事について聞いてみようと思う。丁度、姉の姿も見当たらないし。

「あのさ、ちよつと良いか？」

「……え？ あ、えつと、なに？」

話しかけられるとは思わなかったのだろう。少し驚いた様子である。

「ああ、突然で済まない。ただ、少し聞きたいことがあつてさ」

「……別に良いけど、手短にお願ひ。やりたい事があるから」

取り敢えず、いきなり避けられるという事はないみたいだった。

その事に安堵しつつ、俺はいつも疑問に思っていた事を口にした。

だが話を進めるうち、段々と彼女の機嫌が悪くなつていくのを感じた。

「そう、そんな事が……」

静かにそう呟く姿には、件の先輩に対してあまり良い感情を持っていないのが窺えた。

「気分を悪くしたならすまん。何なら俺から先生に言って注意してもらおうか？」

「ううん、いいの。どうせ言つても聞かないだろうし。別に害がある訳じゃないから放つておいていいよ」

「そ、そうなのか？」

コクリと頷く妹さん。

どうやらドロドロの愛憎劇という訳でもなさそうではあるが。

「向こうは普通に仲の良い姉妹だと思っっているだろうから」

「ああ、そういう……。大変なんだな」

「貴方程じゃない」

事情が全然違うので単純に比べられる事ではないが、当面の心配はないという事なので、一応はそれで良しとする。

「けど、わざわざ心配してくれてありがとう」

「いえいえこちらこそ」

それを最後に俺達はそれぞれ方向に分かれた。

そしてその後、俺は食堂で食券を買ったところで思い出したのだ。た。

「あ、そういう名前聞いてないや」